

# 伊 良 原 IV

上伊良原マトコロ遺跡  
下伊良原フラノ遺跡  
下伊良原東向川原遺跡  
下伊良原羽後屋敷遺跡  
下伊良原中ノ切遺跡

福岡県文化財調査報告書 第255集

2017

九州歴史資料館

# 伊 良 原 IV

上伊良原マトコロ遺跡  
下伊良原フラノ遺跡  
下伊良原東向川原遺跡  
下伊良原羽後屋敷遺跡  
下伊良原中ノ切遺跡

福岡県文化財調査報告書 第255集

2017

九州歴史資料館

## 序

福岡県では、平成 18 年度より伊良原ダム建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施してきました。本報告書は、平成 22 年度から 24 年度にかけて行った、京都郡みやこ町に所在する上伊良原マトコロ遺跡、下伊良原フラノ遺跡、下伊良原東向川原遺跡、下伊良原羽後屋敷遺跡、下伊良原中ノ切遺跡の調査の記録です。

各遺跡はそれぞれ、祇川が流れる谷底平野の両岸に形成された幅の狭い河岸段丘上に立地しており、縄文時代から近世以降にいたる人々の生活の痕跡が確認されました。特に、縄文時代については、早・前期から晩期にいたる多様な遺構・遺物の出土が見られ、県下でも数少ないこの時期の資料を蓄積することができました。

本報告書が教育、学術研究とともに、文化財愛護思想の普及・定着の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査・報告書の作成にいたる間には、関係諸機関や地元をはじめ多くの方々にご協力・ご助言をいただきました。ここに、深く感謝いたします。

平成 29 年 3 月 31 日

九州歴史資料館

館長 杉光 誠

## 例言

1. 本書は、県営哉川流域総合開発事業(伊良原ダム建設事業)にともなって平成22～24年度に発掘調査を実施した、京都府みやこ町上伊良原所在の上伊良原マコロ遺跡、同下伊良原所在の下伊良原フラノ遺跡・下伊良原東向川原遺跡・下伊良原羽後屋敷遺跡・下伊良原中ノ切遺跡の調査の記録である。伊良原ダム関係埋蔵文化財調査報告の第4集にあたる。
2. 発掘調査と整理報告は、福岡県県土整備部河川開発課の執行委任を受け、平成22年度については福岡県教育庁総務部文化財保護課が、平成23年度以降については九州歴史資料館が実施した。
3. 平成23年度から、福岡県教育庁総務部文化財保護課の文化財発掘調査業務は、組織改編のため、九州歴史資料館に移管された。
4. 本書に掲載した遺構写真の撮影は木下修が、また遺物写真の撮影は北岡伸一が行った。空中写真の撮影は(株)空中写真企画に委託し、ラジコンヘリコプターによる撮影を行った。
5. 本書に掲載した遺構図の作成は木下修・小川泰樹が行い、発掘作業員が補助した。
6. 出土遺物の整理作業は、九州歴史資料館において、秦憲二の指導の下に実施した。
7. 出土遺物および図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館において保管する。
8. 本書に使用した周辺遺跡分布図は国土交通省国土地理院発行の1/25,000地形図「伊良原」を加筆変更したものである。また、本書に掲載した調査区位置図は、みやこ町発行の1/2,500地形図と、福岡県行橋土木事務所(現京茶原土整備事務所)が作成した1/1,000地形図を加筆変更したものである。本書で使用する方位は、世界測地系による座標北である。
9. 各遺跡の調査は木下が担当した。報告書の執筆は、遺構と一部の出土遺物について木下が執筆した原稿を小澤佳恵・小川泰樹が加筆修正し、あわせて一部の遺物について小澤が執筆した。最終的な文責は小澤にある。本書の編集は小川が担当した。

# 目次

I	はじめに	1
1	調査に至る経過	1
2	調査の組織	3
II	位置と環境	5
1	地理的環境	5
2	歴史的環境	5
III	上伊良原マトコロ遺跡の調査報告	11
1	遺跡の概要	11
2	調査の経過	11
3	調査の成果	13
	(1) 基本土層	13
	(2) 調査の概要	17
	(3) 上層の遺構と遺物	19
	① 竪穴状遺構	19
	② 掘立柱建物跡	20
	③ 横列	21
	④ 溝	22
	⑤ その他の上層出土遺物	23
	(4) 下層の遺構と遺物	29
	① 遺物包含層	30
	② 竪穴状遺構	33
	③ 土坑	38
	④ その他の出土遺物	39
4	小結	41
IV	下伊良原フラノ遺跡の調査報告	43
1	遺跡の概要	43
2	調査の経過	43
3	調査の成果	45
	(1) 基本層序	45
	(2) 遺構と遺物	45
	① 溝	45
	② 土坑	46
	③ 落ち込み状遺構	48
	④ 遺物包含層	48
	⑤ その他の出土遺物	49
4	小結	51
V	下伊良原東向川原遺跡の調査報告	53
1	遺跡の概要	53
2	調査の経過	53
3	調査の成果	54
	(1) 基本土層	54
	(2) 上層の遺構と遺物	54
	① 貯蔵穴	54

②土坑	58
③落ち込み状遺構	59
④溝	60
⑤杭列	61
⑥畝状遺構	61
(3) 下層の遺構と遺物	62
①調査区割と検出遺構、土層	62
②下層遺物包含層の調査概要	63
③下層遺物包含層の出土遺物	63
④土坑	65
⑤その他の出土遺物	69
4 分析	72
5 小結	78
<b>VI 下伊良原羽後屋敷遺跡の調査報告</b>	<b>79</b>
1 遺跡の概要	79
2 調査の経過	79
3 調査の成果	81
(1) 基本層序	81
(2) 調査の概要	82
(3) 遺構と遺物	82
①土坑	82
②土墳墓	84
③その他の出土遺物	86
4 小結	89
<b>VII 下伊良原中ノ切遺跡の調査報告</b>	<b>90</b>
1 遺跡の概要	90
2 調査の経過	90
3 調査の成果	92
(1) 基本層序	92
(2) 上層検出の遺構と遺物	93
①廃棄土坑	93
②掘立柱建物跡	94
③柵列	97
④土坑	99
⑤土墳墓	102
⑥上層遺構面の柱穴出土遺物	102
(3) 下層検出の遺構と遺物	105
①調査区の設定と調査成果の概要	105
②南側試掘グリッド A～E 区の調査	105
③北側調査グリッドの調査	106
④包含層出土遺物	108
⑤下層検出遺構	110
(4) その他の出土遺物	115
4 小結	120
<b>VIII おわりに</b>	<b>121</b>

# 図版目次

## 上伊良原マトコロ遺跡

- 図版 1 1 調査前の上伊良原マトコロ遺跡(西から) 2 I区全景(西から)
- 図版 2 1 I区全景(南西から) 2 II区全景(北から) 3 II区南半と護岸(南から)
- 図版 3 1 III区からIV区をのぞむ(北から) 2 IV区全景(南から)  
3 IV区縄文調査区(南から)
- 図版 4 1 I区北壁土層 2 II区西壁土層 3 IV区北壁土層
- 図版 5 1 1号竪穴状遺構(西から) 2 I区掘立柱建物跡・2・3号櫛列(北から)  
3 1号櫛列(南から)
- 図版 6 1 2号竪穴状遺構上面(南から) 2 2号竪穴状遺構(南から)  
3 2号竪穴状遺構遺物出土状況
- 図版 7 1 1号土坑(南から) 2 2号土坑(西から) 3 4号土坑(東から)
- 図版 8 1 III区8層直上の調査区全景(南から) 2 IV区9層直上の調査区全景(南から)  
3 IV区8層遺物出土状況
- 図版 9 上伊良原マトコロ遺跡出土遺物その①
- 図版 10 上伊良原マトコロ遺跡出土遺物その②

## 下伊良原フラノ遺跡

- 図版 11 1 下伊良原フラノ遺跡全景(東から)  
2 遺跡より伊良原小学校をのぞむ(西から) 3 調査区全景(南から)
- 図版 12 1 北壁土層(南西から) 2 1号溝・土層(南から)  
3 1号落ち込み状遺構(南から)
- 図版 13 1 北西端の下層調査区(西から) 2 1号土坑(東から) 3 2号土坑(南から)
- 図版 14 下伊良原フラノ遺跡出土遺物

## 下伊良原東向川原遺跡

- 図版 15 1 調査前の下伊良原東向川原遺跡と祓川(北から)  
2 ドングリ貯蔵穴群全景(南から)
- 図版 16 1 遺跡南半全景(北から) 2 遺跡中央部全景(西から)  
3 遺跡北半全景(西から)
- 図版 17 1 南壁基本土層 2 下層調査グリッドH-10区基本土層  
3 下層調査グリッドK-6区基本土層
- 図版 18 1 貯蔵穴群(西から) 2 1号貯蔵穴内ドングリ出土状況(上層)  
3 1号貯蔵穴土層(東から)
- 図版 19 1 2号貯蔵穴上層遺物出土状況(東から) 2 3号貯蔵穴上層遺物出土状況(西から)  
3 3号貯蔵穴完掘状況(南西から)
- 図版 20 1 5・6号貯蔵穴(北から) 2 5～8号貯蔵穴(北から)  
3 1・2号溝と5号貯蔵穴(北から)
- 図版 21 1 1号土坑(南から) 2 2号土坑(西から) 3 杭列(南から)
- 図版 22 1 1・2号落ち込み状遺構(西から) 2 1号落ち込み状遺構土層(南から)  
3 2号落ち込み状遺構土層(北から)

- 図版 23 1 C・D - 11・12区上層(南から) 2 C・D - 11・12区4b層遺物出土状況  
3 C・D - 11・12区5層完掘状況(南から)
- 図版 24 1 F ~ H - 10・11区完掘状況(西から) 2 H - 11区5層遺物出土状況  
3 3・4号土坑(南から)
- 図版 25 1 J ~ L - 4 ~ 6区遠景(北西から) 2 J ~ L - 4 ~ 6区完掘状況(西から)  
3 K - 5区4b層遺物出土状況
- 図版 26 1 5号土坑上層掘削状況(南から) 2 5号土坑遺物出土状況(南東から)  
3 5号土坑完掘状況(西から)
- 図版 27 下伊良原東向川原遺跡出土遺物

#### 下伊良原羽後屋敷遺跡

- 図版 28 1 下伊良原羽後屋敷遺跡全景(北から) 2 下伊良原羽後屋敷遺跡全景(東から)  
3 下伊良原羽後屋敷遺跡全景(西から)
- 図版 29 1 調査区中央部の基本土層(南から)  
2 段落ち部の黒灰色粘質土層堆積状況(南から) 3 1号土坑(西から)
- 図版 30 1 3号土坑(西から) 2 2・4号土坑(西から) 3 4号土坑大石除去後(西から)
- 図版 31 1 1号土壙墓(西から) 2 2号土壙墓(南から) 3 Pit16の管状土鍾出土状況
- 図版 32 下伊良原羽後屋敷遺跡出土遺物

#### 下伊良原中ノ切遺跡

- 図版 33 1 下伊良原中ノ切遺跡上空より北をのぞむ  
2 下伊良原中ノ切遺跡上空より南をのぞむ
- 図版 34 1 下伊良原中ノ切遺跡全景(上が北) 2 下伊良原中ノ切遺跡中央部全景(上が北)
- 図版 35 1 調査区北半(南から) 2 調査区南半(北から) 3 調査区遠景(北から)
- 図版 36 1 北東壁基本土層(西から) 2 北壁基本土層(南から) 3 南西壁基本土層(北から)
- 図版 37 1 廃棄土坑群全景(東から) 2 1号廃棄土坑(南から) 3 2号廃棄土坑(南から)
- 図版 38 1 3号廃棄土坑(北から) 2 3号廃棄土坑出土石材の矢跡  
3 4・6号廃棄土坑(北から)
- 図版 39 1 1号掘立柱建物跡(東から) 2 3号掘立柱建物跡(北から) 3 1・2号横列(北から)
- 図版 40 1 3 ~ 5号横列(東から) 2 1号土坑(南から) 3 3号土坑(西から)
- 図版 41 1 4号土坑(南から) 2 5号土坑(南から) 3 8号土坑(北から)
- 図版 42 1 1号土壙墓(北から) 2 Pit17の小皿出土状況 3 Pit44の土師器坏出土状況
- 図版 43 1 下層調査グリッド(南西から) 2 下層調査グリッド(北西から)  
3 下層調査区B区(東から)
- 図版 44 1 下層調査区D区(東から) 2 下層調査区E区(西から)  
3 下層E区6層遺物出土状況
- 図版 45 1 1号竪穴状遺構(南から) 2 6号土坑(南から) 3 9号土坑(東から)
- 図版 46 1 11号土坑(東から) 2 12号土坑(東から) 3 13号土坑(南から)
- 図版 47 1 下層グリッドE - 9区完掘状況(南から)  
2 下層グリッドF - 10区完掘状況(南から) 3 下層グリッドI - 7区完掘状況(南から)
- 図版 48 下伊良原中ノ切遺跡出土遺物その①
- 図版 49 下伊良原中ノ切遺跡出土遺物その②
- 図版 50 下伊良原中ノ切遺跡出土遺物その③

## 挿図目次

第1図	伊良原ダム関係遺跡位置図 (1/10,000) .....	2
第2図	みやこ町と伊良原ダムの位置 .....	4
第3図	周辺遺跡分布図 (1/50,000) .....	7
第4図	上伊良原マトコロ遺跡周辺地形図 (1/2,500) .....	9
第5図	上伊良原マトコロ遺跡調査区位置図 (1/1,000) .....	10
第6図	遺跡周辺表採の経筒実測図 (1/3) .....	13
第7図	上伊良原マトコロ遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ区基本土層図 (1/60) .....	13
第8図	上伊良原マトコロ遺跡Ⅰ区遺構配置図 (1/200) .....	14
第9図	上伊良原マトコロ遺跡Ⅱ区遺構配置図 (1/200) .....	15
第10図	上伊良原マトコロ遺跡Ⅳ区上層遺構配置図 (1/200) .....	16
第11図	1号竪穴状遺構実測図 (1/60) .....	18
第12図	1号掘立柱建物跡、1～3号櫛列実測図 (1/60) .....	20
第13図	1～3号溝断面・土層図 (1/40) .....	22
第14図	上層各遺構出土土器実測図 (1/3) .....	22
第15図	その他の上層出土土器実測図その① (1/3) .....	24
第16図	その他の上層出土土器実測図その② (36は1/4、他は1/3) .....	26
第17図	上層出土土器、土製品、鉄器、銭貨実測図 (1～3・21～23は1/2、他は1/3) .....	29
第18図	Ⅳ区土層図、Ⅲ・Ⅳ区下層遺物垂直分布図 (1/60) .....	30
第19図	Ⅲ・Ⅳ区下層遺構配置図、遺物平面分布図 (1/300) .....	31
第20図	下層遺物包含層中出土土器実測図その① (1/3) .....	32
第21図	下層遺物包含層中出土土器実測図その② (1/3) .....	34
第22図	下層遺物包含層中出土土器実測図その③ (1/3) .....	35
第23図	下層遺物包含層中出土土器実測図その④ (1/3) .....	36
第24図	2号竪穴状遺構実測図 (1/60) .....	36
第25図	2号竪穴状遺構・Pit2出土土器実測図 (1/3) .....	37
第26図	1～4号土坑実測図 (1/30) .....	39
第27図	下層各遺構等出土土器実測図 (1～5は1/2、他は1/3) .....	40
第28図	下伊良原フラノ遺跡・下伊良原羽後屋敷遺跡周辺地形図 (1/2,000) .....	42
第29図	下伊良原フラノ遺跡遺構配置図 (1/300) .....	44
第30図	下伊良原フラノ遺跡基本土層図 (1/60) .....	45
第31図	1号溝土層図 (1/40) .....	45
第32図	1～4号土坑実測図 (3号土坑は1/20、他は1/40) .....	47
第33図	各遺構出土土器実測図 (1は1/4、他は1/3) .....	49
第34図	その他の遺跡出土土器実測図 (10・12は1/4、他は1/3) .....	50
第35図	遺跡出土土器実測図 (1・2は1/2、ほかは1/3) .....	51
第36図	下伊良原東向川原遺跡周辺地形図 (1/2,000) .....	52
第37図	下伊良原東向川原遺跡遺構配置図 (1/300) .....	折込
第38図	下伊良原東向川原遺跡基本土層図 (1/40) .....	54
第39図	下伊良原東向川原遺跡上層主要遺構配置図 (1/1,000) .....	55
第40図	貯蔵穴群配置図 (1/300) .....	55
第41図	1～5号貯蔵穴実測図 (1/30) .....	56
第42図	6～8号貯蔵穴実測図 (1/30) .....	57
第43図	1・2号土坑実測図 (1/30) .....	58
第44図	1・2号落ち込み状遺構、1～4号溝実測図 (1/60) .....	59
第45図	1・2号落ち込み状遺構出土土器実測図 (1/3) .....	60
第46図	杭列実測図 (1/60) .....	62

第 47 図	下層遺物包含層調査グリッド土層図 (1/60) ……………	62
第 48 図	下層遺構配置図・包含層調査グリッド位置図 (1/1,000) ……………	63
第 49 図	I 区遺物分布図 (1/60) ……………	64
第 50 図	II 区遺物分布図 (1/60) ……………	64
第 51 図	III 区遺物分布図 (1/60) ……………	65
第 52 図	下層遺物包含層出土土器実測図その① (1/3) ……………	66
第 53 図	下層遺物包含層出土土器実測図その② (20 は 1/4、他は 1/3) ……………	67
第 54 図	3～5 号土坑実測図 (1/60) ……………	67
第 55 図	5 号土坑出土土器実測図 (1/3) ……………	68
第 56 図	その他の遺跡出土土器実測図 (17 は 1/4、他は 1/3) ……………	70
第 57 図	遺跡出土土器実測図 (1～5 は 1/2、他は 1/3) ……………	71
第 58 図	下伊良原羽後屋敷遺跡遺構配置図 (1/300) ……………	80
第 59 図	下伊良原羽後屋敷遺跡基本土層図 (1/60) ……………	81
第 60 図	1～4 号土坑実測図 (1/30) ……………	83
第 61 図	1・2 号土壇墓実測図 (1/30) ……………	85
第 62 図	各遺構出土土器実測図 (他は 1/3) ……………	86
第 63 図	その他の遺跡出土土器実測図 (1/3) ……………	88
第 64 図	遺跡出土土製品・石器実測図 (10・11 は 1/2、他は 1/3) ……………	89
第 65 図	下伊良原中ノ切遺跡周辺地形図 (1/2,000) ……………	91
第 66 図	下伊良原中ノ切遺跡基本土層図 (1/60) ……………	92
第 67 図	下伊良原中ノ切遺跡遺構配置図 (1/300) ……………	折込
第 68 図	下伊良原中ノ切遺跡上層主要遺構配置図 (1/800) ……………	93
第 69 図	1～6 号廃棄土坑実測図 (1/60) ……………	95
第 70 図	1～3 号掘立柱建物跡実測図 (1/60) ……………	96
第 71 図	1～5 号櫛列実測図 (1/60) ……………	98
第 72 図	1～4 号土坑実測図 (1/30) ……………	100
第 73 図	5・8 号土坑、1 号土壇墓実測図 (1/30) ……………	101
第 74 図	上層各遺構出土土器実測図 (1/3) ……………	103
第 75 図	上層検出 Pit 群出土土器実測図 (15 は 1/4、他は 1/3) ……………	104
第 76 図	下層グリッド A・B・D・E 区土層図 (1/60) ……………	106
第 77 図	下層グリッド E-5・6、E-7、H-10、I-7 区遺物出土状況 (1/60) ……………	107
第 78 図	5 層出土土器実測図 (20～24 は 1/4、他は 1/3) ……………	109
第 79 図	6 層出土土器実測図 (1/3) ……………	110
第 80 図	1 号竪穴状遺構、6・7・9・10 号土坑実測図 (7 号土坑は 1/30、他は 1/60) ……………	112
第 81 図	11～13 号土坑実測図 (1/60) ……………	114
第 82 図	下層各遺構出土土器実測図 (4～9 は 1/4、他は 1/3) ……………	116
第 83 図	その他の遺跡出土土器実測図 (12・13 は 1/4、他は 1/3) ……………	117
第 84 図	遺跡出土土製品・石製品・銭貨実測図 (5 は 1/2、他は 1/3) ……………	118
第 85 図	遺跡出土土器実測図その① (1/2) ……………	118
第 86 図	遺跡出土土器実測図その② (1/3) ……………	119

## 表目次

第 1 表	伊良原ダム建設に先立つ既往の発掘調査 ……………	1
-------	--------------------------	---

# I はじめに

## 1 調査に至る経過

**伊良原ダムの概要** 県営伊良原ダムは、福岡県東部を北流して周防灘に流れ出る二級河川祇川の上游、福岡県京都市郡みやこ町犀川下伊良原地先に建設される重力式コンクリートダムである。

急流として知られる祇川はこれまでにたびたび洪水による被害を起こしてきた。たとえば、昭和54(1979)年の梅雨前線豪雨、昭和55(1980)年・平成5(1993)年・同9(1997)年の台風に伴う豪雨により、堤防が決壊して家屋が全半壊あるいは床上・下への浸水が発生し、また農地への浸水が生じている。一方で、流域は周防灘に面した海岸平野にあって瀬戸内型の気候をもち、平野を流れる河川の流量が総じて少ないため、下流の市街地を中心に夏にはしばしば深刻な水不足に見舞われてきた。このような状況より、福岡県ではかねてより、流域の洪水対策と農業用水確保、そして田川・北九州地区への飲料水の供給を主な目的とした多目的ダムの建設を計画してきた。

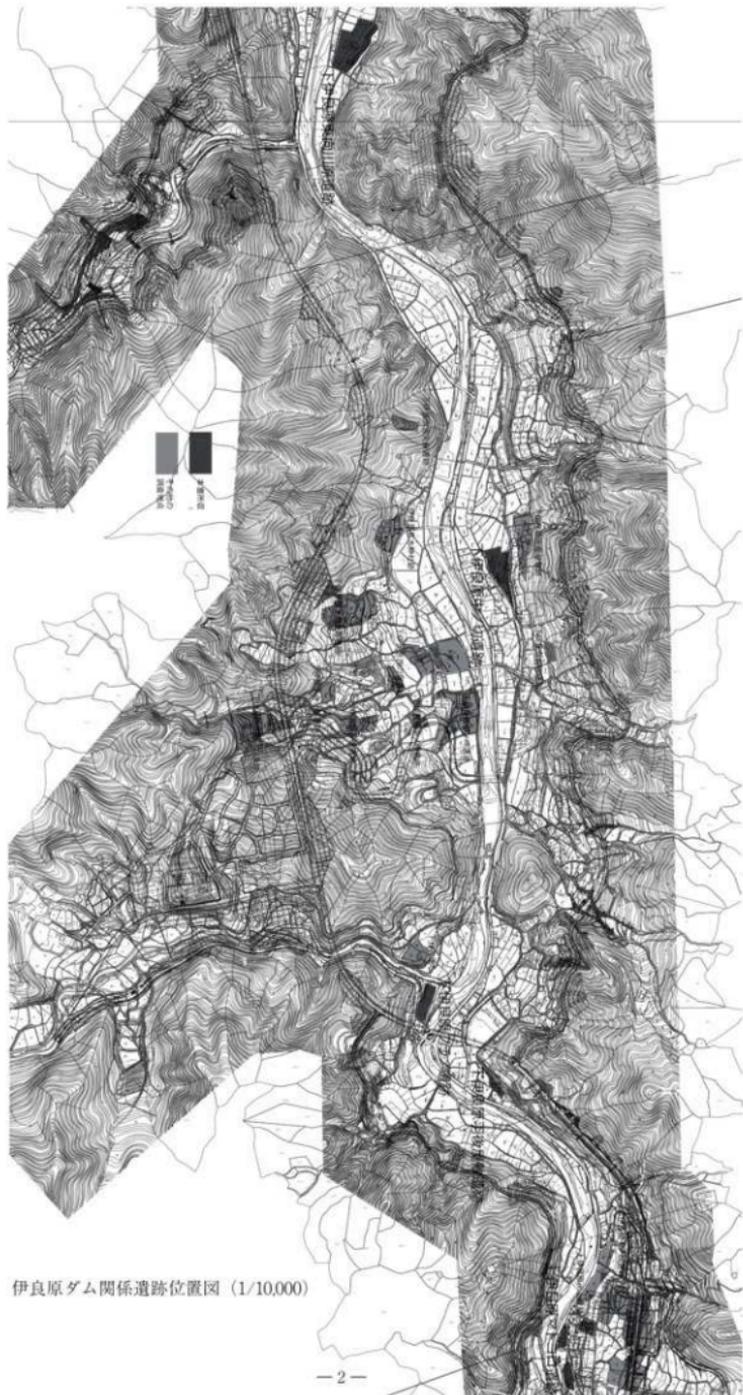
**ダム建設の計画** ダム建設の計画は古く、昭和36(1961)年には建設に先立つ予備調査が開始され、昭和49(1974)年度には実施計画調査も採択された。しかし実際に、田川および京築地区水道企業団との基本協定が締結され、ダム建設事業が採択されたのは平成2(1990)年度である。

その後、平成16年度には伊良原ダム建設を含む祇川総合開発事業が国庫補助事業として採択され、用地買収や建設工事が本格的に進むこととなった。ダム建設に伴う工事は平成18年度に道路の付け替え工事に着手されたのを皮切りに着々と進められ、現在では水没予定地内にあった民家の移転もほぼ完了し、付け替え道路の建設やダム本体工事が着々と進められている。

**伊良原ダム建設に伴う文化財調査** ダム建設に伴う水没予定地、そして水没予定地内に位置する道路等の水没地外への付け替え計画地にある文化財に対する協議は、平成6(1994)年度に開始された。福岡県土木部(現県土整備部)河川開発課・福岡県行橋土木事務所伊良原ダム出張所(現伊良原ダム建設事務所)・福岡県教育庁指導第二部文化課(現総務部文化財保護課)・同京築教育事務所などの関係諸機関の間で継続的に協議が行われ、埋蔵文化財調査については、用地買収が終了し、民家が移転した後に本格的に開始すること、民家等の移転先につい

発掘区画	発掘時期	発掘年度	発掘内容	発掘結果
伊良原ダムノコシ発掘	1次(1月)	H18(2006)	埋蔵文化財発掘	2区222区
伊良原ダムノコシ発掘	1次	H18(2006)	埋蔵文化財発掘	2区222区
伊良原ダムノコシ発掘	1次	H18(2006)	埋蔵文化財発掘	2区222区
伊良原ダムノコシ発掘	1次	H18(2006)	埋蔵文化財発掘	2区222区
伊良原ダムノコシ発掘	1次	H19(2007)	埋蔵文化財発掘	2区229区
伊良原ダムノコシ発掘	1次	H19(2007)	埋蔵文化財発掘	2区229区
伊良原ダムノコシ発掘	1次	H20(2008)	埋蔵文化財発掘	2区232区
伊良原ダムノコシ発掘	2次	H20(2008)	埋蔵文化財発掘	
伊良原ダムノコシ発掘	3次	H21(2009)	埋蔵文化財発掘	
伊良原ダムノコシ発掘	1次	H22(2010)	伊良原ダム発掘	不検
伊良原ダムノコシ発掘	1次	H23(2011)	伊良原ダム発掘	不検
伊良原ダムノコシ発掘	1次	H23(2011)	伊良原ダム発掘	不検
伊良原ダムノコシ発掘	1次	H24(2012)	伊良原ダム発掘	不検
伊良原ダムノコシ発掘	1次	H24(2012)	伊良原ダム発掘	不検
伊良原ダムノコシ発掘	1次(1月)	H24(2012)	伊良原ダム発掘	
伊良原ダムノコシ発掘	2次(1月)	H24(2012)	伊良原ダム発掘	
伊良原ダムノコシ発掘	1次(1月)	H24(2012)	伊良原ダム発掘	
伊良原ダムノコシ発掘	3次(1月)	H24-25(2012-2013)	伊良原ダム発掘	
伊良原ダムノコシ発掘	2次(1月)	H25(2013)	伊良原ダム発掘	
伊良原ダムノコシ発掘	3次(1月)	H25(2013)	伊良原ダム発掘	
伊良原ダムノコシ発掘	4次(1月)	H25(2013)	伊良原ダム発掘	
伊良原ダムノコシ発掘	1次	H25(2013)	伊良原ダム発掘	
伊良原ダムノコシ発掘	1次	H25(2013)	伊良原ダム発掘	
伊良原ダムノコシ発掘	1次	H25(2013)	伊良原ダム発掘	
伊良原ダムノコシ発掘	1次	H25(2013)	伊良原ダム発掘	
伊良原ダムノコシ発掘	1次	H26(2014)	伊良原ダム発掘	
伊良原ダムノコシ発掘	1次	H26(2014)	伊良原ダム発掘	
伊良原ダムノコシ発掘	1次	H26(2014)	伊良原ダム発掘	
伊良原ダムノコシ発掘	1次	H26-27(2014-2015)	伊良原ダム発掘	
伊良原ダムノコシ発掘	1次	H27-28(2015-2016)	伊良原ダム発掘	
伊良原ダムノコシ発掘	4次(1月)	H28(2016)	伊良原ダム発掘	

第1表 伊良原ダム建設に先立つ既往の発掘調査



第1図 伊良原ダム関係遺跡位置図(1/10,000)

ては用地買収後に先行して調査を実施することなどが、また民俗文化財については、その性格上民家等の移転前に実施する必要があることなどが合意された。

この合意を受けて、福岡県教育委員会ではまず、平成7～10年度の4カ年にわたり民俗文化財の調査を実施し、平成11(1999)年度末に報告書を刊行した(福岡県教委1999)。

一方、埋蔵文化財についてはこれよりやや遅れて平成10(1998)年9月より試掘調査が開始され、その結果を受けて平成18年度より発掘調査が始まった。平成28年度までに行われた発掘調査は第1表の通りであり、既刊報告書もすでに3冊を数える。

## 2 調査の組織

発掘調査(平成22～24年度)、整理報告書作成(平成28年度)に関わる関係者は次の通りである。

	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成28年度
<b>福岡県教育庁</b>				
<b>総括</b>				
教育長	杉光 誠			
教育次長	荒巻俊彦			
総務部長	今田義雄			
文化財保護課長	平川昌弘			
同 副課長	伊崎俊秋			
同 参事兼課長技術補佐	小池史哲			
同 調査第一係長	吉村靖徳			
同 主任技師(京築地域担当)	小澤佳憲			
<b>庶務</b>				
同 管理係長	富永育夫			
同 庶務担当主事	中野洋輔			
<b>調査</b>				
同 調査第一係参事補佐	木下 修			
<b>九州歴史資料館</b>				
<b>総括</b>				
館長	西谷 正	西谷 正	杉光 誠	
副館長	南里正美	篠田隆行	飛野博文	
総務室長	圓城寺紀子	圓城寺紀子	塩塚孝憲	
文化財調査室長	飛野博文	飛野博文	吉村靖徳	
文化財調査室長補佐	吉村靖徳	吉村靖徳	伊崎俊秋	
文化財調査班長	小川泰樹	小川泰樹	秦 憲二	
<b>庶務</b>				
総務班長	塩塚孝憲	長野良博	中村満喜子	
庶務担当	近藤一崇		原野貴生	
<b>調査</b>				
技術主査				
調査指導員	木下 修 (調査)	木下 修 (調査・報告)		
<b>整理・報告書作成</b>				
参事補佐			小川泰樹 (報告)	
技術主査			小澤佳憲 (報告)	



第2図 みやこ町と伊良原ダムの位置

なお、県の組織改革により、平成23年度より埋蔵文化財調査業務全般が福岡県教育庁総務部文化財保護課より九州歴史資料館へ移管されている。

発掘調査にあたっては、地元の方々、調査に参加されたの方々、みやこ町教育委員会の関係者の方々など、多くの方よりご協力を賜った。この場を借りて感謝申し上げたい。

#### 参考文献

- 福岡県教育委員会 1999『伊良原ダム関係文化財調査報告 伊良原：民俗文化財の調査』福岡県文化財調査報告書第143集、(伊良原ダム民俗文化財調査指導委員会編)
- 福岡県教育委員会 2009『伊良原Ⅰ 下伊良原中ノ坪遺跡・下伊良原原田ノ谷遺跡・下伊良原寺ノ谷遺跡・上伊良原川上遺跡・上伊良原下ノ段遺跡』福岡県文化財調査報告書第222集
- 福岡県教育委員会 2011『伊良原Ⅱ 上伊良原榎遺跡・上高屋台ノ原遺跡』福岡県文化財調査報告書第229集
- 九州歴史資料館 2012『伊良原Ⅲ 下伊良原塚本遺跡』福岡県文化財調査報告書第232集



調査風景

## II 位置と環境

### 1 地理的環境

**立地の概要** 本書で報告する各遺跡は、福岡県京都郡みやこ町に所在する。みやこ町は平成18(2006)年に旧京都郡勝山町・豊津町・犀川町の三町が合併して発足した自治体であり、福岡県の東部地域に位置する。福岡県では、みやこ町を含む福岡県東部地域を、構成する京都郡と築上郡からそれぞれ一文字ずつとって「京築地域」と呼び習わしており、みやこ町は京築地域の北西部に位置する。町は内陸部にあって南北に細長い形状をもち、東は同じく京築地域の行橋市・築上郡築上町、西は筑豊地域に属する田川郡香春町・添田町・赤村に接する。北には北九州市小倉南区が、南は大分県中津市が隣接する広大な町域を持つ。

**地形** 各遺跡が立地するみやこ町は、周防灘に面した海岸平野である京都平野（行橋平野ともいう）の内陸部に位置する。京都平野は、福岡県東部から大分県北東部にかけて広がる海岸平野である豊前平野の北端部に位置し、北を平尾台、西を英彦山から北に派生した障子ヶ岳山系、南をやはり英彦山から北東に派生した求菩提山系により画されている。平野内には、小波瀬川・長狭川・英彦山山塊などからの小河川が、平野の西側を南北に伸びる障子ヶ岳山系から端を発して、東の周防灘に向かって流れ出ている。これらの河川の上流域では、河川の開析作用によって形成された南西から北東に向かって伸びる細長い谷平野とそれを画する尾根状丘陵群が連続する一方、下流域では各河川の堆積作用によりなだらかな扇状地や平野が形作られている。

各遺跡の所在する伊良原地区は、京都平野を流れる河川の中でも比較的流域の広い河川である祓川の上流域に位置する。昭和31(1956)年に東に隣接する城井村とともに北の犀川町に合併するまでは、伊良原村という面積37.46平方km、うち森林面積が90%を占める山村であった。伊良原地区の標高は南部山中の最高所で800m、北部の下伊良原付近で150mをはかり、日照時間も少なく雨が多い山地気候区に属し、県下でも有数の寒冷地域として知られる。

**地質** 地質を見てみよう。祓川上流域の東西両岸にそびえる山地は、新生代・第三期に噴出した英彦山系の火山岩類が広く分布する。これを祓川が開析した結果、川底では下層に広く分布する中生代の花崗岩類や変成を受けた砂質・泥質の緑色片岩が露出する一方、祓川の両岸には花崗岩風化マサ土のほか新生代に形成された亜円礫や砂からなる段丘堆積物が広がり、さらに場所によってはその上位におもに花崗岩類の角礫よりなる岩錐堆積物が河床堆積物を覆って発達している。遺跡はおもに、河川両脇に発達した河床段丘上に立地し、多くは河床堆積物である粘砂質の地山の上から掘り込まれる。下層にはしばしば亜円礫・砂からなる厚い堆積物が見られるほか、上位から転落してきた岩錐堆積物が遺構面に点在することも多い。下伊良原中ノ切遺跡などでは、土地開発にあたってこれらの巨石の処理に苦慮した痕跡がうかがえる。こうした地形・地質的条件により、生活環境としては必ずしも好適とはいえない。

### 2 歴史的環境

**歴史の概要** 本書で報告する各遺跡のあるみやこ町は、律令制下においては西に隣接する田川郡・南に隣接する大分県北部などととも豊前国を形成していた。豊前国は7世紀末に豊国を前後に分

割して成立した国で、旧仲津郡にあたるみやこ町国作地区周辺に9世紀代の国府が知られ、その南には国分寺・国分尼寺もある。近年、東九州自動車道関連の発掘調査で、やはり旧仲津郡域にあたる行橋市福原地区で、8世紀前半を中心とする最大一辺150mの規模を持つ大規模な官衙遺跡が発見され（福岡県教委2014）、みやこ町国作地区周辺に所在する県指定史跡「豊前国府跡」の前代にあたる国府の可能性も指摘されている。しかし、10世紀代の編纂とされる『和名類聚抄』には豊前国の国府は京都郡にあるとされており、仲津・京都両郡衙の所在地も不明で、本地域の歴史についてはいまだ不明な部分も多い。

**伊良原地域の歴史** 現在でも国道496号線が通り、英彦山麓を介して周防灘と耶馬溪・日田方面とをつなぐ主要な交通ルートである祇川流域は、弥生～古代の遺跡が非常に希薄な一方、縄文時代・中世の遺跡は多い。このことは本ルートが縄文時代・中世に重用されたことを物語る。縄文時代には狩猟生活の場としての利用も多かったと考えられ、また中世には祇川西岸にそびえる蔵持山において修験道が隆盛し、英彦山や求菩提山などとともに栄えたものとみられる。

さらに中世には、下野国より北部九州に入った関東御家人の城井氏が伊良原の下流域にあたる木井地区に本拠を構えて隆盛し、伊良原地区も城井氏の勢力下に入った。城井氏は蔵持山修験道の勢力とも関係をもち付近を治めたものであろう。

**旧石器時代の遺跡** 旧石器時代の資料としては、縄文時代早～前期の包含層中から出土した石器類が数点報告されている程度である。上伊良原複遺跡からは、3点のナイフ形石器が包含層中から出土している。単発的な生活の痕跡であろう。

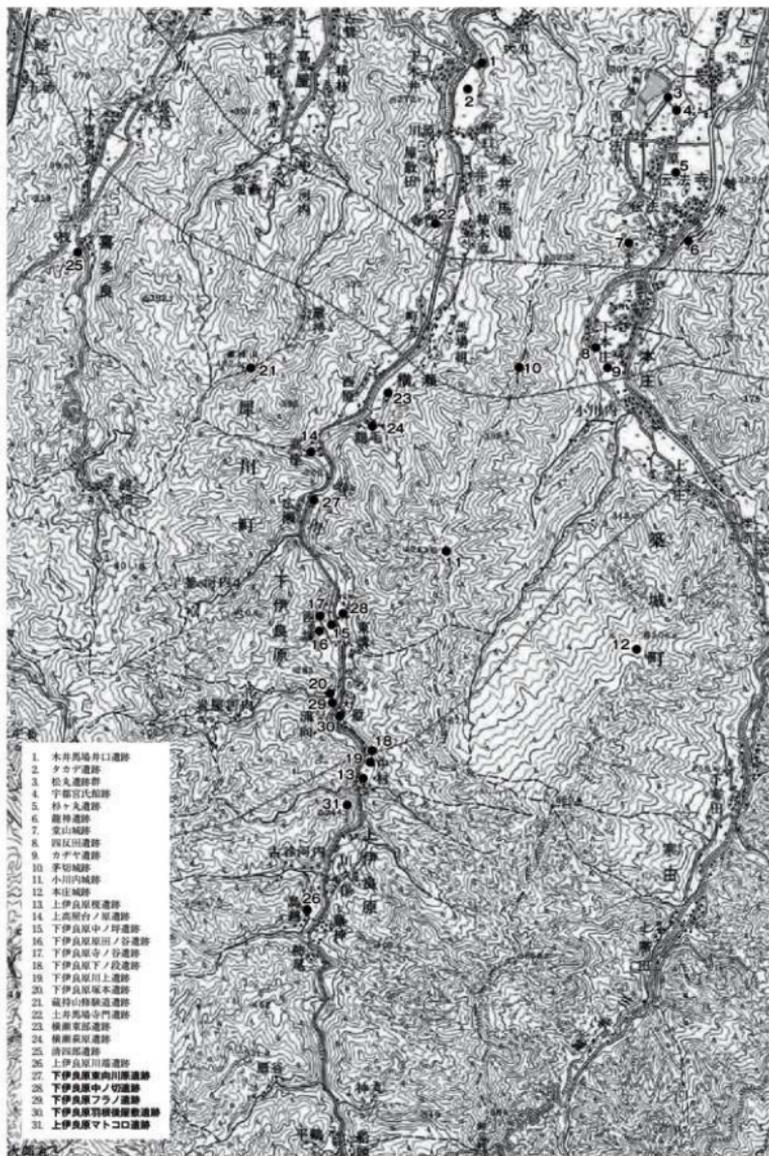
**縄文時代の遺跡** 伊良原地区で、中世と並び遺構・遺物が多く出土するのが縄文時代である。

上伊良原複遺跡では、不定形の土坑を多数調査し、土坑や包含層中から早期初頭の柏原式土器が多量に出土したほか、押型文土器・轟B式土器などの早～前期の土器群が出土した。また、その上層には縄文時代後期初頭の包含層も検出されている。これに伴い打製石器も多量に出土しているが、早～前期の包含層に伴う打製石器の石材のうち姫島産黒曜石の占める割合が早期と前期以降では明らかに異なる点が明らかにされており注目される。

上伊良原川端遺跡では縄文時代後期の集落跡が見つかっており注目される。遺跡からは後期初頭の竪穴住居跡が2棟発見され、これらに伴って良好な一括資料が得られたといい、報告書の刊行が待たれるところである。

上高屋台ノ原遺跡では土坑2基と縄文時代早期の土器が出土した。柏原式もわずかに見られるが、主体はおおよそ早水台式～田村式の押型文土器で、山形文・楕円文・格子目文の3種類がおもに見られる。また、縄文・撚糸文・条痕文・無文土器も少量ずつ出土した。

このほか、下伊良原中ノ坪遺跡からは縄文時代前期・後期の土器を伴う土坑1基、ほぼ突帯文土器のみからなる包含層を検出した。下伊良原原田ノ谷遺跡からは縄文時代早期押型文土器、前期轟B式土器、後期小池原上層式土器の包含層を検出した。下伊良原寺ノ谷遺跡からは早期柏原式土器、前期轟B式土器が包含層中から出土した。上伊良原川上遺跡からは縄文時代晩期中葉～後葉に位置づけられる竪穴住居跡1棟が出土した。下伊良原塚本遺跡からは縄文時代早期押型文土器・後期太郎迫式の包含層が出土している。本書で報告する各遺跡群からも、縄文時代早～晩期の資料がやや散発的にはあるが出土しており、谷平野内の各所で小規模ながら集落を営み生活を送った姿が想像できよう。



第3図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)

**弥生～古墳時代の遺跡** 縄文時代から一転して、ほぼ人々の活動痕跡が途絶えるのがこの時期である。既報告の出土資料としては、下伊良原原田ノ谷遺跡から弥生土器の出土が報告されている程度である。包含層中より数点の弥生時代中期須玖式土器が出土しているが、ほかに資料はなく、不安定かつ一時的な生活の痕跡と評価すべきであろう。本書で報告する各遺跡群からも数点の弥生時代前～中期の土器が出土しているが、明確な遺構に伴うものや量的にまとまった資料はない。農耕適地をほとんど持たないこの地域において、当時の人々が継続的に安定した生活を営むことは難しかったのであろう。

**古代の遺跡** 古代の遺跡としては蔵持山修験道遺跡が最も重要であろう。蔵持山は蔵川の西岸にある標高500m弱の峰である。修験道の場としての成立は文献上からは明らかでないが、採集遺物には10世紀代のものが見られるという。また、近年林道開削に伴い行われた発掘調査では、主体は中世でありながら11～12世紀代の巨石祭祀遺構も見つかっており、古代後～末期には山岳信仰の場としての性格付けがなされていたものとみられる。蔵川流域はこのような山岳修験の集団を維持するための生活の場として、中世にかけて開発されていったのであろう。

**中世の遺跡** 中世の遺跡としては、集落跡が多く調査されている。上伊良原榎遺跡からは、13世紀前半～16世紀代に位置づけられる屋敷地とそれに付属する墓地が出土している。屋敷地は掘立柱建物跡からなり、墓地は屋敷地に付属する屋敷墓であった可能性が指摘されている。また、下伊良原寺ノ谷遺跡からは、中世後期～近世初頭（15～17世紀）の掘立柱建物跡8棟が重複しながら展開する状況が出土し、『京都郡誌』に記載された「瑞応寺」という寺院跡に比定されたのは特筆すべき成果であった。

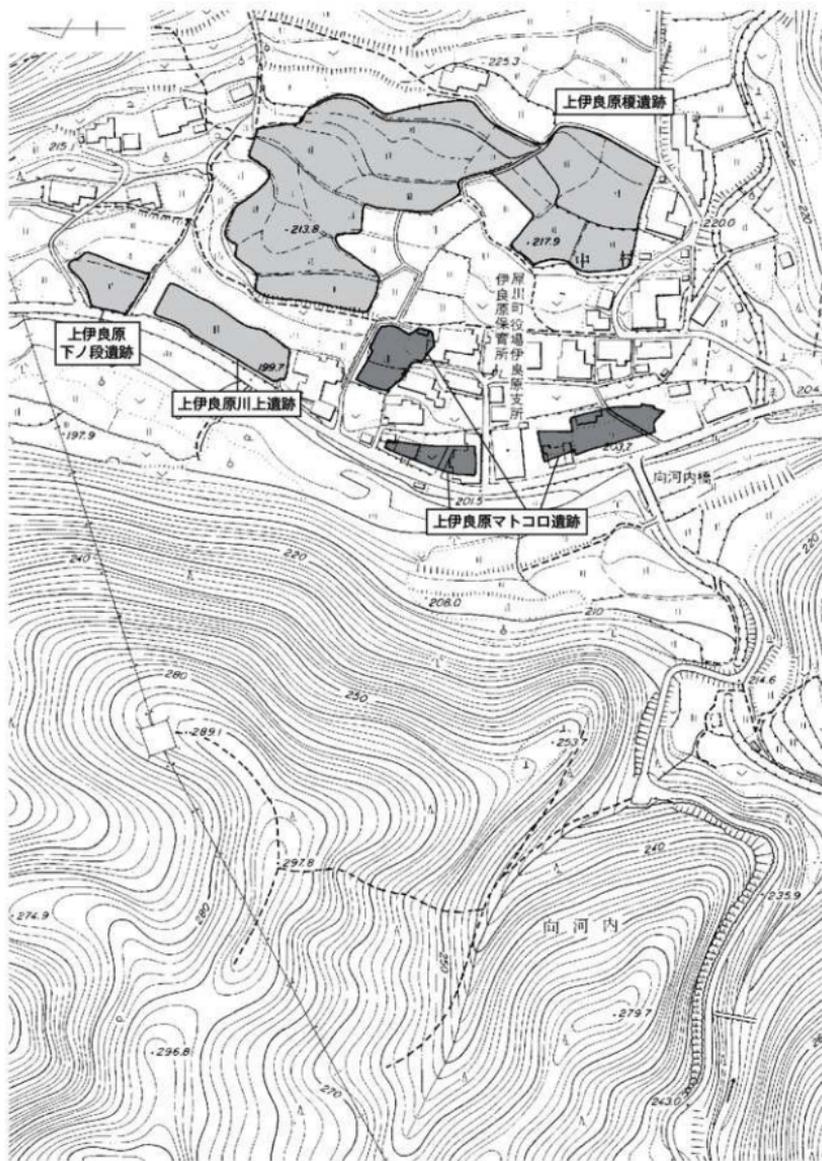
蔵持山に近い上高屋台ノ原遺跡からは、蔵持山参詣路の一部と見られる石敷きの里道を検出した。出土遺物に恵まれず時期は不明だが、おそらく中世には整備されその後補修されながら先後に至るまで使用されていたものとされる。

このほか、上高屋台ノ原遺跡では、古代～中世に属する土坑が数基出土している。いずれも長方形あるいは長楕円形プランで、内部から炭が多く出土したことから報告者は炭焼きのための土坑ではないかとしている。下伊良原塚本遺跡からは、13世紀を中心とする包含層を調査し、白磁などの貴重な遺物も出土した。

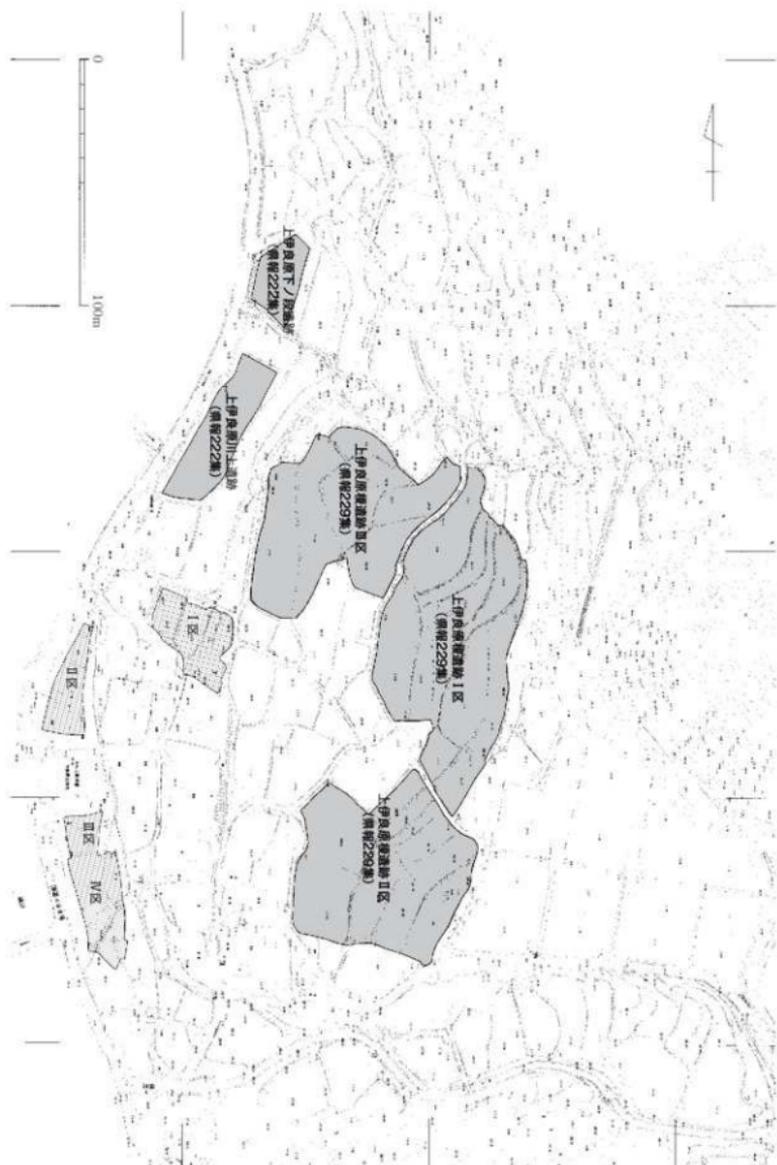
本書で報告する各遺跡群からも、断片的ではあるが中世の集落跡が発見されている。いずれも12世紀中～後葉前後からの生活の痕跡が確認されており、その多くは近世の遺物を伴う。中世に形成され始めた集落形態が、近世を経て現代にまでつながってくるのであろう。

## 参考文献

- 福岡県教育委員会 2009『伊良原Ⅰ 下伊良原中ノ坪遺跡・下伊良原原田ノ谷遺跡・下伊良原寺ノ谷遺跡・上伊良原川上遺跡・上伊良原下ノ段遺跡』福岡県文化財調査報告書第222集
- 福岡県教育委員会 2011『伊良原Ⅱ 上伊良原榎遺跡・上高屋台ノ原遺跡』福岡県文化財調査報告書第229集
- 九州歴史資料館 2012『伊良原Ⅲ 下伊良原塚本遺跡』福岡県文化財調査報告書第232集



第4図 上伊良原マトコロ遺跡周辺地形図 (1/2,500)



第5図 上伊良原マツコロ遺跡調査区位置図 (1/1,000)

### Ⅲ 上伊良原マトコロ遺跡の調査報告

#### 1 遺跡の概要

**遺跡の立地** 上伊良原マトコロ遺跡は、祓川の上流域右岸の中・低位段丘上に立地する（第5図）。遺跡の南側には、上伊良原の氏神として崇敬を集め、彦山神社の大本社の一つでもある高木神社（上高木神社、通称「藤の宮」）が鎮座し、祓川東岸に形成された緩傾斜地には旧犀川町役場伊良原支所や保育所などがあって、上伊良原地区の中心地として賑わいをみせた地区である。ダム建設にあたり、そのほぼ全面が水没地となることが決まったため、集落は東側の山地斜面に造成された移転地へと移動したのをうけて、発掘調査にいたったものである。付近は、段造成により形成された集落の間に狭小な畑地や水田が広がっており、調査地の地番は京都郡みやこ町犀川上伊良原中村130、131、139-1～3、140-1・6、140-3、地目は水田と雑種地、調査面積は2,260㎡であった。

**周辺の遺跡** なお、上伊良原マトコロ遺跡の東側に隣接する丘陵上位にひろがる中位河岸段丘上は、本集落の移転地としてすでに造成工事が行われている。この造成工事に先立って平成19年度に、ほぼ全面が上伊良原遺跡として発掘調査が行われており、縄文時代草創期の刺突文土器や押型文土器の良好な包含層や中世の掘立柱建物跡・土坑が出土している。また、同じく北側に隣接する低位段丘面は、上伊良原川上遺跡・上伊良原下ノ段遺跡としてやはり平成19年度に発掘調査を行っており、縄文時代晩期の竪穴住居跡、同早期・後期の包含層などが検出されている。

#### 2 調査の経過

**調査の着手まで** 福岡県教育庁総務部文化財保護課は、伊良原ダム建設事務所との継続的な協議のなかで、平成22年度当初に、同年中に上伊良原中村地区で予定されていた調整池造成工事に係る文化財有無の判断を求められた。これを受けて文化財保護課では、平成22年5月20日～24日に、重機を用いて建設予定地内の試掘調査を実施した。その結果、事業計画地内の4箇所、埋蔵文化財の発掘調査が必要との認識にいたり、伊良原ダム建設事務所へと回答を行った。伊良原ダム建設事務所は、工事工程との関連から、年度後半にも調査を開始してほしいとの要望を文化財保護課に対し示したため、文化財保護課調査第一係により、平成22年10月25日から発掘調査を開始した。

**I区の調査** 周辺は、土石流による大石の転石が多く、その影響が少ない箇所を選び調査区を設定した。まず、北東のやや高い造成面（水田）4筆とその隣接地をI区として調査を開始した。10月25日より重機を用いた表土剥ぎに着手し、並行して作業員を投入して包含層の掘削に着手した。調査区の南端には、東に隣接する上伊良原遺跡から続く谷部が西に向かって流れ下る状況があらわになる一方、中央部には比較的良好な遺構面が残存しており、中世の掘立柱建物跡・櫛列・溝・柱穴などの遺構を検出することができた。

11月25日にラジコンヘリコプターを用いて中世の遺構群の空中写真撮影を行った。その後、包含層から縄文土器が出土していること、東側隣接地である上伊良原遺跡では下層に縄文時代の包含層が形成されていたことに着目して、調査区の一部にグリッドを設定して下層の調査を行ったが、遺物の出土はなく、12月14日にI区の調査を終了した。

**II区の調査** I区の発掘調査と並行して、南側の谷地形を挟んだやや西寄りの低位段丘上にII区を

設定して、11月中より重機を用いた表土剥ぎを進めていた。Ⅰ区の調査が終了した翌日の平成22年12月15日より、作業員によるⅡ区の調査に着手した。Ⅱ区は既存建物の基礎による攪乱がひどく、また各所に巨石が流入して遺構面の状況は悪かったが、調査を進めると黄灰色砂質土の上面で遺構を検出した。主な遺構はピット群でその量も少ない。また、調査区南西端部では護岸状の石列遺構を検出した。おおよそ祓川の方向に沿っていることから、これが古い時期の祓川の東岸にあたるものと判断して、それより西側の調査は断念した。

年が明けて平成23年1月14日に、Ⅱ区の空中写真撮影を行った。その後、上層より石鉄が出土したことを重視して、3箇所に調査グリッドを設定して下層に形成されている可能性のある縄文時代包含層の掘り下げに着手した。荒天の中、断続的に2月末まで掘り下げ作業を行ったが、遺物はC区からわずかに土器が出土したのみであり、また明確な遺構等も検出できなかったため、設定したグリッドをある程度掘り下げたところで調査を終了した。

**Ⅲ・Ⅳ区の調査** 1月17日より、重機を用いてⅣ区の表土剥ぎを進めていた。2区の調査が終了した2月2日より、作業員によるⅣ区の調査に着手したが、その前日夜に大雪が降っており、Ⅳ区の調査は雪かきより始まるという貴重な体験となった。上伊良原地区では30cmの積雪ということであった。Ⅳ区は南北に細長い調査区で、旧状は水田であったため比較的遺構面の状況がよかった。調査区南東隅部はもとより一段高い水田面となっており、表土剥ぎの結果水田開削時に行われた段造りがそのまま露出した。したがって、北西部にひろがる下段は東に行くほどに削平が著しく、西側の遺構の残りは比較的良好な一方、東側はほとんど遺構が残されていない状況であった。また南東の上段の遺構の残りも比較的よかった。上層の遺構面からは中世に属すると考えられる堅穴状遺構・溝・柱穴などを検出した。2月18日には上層遺構を完掘して仮設足場より全景写真を撮影した。Ⅳ区においても、試掘で縄文土器が出土していることから、2月23日より全体に5m包含のグリッドを設定して下層の調査に着手した。その結果、第7図6層に示すように縄文時代の遺構面が形成されている一方、それより上層には土器もほとんど包含していない状況が判明したため、次年度以降に6層上面までを重機を用いて下げることにし、3月8日に同年度の調査を終了した。

平成23年度より、福岡県教育委員会における文化財調査業務が小郡市に移転開館した九州歴史資料館に移管されることとなり、伊良原ダム関係の埋蔵文化財発掘調査は九州歴史資料館文化財調査室が担当することとなった。平成23年6月8日より、しばらく休止していた上伊良原マスコ遺跡の発掘調査を再開した。6月8日以降、重機を用いて6層までの堆積土を除去するが、その範囲は地形上の制約や包含層の残存状況などから、上層よりかなり狭まることとなった。また、7月12日よりⅢ区にある旧みやこ町役場伊良原出張所の解体工事が始まったため、解体終了後に重機による表土剥ぎを試みていたが、建物基礎による攪乱が著しく中世の遺構面はほぼ残されていなかった。そこで、Ⅳ区とあわせて下層の縄文時代包含層のみ調査することとなった。

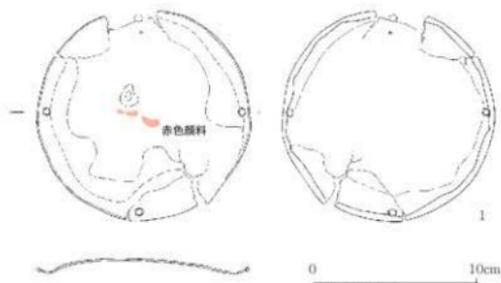
Ⅳ区の下層遺構面については、6月21日より作業員を投入して調査に着手する。6層を掘り込む遺構を検出し、これを縄文時代の遺構面と認定して調査を進める。6層上面からは土坑4基・堅穴状遺構1基を検出した。6層中にも多くの土器が包含されており、6層上面から切り込む遺構の掘りあげ後は順次人力にて6層を除去し、下層の調査を行う。下層には遺物包含層である7・8層が広く展開しており、このうち8層上面で再び遺構を検出したため、人力にて7層を除去した後8層の遺構検出を行う。8層上面ではピットを数基検出したのみであった。8月24日に調査区全景写真を

撮影し、Ⅳ区の調査をほぼ終了する。

一方、Ⅲ区の調査は、重機による上層の除去が終了した8月22日より人力を用いた掘り下げ作業を開始するが、6層上面・8層上面のいずれからも明確な遺構は認められず、包含層の掘削を人力で行うこととした。Ⅲ区の調査を9月末まで行い、9月28日に全景写真を撮影、図化作業の後に重機を用いた埋め戻しを行って、10月14日に上伊良原マトコロ遺跡の調査を完了した。

**踏査時の表採遺物** なお、平成20年度に伊良原ダム事務所より依頼を受けて発掘調査を要する箇所の踏査を行った際に、付近から銅製経筒の底を採集しているのここであわせて報告しておく。

**青銅器** (第6図1、図版9) 1は銅製の経筒の底部である。上伊良原マトコロ遺跡の調査予定地内に立地していた地藏堂(中村地藏堂)の横で採集した。直径12.8cmほどをはかる略円形の円盤状製品で、縁部を幅5mmほど折り返して縁を補強している。折り返し部は直線的になるため、正確には多数の直線が円弧上に並ぶ形状をとる。縁から3mmほどの部分に直径4mmほどの穿孔を施しており、残存位置から考えて4カ所に穿孔が施されたものとみられる。厚さはきわめて薄く最も薄い箇所で0.4mm、厚い箇所で0.8mm、平均0.5mmほどである。表面は緑青で覆われて緑色を呈し、部分的に赤銅色が認められる。墨書等は観察できない。



第6図 遺跡周辺表採の経筒実測図(1/3)

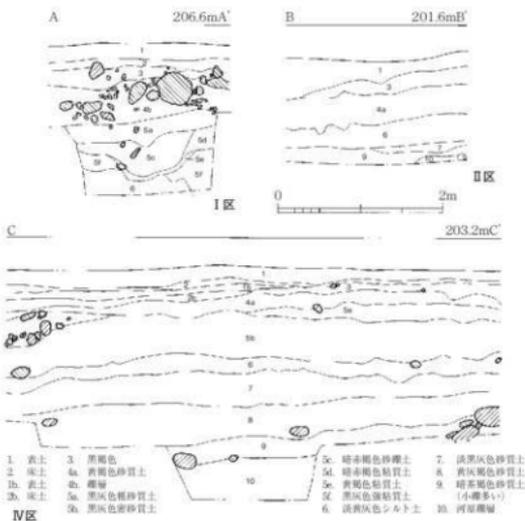
### 3 調査の成果

#### (1) 基本土層

第7図AはⅠ区北壁、BはⅡ区西壁、CはⅣ区北壁の土層断面である。Ⅳ区では、1層が表土、2層は床土が重複して現れていて西側での水田面の嵩上げが観察される。3層は黒褐色土で層厚20～30cmをはかる。

4a層は黄褐色砂質土で、各区ともその上層が中世遺構の確認面となり、層厚は20～40cmを測る。Ⅰ区の北壁付近では礫層となり、上部からの土石流が基盤層となるものであろう。

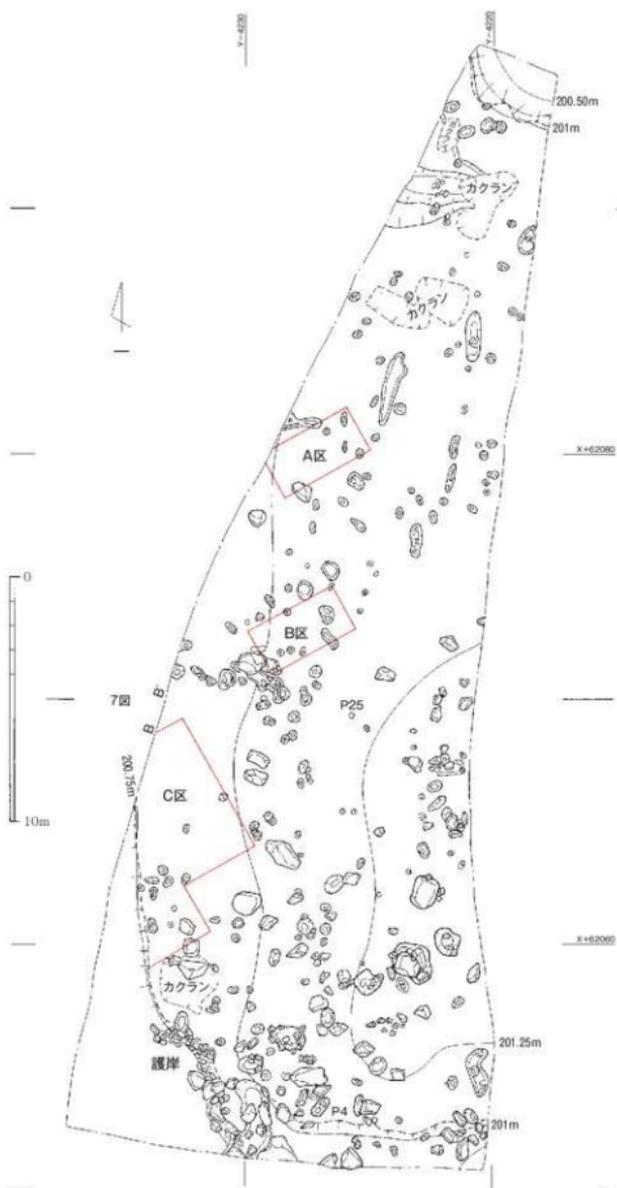
5a・5b層は灰色を呈す砂質土の粗・密の違いで分層した。いずれも遺



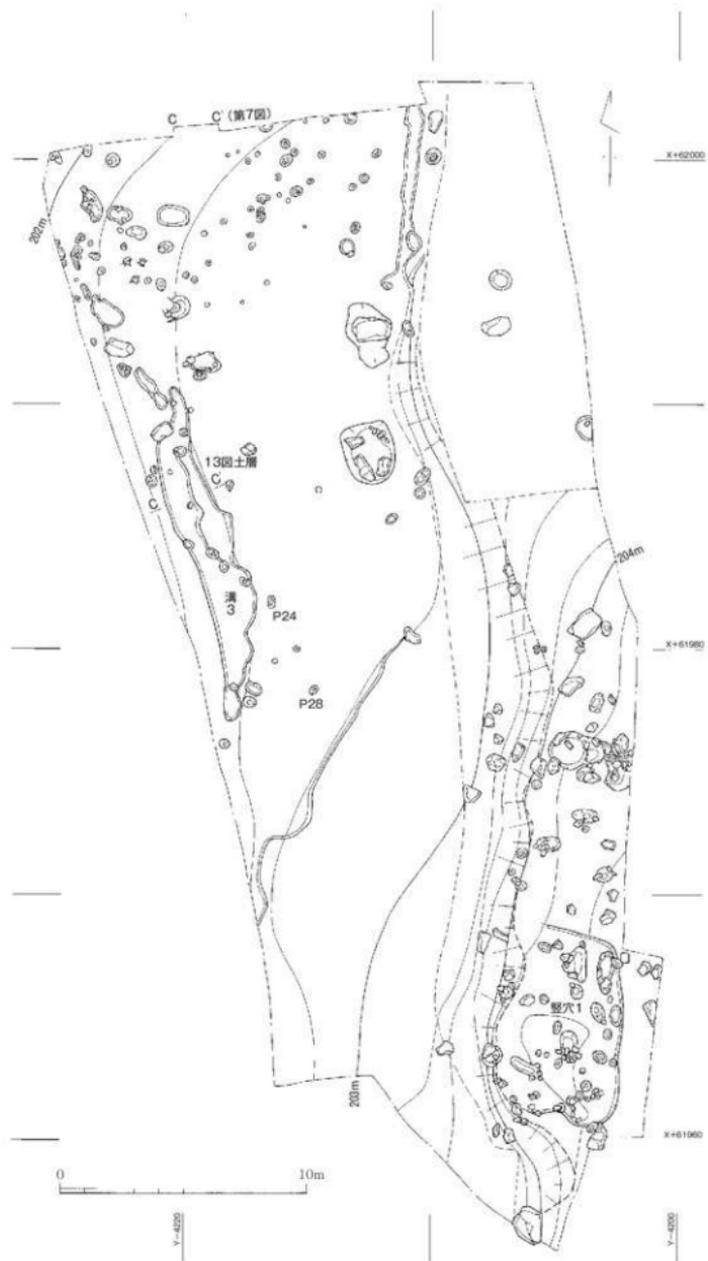
第7図 上伊良原マトコロ遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ区基本土層図(1/60)



第8図 上伊良原マトコロ遺跡1区遺構配置図 (1/200)



第9図 上伊良原マトコロ遺跡Ⅱ区遺構配置図 (1/200)



第10図 上伊良原マトコロ遺跡IV区上層遺構配置図 (1/200)

物を全く含まない。Ⅱ区では50cmと分厚く堆積する。

6層は淡黄灰色シルト層でⅡ区では40cm、Ⅳ区でも20cmの厚さで堆積する。縄文時代後期の竪穴状遺構や土坑、多数の土器が出土した。Ⅰ区では6層が認められず、6層にあたる層位には粘質土系統の土壌堆積が認められるが、その層は縄文時代の資料を包含していない。

7層は淡黒灰色砂質土、8層は黄色灰褐色砂質土でⅢ・Ⅳ区のみみられる。いずれも40cmほどの厚さで堆積し、縄文時代後期の土器を多く包含する。

9層は小礫の多い暗茶褐色砂質土、10層は河原礫層となり、祓川の氾濫原に続く。

## (2) 調査の概要

Ⅰ区 Ⅰ区は上伊良原遺跡の西側に接する地区で、中位段丘上の標高208～206mを測る。上伊良原遺跡から西側の斜面下方に伸びる谷部にあたる。試掘で中世の包含層が確認され、調査区として設定した。

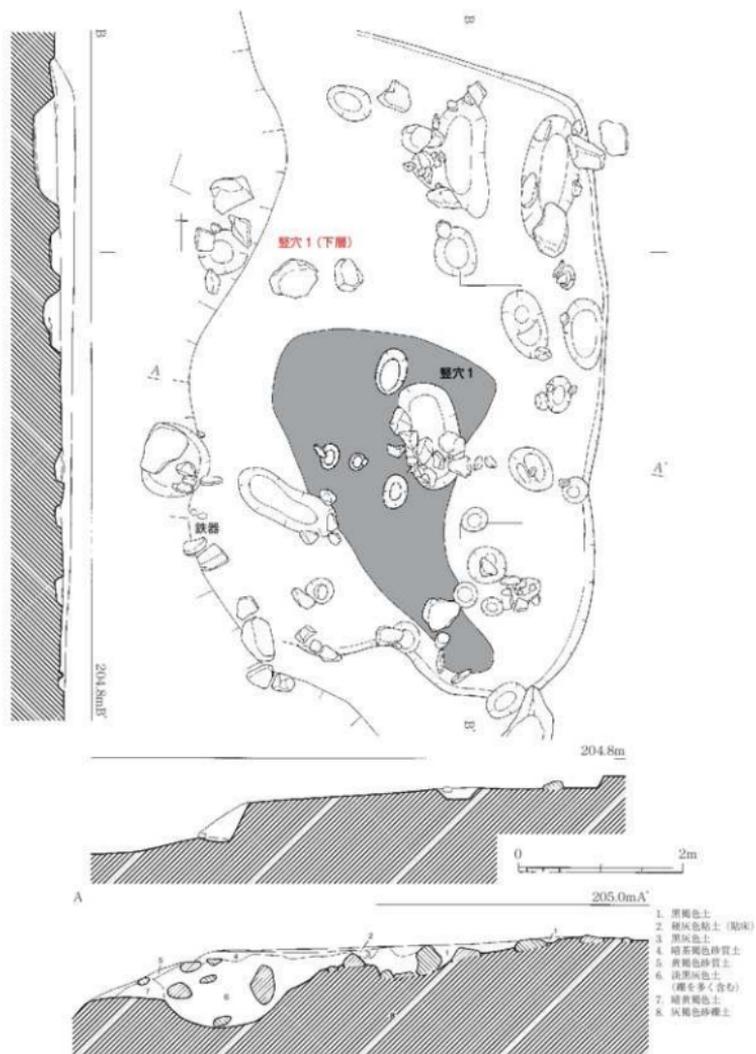
遺構は調査区の北側でおもに残存していた(第8図)。Ⅰ区北東部では大きな石材が散乱し、その間に中世の溝や欄列が、西側の傾斜地では多数の柱穴群の他に、中世の掘立柱建物跡1棟、欄列2条を検出した。また、調査区の南を東西方向に伸びる谷状の落ち込みからは、中世の土師器、青磁、土製品等が出土した。

なお、当該地には中村の組守護仏である江戸時代の木造地藏菩薩像と木像如来形座像を祭る地藏堂が建立されていた。至近には力石も置かれ、両者とも旧尾川町の文化財地図に登録されていた。この両者は現在近くの代替地に新築移設されている。

Ⅱ区 Ⅱ区は、国道の東側に接した地区で、低位段丘上にあたる。地山の標高をみると、201.25～200.75mの等高線が緩やかにめぐる。遺構面からは、中世の遺物を少量出土する柱穴群が検出されたが、建物や欄列などとしてまとまるものはない(第9図)。遺物としては、管状土錘が6点とまとめて出土したのが目立つ。なお、南西端には大石の堆積と大きな段落ち部があり、数段の護岸状の石積みを確認された。祓川の氾濫護岸と考えられる。なお、中世遺構面の調査中に石鏝を検出したため、A～Cの3箇所のグリッドを設定して下層の調査を実施したが、C区から縄文後期頃の小土器片が若干出土したに留まった。

Ⅲ区 Ⅲ区はみやこ町伊良原支所の南側にあたる。上層に想定された中世遺構面は、建物基礎による攪乱が深く入っていて残存状況が非常に悪く調査を断念した。6層以下の縄文時代の調査をⅣ区と併行して実施し、6・7～8層から土坑1基とピットを数基検出した。

Ⅳ区 Ⅳ区はⅢ区の南側に接した調査区で、南東部端が一段高く標高204.5m、北西端は202mと比高差2.5mを測る。4a層の黄褐色土で確認した中世の遺構は、竪穴遺構1基、溝1条、柱穴群等である(第10図)。上層の調査終了後に5層の黒灰色砂質土を重機で除去し、6層の淡黄灰色シルト土が堆積する箇所に5m方眼のグリッドを設定して、縄文時代の調査を行い、後期の竪穴状遺構1基、土坑3基と若干の柱穴群を検出した。また、さらに下層の7・8層上面でピットを検出したためにこれらを遺構面と認定して調査を行ったが、ピット以外の明確な遺構は検出できなかった。出土遺物としては、中世の土師器、青磁・瓦器や管状土錘、砥石や、縄文後期を主とする土器群、石鏝・石槍・磨石等の石器がみられた。



第11图 1号竖穴状遺構実測图 (1/60)

### (3) 上層の遺構と遺物

上記のように、Ⅰ～Ⅳ区ともに黄褐色砂質土である4層の上面から掘り下げられた遺構群である。Ⅲ区では攪乱が著しく調査を断念している。検出した遺構は大半が中世に属すると考えられ、竪穴状遺構1基、掘立柱建物跡1棟、欄列3条、溝3条、ピット群があるが、Ⅱ区からはピット群を検出したのみであり、ここではⅠ・Ⅳ区から出土した各遺構について個別に説明を加えていく。

#### ①竪穴状遺構

##### 1号竪穴状遺構（第11図、図版5）

Ⅳ区南東端の最高所に掘られた竪穴である。規模は、南北7.5m、西側は削平されているが5mをはかり、平面形状は隅丸長方形プランを呈する。掘り込み深さは10cmほどしか残っていない。床面は東から西にかけて緩やかに傾斜するとはいえ、平坦に近い。竪穴の中央から南側にかけては硬い灰色粘土の貼床が3cm程の厚さで大きくひろがる。断面図を見ると、床面下部は大きくえぐられ、かつ、地山面の傾斜も著しいことがわかる。竪穴の内部には大小の柱穴があるが、竪穴住居跡の柱穴として評価できるものはない。また、中央の石囲状の落ち込みには、焼土や炭化物などが認められず、炉跡とは評価できない。以上から、竪穴住居跡とは見なしがたく、その性格は不明であることから、ここでは竪穴状遺構として性格を断定せず報告しておく。

出土遺物としては、黒褐色土からなる上層の埋土から土師皿・土師碗を主体とする土器の小片がビニール袋1袋分ほど出土したほか、鋤先状の鉄器、青磁碗・近世陶器の小片なども出土した。また、下層の貼床からも、土師皿や土師碗のほか青磁・近世陶器の小片が出土した。上層埋土と下層貼床とで出土遺物の時期に差はなく、いずれも中～近世の土器を包含する。ただし、近世陶磁の破片はごく小片で量もごくわずかしかなことから混入の可能性もある。従ってここでは、本遺構の時期を中～近世とやや幅をとって考えておきたい。

##### 出土遺物（第14図）

**土師器（1～12）** 1～3は土師質土器の坏である。いずれも糸切りにより平坦な底部を作り出し、斜め上方に伸びる体部を持つ。1は口径15.2cm、底径11.0cmをはかる。2は口径13.8cm、底径10.0cmをはかる。3は口縁部が復元できなかったが底径は判明し9.0cmをはかる。4・5は土師質の碗である。半球形の胴部に低い高台を付すものであろう。1は内・外面にヘラ状工具を用いて丁寧にミガキ調整をほどこす。口縁部片で口径が判明し、17.0cmをはかる。2は、内・外面ともにナデ調整で、高台部径が判明し6.0cmをはかる。6～12は土師質の小皿である。いずれも糸切りにより平坦な底部を作り出し、体部はごく短く斜めに伸びる。器壁調整はすべて内・外面ともにナデで、いずれもゆがみや凹凸がみられる。7は口径7.2cm、底径5.0cm。8は口径9.0cm、底径7.0cm。9は口縁部が欠失し、底径6.0cm。10は口径9.0cm、底径7.5cm。11は口径9.0cm、底径7.0cm。12は口径9.0cm、底径7.0cmである。

**須恵質土器（14）** 14は須恵質の鉢の口縁部片である。口縁部に向けてわずかに肥厚させ、内端部を上方に引き上げる。小片で傾きは自信がない。また口径は判断できなかった。

**陶磁器（13）** 13は龍泉窯系青磁碗の口縁部片である。体部は斜め上方に直線的に伸び、口縁部はごくわずかに外反する。内面に草花文をヘラ彫りで刻み、緑灰色の釉で発色させる。小片でやや自信がないが口径は15.0cmに復元した。

これらの出土遺物のうち、上層埋土出土のものが3・5・6・14、で、それ以外は下層貼床またはそ

の下から検出されたピット内から出土した。

鉄器（第17図20） 20は鋤先状の鉄器である。袋部はほぼ欠損するが、鋭角に曲げられるコーナ部は残る。刃部は中央がへこみ逆U字状に湾曲しており、刃は鈍い。残存長さ7.8cm、幅5.4cmをはかる。

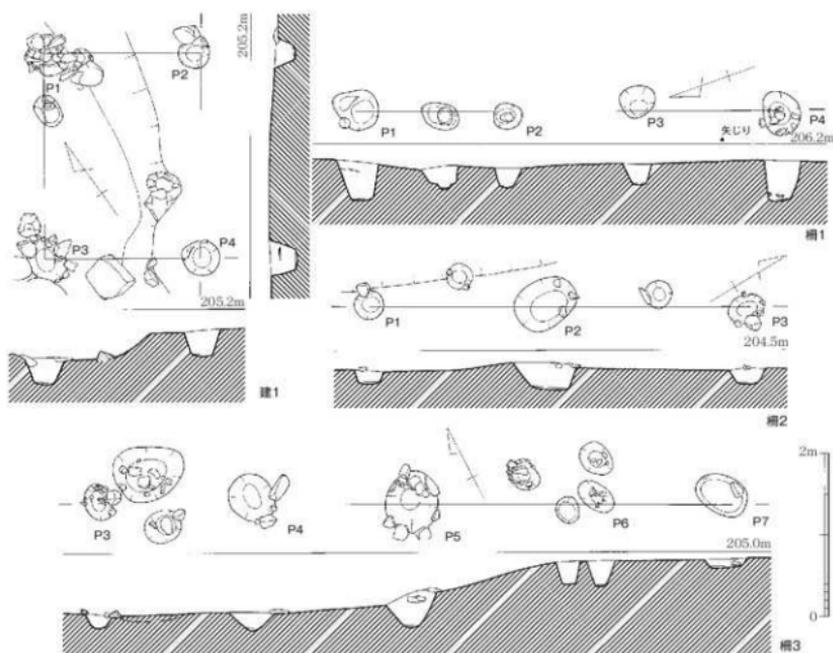
## ②掘立柱建物跡

### 1号掘立柱建物跡（第12図、図版5）

1区の西側緩傾斜面で検出された1間×1間の建物跡である。平面形状は長方形で、規模はP1-P2間が193cm、P1-P3間が250cm、P2-P4間が250cm、P3-P4間が190cmを測り、規格的な建物である。柱の深さは30cm前後、占有面積は5.8㎡である。西から北にかけて直角に配される2・3号横列を意識したともとれる配置となっているが、主軸方位にややずれがあり、同時併存かどうかは微妙なところであろう。Pitより糸切土師器坏、青磁の小片などが出土しており、中～近世のものと考えられよう。このうち、かろうじて図化できる大きさであった数点の土器を報告しておく。

### 出土遺物（第14図、図版9）

土師質土器（15） 15は糸切底部を持つ土師器の坏である。頭上では略完形に復元できたが残存状



第12図 1号掘立柱建物跡、1～3号横列実測図（1/60）

況は悪く半分以下しか残されていない。復元口径は12.0cm、底径は7.4cmをはかる。底部は側面を回転ヘラ切りした後糸切りにより切り離す。底部内面・口縁部内・外面は比較的丁寧なナデ調整により仕上げる。

**瓦質土器 (16)** 16は瓦質土器の風炉で、いわゆる奈良火鉢と呼ばれる類いであろう。口縁部片が2点、胴部片が3点、底部片が1点、脚部片が1点それぞれ接合しない状態で出土したが、器壁の色調や胎土などの共通性から同一の個体として復元した。残存部以外の形状は類例を参考に推測したもので、出土遺物の実際の形状を示すものではないため注意されたい。小片のため、口径・底径なども自信はないが、図では口径30.6cm、底径27.6cmに復元した。口縁部は短く垂直に伸び、外壁に雷文を連続させる。胴部には2条の突帯をめぐらせ、その間にやはり雷文をスタンプで連続させる。底部やや上にも1条の突帯をめぐらせる。脚部は思い切りのいいカットで成形している。中～近世の所産であり、類例からすれば15～16世紀のものか。

### ③柵列

#### 1号柵列 (第12図、図版5)

I区北側で検出された南北方向にのびる3間の柵列で、さらに北側の調査区外に伸びると思われる。柱間距離はそれぞれ、P1 - P2間が175cm、P2 - P3間160cm、P3 - P4間が172cmを測り、間隔はややばらつきがある。各ピットの直径は30～45cm、深さは30～50cmを測る。P3より鉄釘が出土した。検出面や埋土の類似性から、1号建物跡とそれほど大きくは違わない時期でおそらく中世のものとみられる。

#### 出土遺物 (第14図、図版9)

**鉄器 (15)** 15は頭部付近で欠損する鉄釘である。断面形状は全体的に方形に近いが、先端はやや丸みを帯びる。残存長さ6.4cm、厚さ0.5cmをはかる。

#### 2号柵列 (第12図、図版5)

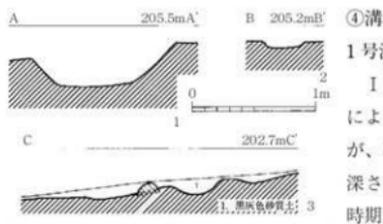
I区の西端部を南北方向に2間ほど伸びる短い柵列である。P3から直角に東転して柵列3となり、P3は柵列3と共有する。柱間距離は、P1 - P2間が220cm、P2 - P3間が235cmを測り、柱穴はやや大きめで、残存深さは20～30cmと浅い。出土遺物はないが、後述する3号柵列と同時併存したと考え、中世のものと見たい。

#### 3号柵列 (第12図、図版5)

I区で検出した。2号柵列のP3から東に直角に伸びる柵列である。P3を2号柵列と共有し、東西方向に4間伸びる。全長は7.72m、P3 - P4間は190cm、P4 - P5間は192cm、P5 - P6間は230cm、P6 - P7間は160cmを測る。P5より青磁碗が出土しており、出土遺物から1号建物跡とほぼ同時期中世のものと考えられる。

#### 出土遺物 (第14図)

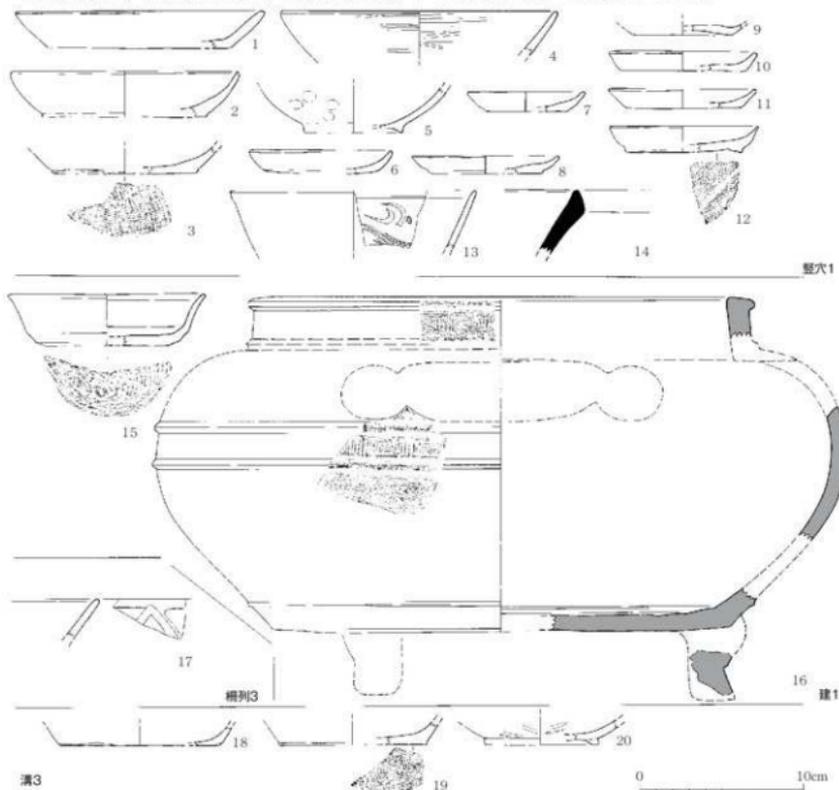
**陶磁器 (17)** 17は龍泉窯系とみられる青磁碗の口縁部片である。小片で径は復元できない。釉は緑灰色で透明感があり、胎土は灰色を呈し精良である。体部外面に蓮花文かと思われる文様を刻み、釉で発色させる。



第13図 1～3号溝断面・土層図 (1/40)

## 2号溝 (第13図)

I区で検出した。1号溝列の南東側にあり、これに並行方向に伸びる南北方向の溝で、現状での検出全長は6.5m、幅は80cmほどをはかる。残存深さは10cmと極めて浅く、断面は浅いU字状を呈す。出土遺物はなく時期は不明だが2号溝列と共伴するとすれば中世の遺構であろうか。



第14図 上層各遺構出土土器実測図 (1/3)

### 3号溝 (第13図)

Ⅳ区で検出した溝状遺構である。調査区の西端部を略南北方向に走っており、検出状況で全長13.5m、最大幅2mを測るが、溝の北側にはこの溝の延長部分に浅いほみが断続的に続いており、溝の名残とみられることから、溝の北側延長部分は削平により失われている状況が明らかで、本来はさらに北西調査区外へと伸びていたものであろう。埋土の黒灰色砂質土より糸切土師器小皿、高台付碗が出土しており、これらの出土遺物から中世の遺構と考えられる。

### 出土遺物 (第14図)

**土師質土器 (18～20)** 1・2は土師質の坏である。ともに糸切りで切り離された平底と短く斜めに伸びる体部を持つが、いずれも口縁部が欠失している。底部外面以外はナデ調整により丁寧に仕上げられる。底径は18が10.0cm、19が9.0cmをはかる。20は半球形の体部と低い高台を持つ土師質の碗である。内・外面ともにヘラ状工具より細いミガキを施した痕跡が認められるが炭素の吸着による黒色化は認められない。高台径のみ判明し7.0cmをはかる。

### ⑤その他の上層出土遺物

Ⅰ～Ⅳ区の各調査区からは、上記に報告した遺構以外からも多くの遺物が出土した。ここでは、こうした遺物を、出土した位置や層位などごとに報告したい。

### ピット出土遺物 (第15図、図版9)

Ⅰ～Ⅳ区の上層遺構検出面からは散在的にピットが検出された。これらは他のピットなどと組み合わせさせて建物や柵列などに復元できないものである。いくつかのピット中からは遺物が出土し、特にⅠ区Ⅰ号建物跡周辺のピットからは中～近世の比較的多くの遺物が出土した。以下、ピット出土遺物について説明する。なお、図示できる大きさの土器はⅠ区のピット中からのみ出土しており、そのほとんどはⅠ号建物跡周辺で、Pit30のみ調査区南半部に位置する。

**土師器 (第15図Ⅰ～3)** 1は土師質の碗である。口縁部付近のみが遺存し、ゆるやかに内湾しつつ立ち上がる器形を持つ。口径は14.0cmに復元したが小片のため径には不安が残る。Pit12出土。2・3は土師質の坏である。いずれも底部が平坦で斜め上方に伸びる体部を持つが口縁部が欠失する。底部の厚さがやや異なり、3がきわめて薄い。底部外面には糸切痕が残り、底部内面や体部はナデ調整。2・3ともに底径は10cmをはかる。2はPit14、3はPit18出土。

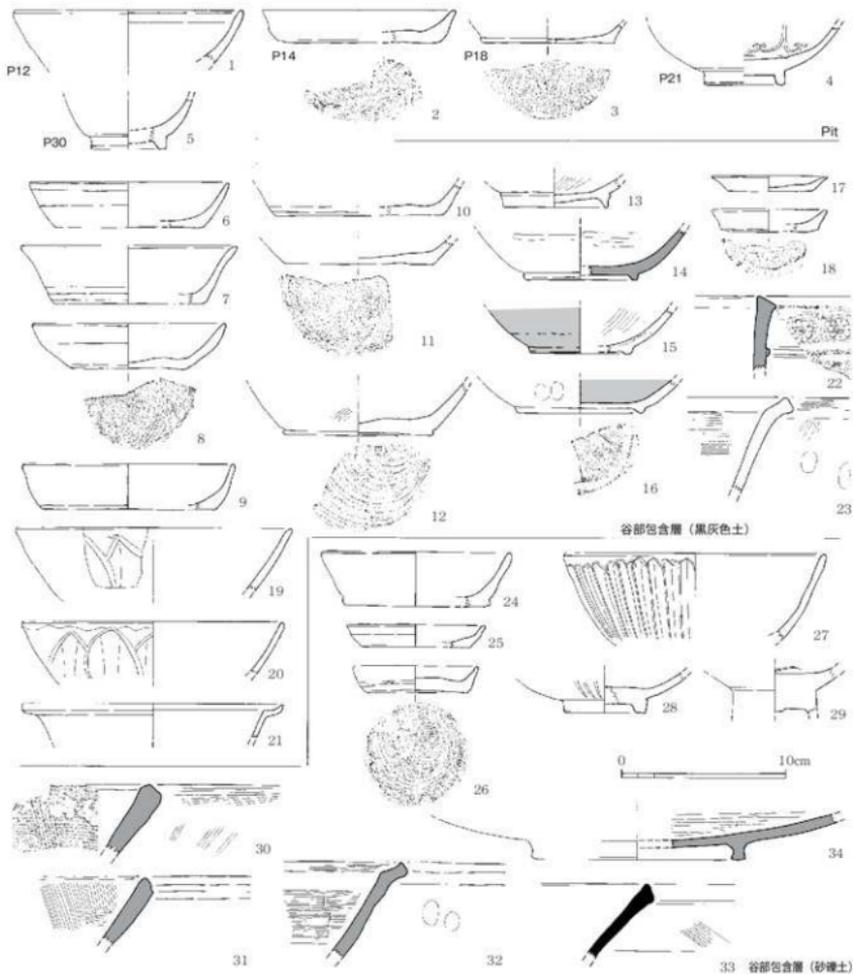
**陶磁器 (4・5)** 4は輸入陶磁で龍泉窯系の青磁碗、太宰府分類 (太宰府市教委2000) のⅠ類である。高台は高く、端部の面取りを行う。底部は露胎で、それ以外の内・外面に青緑色の透明釉を薄くかける。内面にはヘラ彫りで草花文を刻む。胎土は精良で白灰色を呈する。口縁部は欠失するが底径が判明し5.0cmをはかる。Pit21出土。5は小石原焼の小型碗か。体部は半球状に強く湾曲し、高台はわずかに広がり断面形状はしっかりと台形状を呈する。高台接地部のみ露胎でそのほかの全面に着色後ごく薄い透明釉を施す。色調は全体に黒茶色で部分的に深青色・白色を呈する。口縁部は欠失するが高台径が判明し4.5cmをはかる。Pit30出土。

**土製品 (第17図10・12)** いずれも管状土錘である。10はⅣ区Pit28から出土した。一部欠失するが残存長は3.7cmをはかり、推定全長4～4.5cmほどであろう。わずかに中膨れだがほぼ筒状で、最大径1.05cmをはかる。孔径は小さく3mmほどである。12はⅡ区Pit4から出土した。両端部を欠失しており残存長は5.2cmをはかる。推定長はこれよりわずかに長い5.5～6.0cm程度であろう。形状

はわずかに中膨れだがほぼ筒状で、最大太さ1.3mm、孔径4.5mmをはかる。

鉄器（第17図14）14はⅡ区Pit25から出土した鉄釘。完形品で、頭部はT字状となる。上部の断面は5mm弱の長方形、下部は台形を呈する。全長9.7cm、身部太さ8mmほどをはかる。

なお、このほかにPit12・14からは第14図2に示した1号建物跡柱穴内出土の瓦質土器の風炉と同一個体と考えられる土器の小片が出土している。1号建物跡出土物の項で報告しているので参照されたい。



第15図 その他の上層出土土器実測図その① (1/3)

## I区南側谷部包含層出土遺物（第15-16図、図版9）

I区の南側に東西に伸びる幅の広い谷部に堆積した埋土中から、中～近世の遺物細片が比較的多く出土した。この谷部は東側に位置する上伊良原榎遺跡の調査時にI・II区間で検出された谷部の下流にあたり、遺物の多くは上伊良原榎遺跡や上伊良原マトコロ遺跡I・II区からの流入と考えられる。堆積状況の記録は図面では残されていないが、日誌等から推測すると、上面が中世の遺構検出面にあたる4a層の直上に暗灰色砂礫土が、その上に黒灰色土が堆積していたようである。ただし、出土遺物には時期差は認められず、いずれも2次堆積の遺物出土状況を示す。念のため、層別別に出土遺物を報告する。

### 黒灰色土中出土遺物（第15図6～23）

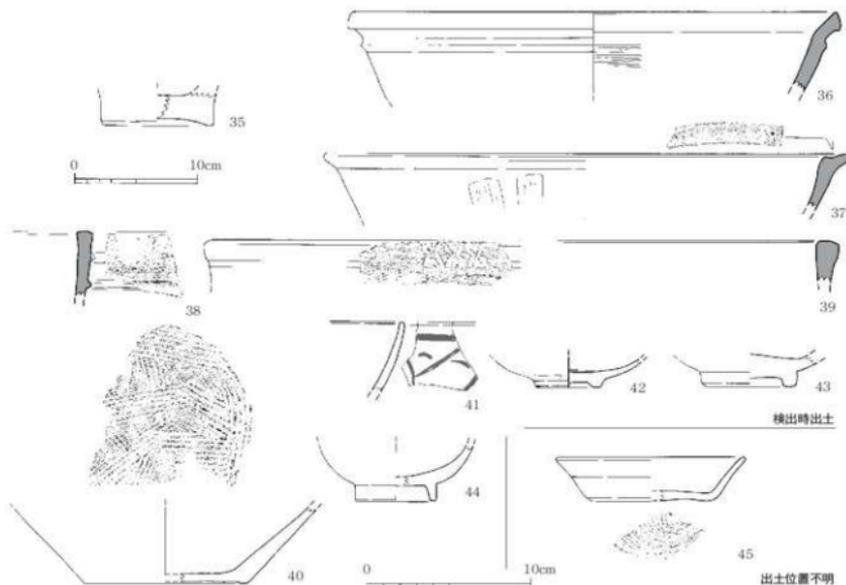
**土師質土器**（6～13・15～18・23） 6～12は土師質の坏である。全形が判明するのは8のみで、ほかは底部か口縁部のいずれかが欠失するが、基本的な形状は類似しているほか、平坦な糸切りの底部を持ち、底部内面や体部をナデ調整で仕上げる点など調整にも共通点が多く、また底径9～10cmと法量的にも近い。13・15・16は土師質の碗形土器である。半球形の胴部と、断面が丸みを帯びた三角形の高台を付す。13はやや高台が高く細く、多少古相を呈するか。内面はミガキ調整、外面は摩耗により不明。15は内外ともにミガキ後ススを定着させて黒色に仕上げる黒色土器B類である。16は調整こそ摩耗により不明だが内面を黒色に仕上げる意図がうかがえる黒色土器A類であろう。16の底部には板状工具により強くナデた痕跡がみられる。いずれも底径のみ判明し、15が6.2cm、16が8.0cmに復元したが、ともに小片でやや自信がない。17・18は土師小皿である。平坦な糸切りの底部と、ごく短い口縁部をもち、径は17が7.2cm、18が7.0cmと小さい。内面と口縁部外面にはナデ調整が施される。23は土師質の鉢である。斜め上方に伸びる体部から、軽く外反して短く伸びる口縁部へといたる付近のみの小片で、径は復元できないほか、傾きもやや自信がない。調整は、内・外面ともにハケ後ナデ仕上げを施す。

**瓦質土器**（14・22） 14は碗である。半球形の胴部と断面が丸みを帯びた三角形の高台を付し、黒色土器である。15・16と器形がよく似るが、胎土は硬く焼き締まり灰色を呈する。底径のみ判明し、7.0cmをはかる。22は火鉢であろう。器壁はやや黄色みを帯びるが固く焼け締まる。小片のため径は不明ながら、ほぼ直立する口縁部付近の破片として図示した。口縁から3cmほど下の外面に細い突帯を一条めぐらせ、その上に印花文を配する。文様は直径1.5cmほどの9花卉のスタンプで、1cmほどの間隔を開けておそらく全周するのであろう。

**陶磁器**（19～21） 19～21はいずれも龍泉窯系青磁である。19・20は直行あるいはごくわずかに外反する口縁部をもち、外面にはへら彫りの蓮花文を施す。13は軸の状態がよく緑灰色を呈するのに対し、20はやや悪く黄緑色でやや劣化がみられる。小片でやや自信がないが、口縁部径を19は17.0cm、20は16.0cmと復元して示した。21は大宰府分類の坏Ⅲ類である。斜め上方に伸びる大部から、外に短く屈曲して平坦な口縁を形成し、端部がわずかに上方につまみ上げられる。胎土は精良で、釉も緑灰色と発色がよい。13C中～14C初の指標遺物とされる。

### 砂礫土中出土遺物（第15図24～34、第17図6）

**土師質土器**（24～26） 24は土師質の坏である。平坦な底部は糸切りにより切り離し、口縁部はやや内湾していてナデ調整がみられる。底径9.0cm、口径11.6cmをはかる。25・26は土師小皿である。



第16図 その他の上層出土土器実測図その② (36は1/4、他は1/3)

やはり糸切りにより平坦な底部を作り出し、ごく短く伸びる口縁部がつく。26はやや底部が厚い。大きさは、25が口縁部8.4cm、底部6.6cmをはかり、26は口縁部7.6cm、底部6.2cmをはかる。

**陶磁器** (27～29) 27は龍泉窯系青磁碗である。比較的まっすぐ斜め上方に伸びる体部～口縁部が残る。外面には細蓮花文をヘラ彫りにより施す。胎土は精良で白灰色、軸は透明感にやや欠ける。緑灰色で貫入が認められる。口径は16.0cmに復元した。28も龍泉窯系青磁碗で、太宰府分類のI類か。高台部は太く、面取りを施す。胎土は白灰色の精良な粘土で、軸は緑灰色でやや厚めにかげられる。外面にはおそらく細蓮花文が施されていたのであろう。高台径のみ判明し5.0cmをはかる。29も龍泉窯系青磁碗の高台部片であろう。底部がかなり厚い特徴がある。内面に、草花文かと思われるヘラ彫りの文様が認められる。胎土は白灰色で精良、軸は緑灰色を呈する。

**瓦質土器** (30～32・34) 30は搦鉢である。小片で口径は復元できないが、斜めに伸びて端部をやや肥厚させる口縁部付近のみが残る。4～5mm間隔の掘り目が斜めに並行する。31もほぼ同型の鉢である。口縁部しか残されておらず、掘り目は確認できないが、30と同じような搦鉢となる可能性もあろう。胎土はやや軟質で摩耗が認められる。32はやや内湾させる胴部上位と、外に短く折り曲げる口縁部を持つ鉢である。内面には横位のハケ目がよく残り、外面はナデ仕上げ。堅固に焼成されていて器壁の残存状況がよい。34は大型の盤・皿・鉢などの底部付近である。器壁は薄く、火にかける器ではない。色調は黄灰色でほかの瓦質土器とはやや異なる。底部外面に板状工具によるナデ調整痕、外面は指ナデ仕上げ。内面には、幅6mmほどのヘラ状工具による丁寧なミガキが全面に施されており、この点を重視すればあるいは近代に類例のある捏ね鉢のような器種になろうか。

**土製品** (第17図6) 6は管状土錘である。完形で、長さ3.45cm、径0.94～1.14cm、孔径0.32cm、

重さ 5g をはかる。中位が膨れる形状である。

### 3層黒褐色土層出土遺物（第17図、図版9）

I・II・IV区では、上面が中世の遺構検出面となる4a層黄褐色砂質土層の直上に、黒褐色土からなる中世の遺物包含層が形成されていた。出土遺物は細片がほとんどで図示できる遺物は少ない。**土製品（7～9）** いずれもII区で検出された管状土錘である。8が完形品、7・9は欠損している。7は半分ほどが遺存するとみられる。残存長さ2.4cm、最大太さ0.95cm、孔径4mmをはかり、全長はおそらく5cm前後であろう。8は黒褐色で細身の完形品で、下半に丁寧な整形痕が残る。全長4.55cm、最大径0.9cm、孔径0.35cm、重さ4gを測る。9は残存長さ3.7cm、最大太さ1.0cm、孔径4mmをはかり、全長はおそらく4.5cm前後であろう。

**石器（5・17～19）** 5は幅広の剥片の側縁に刃部調整を施す姫島産黒曜石製の削器である。長さ4.2cm、幅3.25cm、厚さ1.2cm、重さ10.5gをはかる。I区3層中の出土。17～19はいずれもI区3層中出土の砥石である。17は上と両側面を研面とする仕上げ砥石だが、使用痕跡はあまりない。幅6.5cmをはかる。18もあまり使用されていないが砥石である。幅は6.4cm、厚さ5.6cm以上をはかる。19は扁平な砥石で使用減りしている。17・18は天草石、19は黒灰色を呈し砂岩系の石材とみられる。

### 上層検出面・その他出土土器（第16図、図版9）

各調査区から検出中に出土した土器のほか、II区南西部で検出された蔵川の護岸石積みの裏込土やその周囲（段落ち部）から出土した土器、表採資料や、整理中に出土位置がわからなくなった土器をまとめて報告する。

**弥生土器（35）** 35は中期須玖I式土器の甕の底部片であろう。径は小さく厚みがあり、わずかに上げ底状となる。底径は9.0cmをはかる。

**瓦質土器（36～39）** 36・37は鉢の口縁部片である。いずれも小片で径や傾きには不安があるが、36は口径30cm、37は32cmに復元して図示した。36は口縁部を短くわずかに屈曲させ、口縁部下に低い三角突帯をめぐらせる。器壁調整は内面がハケ目後ヨコナデ、外面はナデである。I区遺構検出面での出土。37は口縁端部を三角形に肥厚させ、上面を水平に伸ばすもので、上面には×印の刻み文がひとつみられる。内面には板状工具による強い擦痕が残り、外面はナデ。I区遺構検出面での出土。39・40は火鉢である。いずれも口縁部片である。38は小片で径が復元できなかった。口縁部付近は直立し、口縁部下にやや間隔を開けて2条の突帯を付す。突帯の間には拓本で図示したような円形の印文が並ぶ。I区遺構検出面で出土。39も小片だが強引に径を復元し直径38.8cmで図示した。やはり口縁部付近の直立部分が残る。口縁部外面には×印の印文が3つ並ぶ。II区遺構検出面で出土。

**陶磁器（40～44）** 40は陶器の搦鉢である。外面に自然釉が掛かり茶褐色を呈し、内面は胎土と同じく灰黄褐色を呈する。底部はごく低い高台を作り出す。内面には3mm間隔で10本の並行溝を櫛描きでランダムな方向に施す。II区南西段落ち部の出土。41は伊万里焼の染付碗である。口縁部付近の資料で、ゆるやかに内湾しながら口縁部にいたる。外面には草花文を描き、非常に薄く透明感のある灰緑色の釉をかける。釉には貫入が多くみられる。I区検出面の出土。42は唐津焼の碗である。底部・高台部付近が残る資料で、高台径のみ判明し4.0cmをはかる。内・外面には薄い

軸が掛かり、高台接地部は露胎、高台内部には砂目が見られる。底部内面には重ね焼き時の砂目が円形に配される。Ⅱ区検出面の出土。43は龍泉窯系青磁の碗で、太宰府分類のⅠまたはⅡ類であろう。高台は太く、角を面取りする。面取り部・接地部・内部は露胎で、そのほかの全面にやや厚めの釉がかかる。胎土は精良で灰白色を呈し、釉は透明感がある灰緑色を呈する。Ⅰ区検出面で出土。44は白磁の小碗か。高台は細くて高く、接地部は露胎である。釉は淡灰緑色で全面に貫入が入り、胎土は灰白色で精良である。Ⅱ区南西段落ち部で出土。

**土師質土器** (45) 45は土師質の坏である。底部は糸切りで平坦に形成し、体部は斜め上方に短く伸びる。調整は体部・底部内面ともに丁寧なナデ調整を施す。注記には灰褐色土中から出土したとあったが該当する土層がなく出土位置不明。

#### 上層検出面等出土のその他遺物 (第17図、図版9)

上層の調査中に、各調査区から検出中に出土したほか、Ⅱ区南西部で検出された蔵川の護岸石積み裏込土やその周囲(段落ち部)から出土、あるいは表探資料や、整理中に出土位置がわからなくなってしまった出土遺物のうち、土器以外の資料について以下にまとめて報告する。

**石器**(第17図1～4・16) 1～3は石鏃である。1は平基の正三角形鏃の完形品。長さ1.8cm、幅1.74cm、厚さ0.32cm、重さ0.6gをはかる。安山岩製でⅡ区4a層中からの出土である。2は抉入の石鏃である。両側縁が内湾し、小さな肩を持つ完形品である。長さ1.91cm、幅1.34cm、厚さ0.25cm、重さ0.75gをはかる。姫島産黒曜石製で、Ⅱ区3層中の出土。3は抉りが浅く脚の短い石鏃である。長さ1.8cm、幅1.8cm、厚さ0.38cm、重さ0.8gをはかる。安山岩製で、Ⅰ区4層中の出土。4は姫島産黒曜石製の削器である。薄手の縦長剥片の先端部付近に細かな調整を加え刃部とする。長さ1.8cm、幅2.2cm、厚さ0.6cm、重さ3.9gをはかる。Ⅰ区北側砂礫層中からの出土。16は円形で扁平な磨石。片面に浅い凹みを持つ摩擦域が見られる。凝灰岩製で、径7.8×7.4cm、厚さ4.25cmである。Ⅰ区4層出土。

**土製品**(11・13) 11はⅡ区で表探した土製管状土錘である。完形品で、他の例と異なりかなり太めである。全長4.1cm、最大太さは1.8cmと、太く短い例である。整形は大雑把で、色調は暗黄褐色を呈す。孔径0.6cmと大きい。重さは9.5gをはかる。13はⅡ区4a層中から出土した管状土錘である。おそらく上層からの混入と考えられる。完形品で、全長5.15cm、最大径1.2cm、孔径0.4cm、重さ6.65gをはかる。暗黄褐色を呈し、ゆがみが大きい。

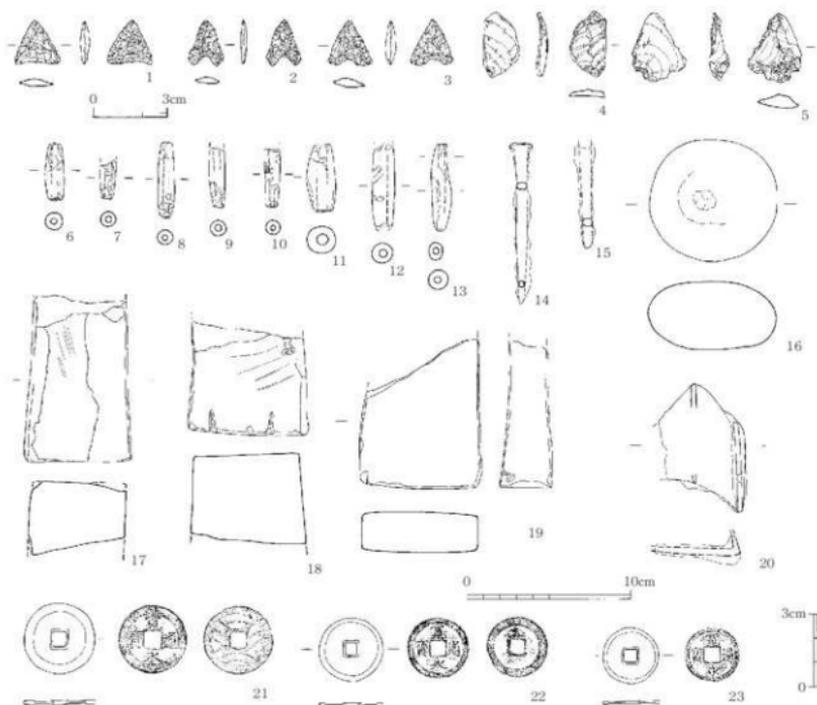
**銭貨**(21～23) すべて寛永通宝である。21はⅡ区で表探した。銅質も良く、遺存状況も良好である。直径2.83cm、孔径0.64cm、厚さ1.9mm、重さ4.4gをはかり、裏面には青海波紋が鋳出されている。22は4区で表探した。21よりもやや小さく、直径2.5cm、孔径0.58cm、厚さ1.8mm、重さ3.15gをはかる。銅質や鋳上がり状態は比較的よい。「寛」字の裏側には、正位の陽刻で「文」と読める文字が鋳出されている。23もⅣ区で表探した。銅質がやや悪く、鋳が進行しているが、文字の鋳出しは非常によい。大きさは直径2.24cm、孔径0.6cm、厚さ1.2mm、重さ1.6gをはかる。

#### (4) 下層の遺構と遺物

おもにⅢ・Ⅳ区から下層の遺構面を検出し、縄文時代の遺構・遺物が出土した。上層遺構面の下層には50cmに及ぶ分厚い砂層(5層)が堆積しており、ほぼ無遺物層であったので、これを重機で除去し、その下層にある黄灰色シルト層(6層)の上面を遺構面として調査を行った。さらに、遺物包含層でもある6層を人力で掘りあげ、下層の7層上面も遺構面として調査を行い、遺物包含層でもある7層とその下層の8層を再び人力で掘り下げて遺物を取り上げた。

調査にあたっては、Ⅲ・Ⅳ区の全域に5mマス目のグリッドを設定し、東西方向にはE～Kのアルファベット、南北方向には6～16の数字番号を付した。このうち、6～8層の遺構面・包含層が広がる範囲は、E-7～10グリッド、F-7～13グリッド、G-7～15グリッド、H-10～15グリッドの、幅10m前後で南北方向に細長く伸びる狭い範囲であり、その周辺には礫層がひろがっていて遺物包含層の堆積が認められない。

遺物包含層の堆積状況を概観しておく。6層の淡黄灰色シルト層は、標高203m以下に層厚15～25cmで西へやや傾斜しながら堆積する。7層の淡黒灰色砂質土は調査区中央部付近で40cmと厚く堆積し、調査区の南北では薄くなってほぼ認められない。8層の黄灰褐色砂質土は30～50cmと安定した堆積を見せるが、Ⅲ区の北に隣接するⅡ区では認められない(第18図)。



第17図 上層出土石器、土製品、鉄器、銭貨実測図(1～3・21～23は1/2、他は1/3)

遺構の検出状況であるが、調査区のはほぼ中央部にあたるF・G-10～12グリッド付近で6層上面より1号竪穴状遺構、1～3号土坑がまとめて検出され、調査区北部のE-8グリッドでは7層上面から掘り込まれた4号土坑が検出されたほかには、少数のピットが散在するのみである。遺物は6～8層にかけて縄文時代中～後期の土器や石鏃・槍・削器・磨石などの石器が出土している。以下、検出遺構と包含層についてそれぞれ説明を加えていく。

#### ①遺物包含層

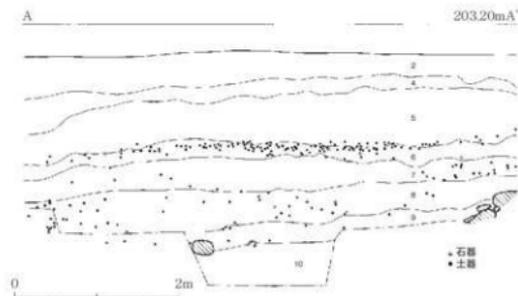
6～8層から出土した遺物の平面分布図を第19図に示す。左が6層、右が7・8層である。

まず6層の遺物出土状況を見たい。遺構面の状況は、幅13mほどの調査区に202.25～201.25mの等高線が北西に傾斜して巡り、南東側が高い。遺物は、中央部のF・G-11グリッドに顕著な分布が認められる。この付近には2号竪穴状遺構が存在するが、上述のようにこの遺構は底部付近になるまで存在に気づかずには大半を掘り飛ばしてしまったもので、この付近から包含層出土として取り上げた遺物の多くは本来は2号竪穴状遺構に含まれていたものであろう。また、土坑2基が検出されたG-12グリッドにも集中部がある。遺構が多く存在する付近に遺物も多く分布することが読み取れる。遺構がほとんど見られない北側の7～10グリッドで、遺物が数点しか出土しないのは対照的である。

次に、7・8層の遺物出土状況を見たい。7・8層の東西両側には花崗岩を主とした大きな河原礫が迫り、調査範囲も5m前後と上層よりさらに狭まる。等高線の間隔も南東側で狭くなり、土層の堆積も薄くなる。遺物の分布は、ピットを多く検出した南側の12～14グリッド付近にやや多く集中するようにも見えるが、6層で遺物の出土がわずかであった7～10グリッドにも平均的に出土している状況が見られる。

第18図は、Ⅲ・Ⅳ区の境界部にあたるF・G-10グリッドで作成した東西方向の土層図上に、遺物の出土位置を投影したものである。6層の中央付近に見られる遺物の集中は2号竪穴状遺構の出土遺物で、平面分布とあわせてみると、本来の2号竪穴状遺構の範囲を推測することができよう。

また、7～8層については、7層に比べ8層の遺物が多く出土していることがわかる。出土土器の接合状況を見ると、6層と7・8層間では接合できる資料はほぼ認められないが、7・8層間では接合する資料がまま見られた。このことから、7・8層は同じ包含層を起源とする流入堆積土で比較的



第18図 Ⅳ区土層図、Ⅲ・Ⅳ区下層遺物垂直分布図 (1/60)

近から流れ込んだもの、6層はその後時間をおいて流入したものと考えられる。出土土器から、7・8層の堆積は縄文時代後期より前、6層の堆積は縄文時代後期以降と考えられる。

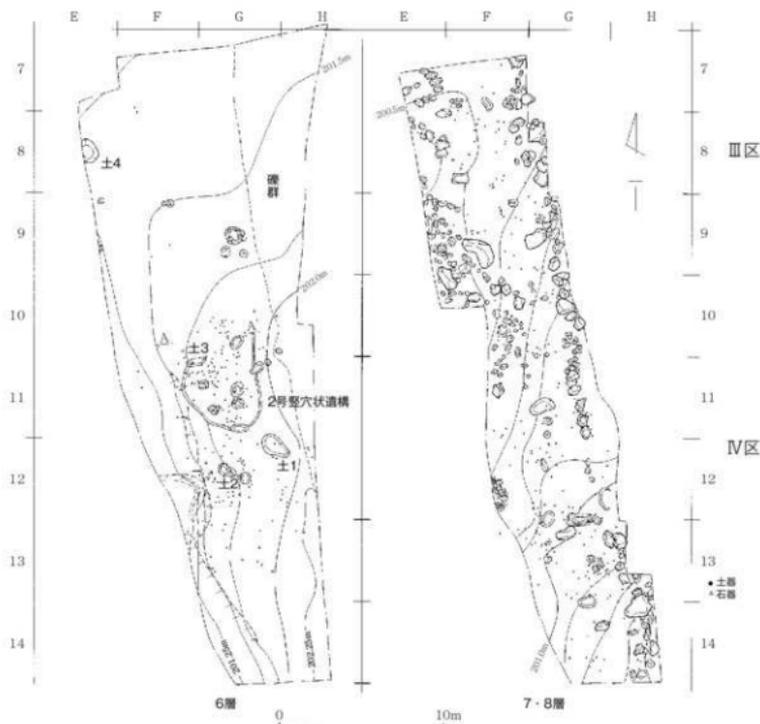
なお、遺物の出土を見なかった9層について遺物が分布しているのは、地形の傾斜によって上層の遺物が9層中から出土したかのように投影されてしまっ

たものがある点を確認しておきたい。

以下、包含層中から出土した土器について報告する。

#### 6層中出土土器（第20図、図版10）

**縄文土器（1～13）** 1は口縁部に連続押点文を施す中期西和田式の鉢の口縁部である。胴部には横方向に平行押引文を施す。2は阿高式系の鉢の口縁部片であろう。小片で径は不明。3は後期鐘崎式の鉢の口縁部片である。波状口縁でヘラ状工具による沈線を口縁端部上面に1条施し、口縁部下には併行沈線と凹文を付す。4～8は貝殻条痕により内・外面を調整する粗製の鉢形土器である。4は口縁部片で、わずかに屈曲する胴部上半～口縁部が残る。調整は丁寧で、内・外面ともに貝殻条痕により成形した後丁寧なナデにより条痕を消す。後期か。5・6も口縁部片で、小片により径は復元できず傾きも自信がない。5は口縁部内面上端を上につまみ上げて口縁部を三角形に肥厚させる。内面には条痕がよく残り、外面は条痕の後ナデ調整でこれを消す。6は口縁端部を四角く収めるものである。内・外面ともに貝殻条痕の上から丁寧なナデを施す。7・8は底部片である。いずれも、内・外面ともに貝殻条痕で成形した後ナデ消しをしており、7は外面に、8は両面に貝殻条痕の痕跡が良く残る。7は底径が10.8cm、8は14.0cmをはかる。9～12は器壁調整にミガキを採用



第19図 III・IV区下層遺構配置図、遺物平面分布図 (1/300)

する一群である。9・10は鉢の口縁部片である。ともに、ゆるやかに外湾する口縁端部付近のみが残り、小片のため径は復元できず傾きもやや自信がない。器壁調整は内面がナデ、外面は横方向の磨きを施し、色調はともに灰褐色～茶褐色を呈する。11は小鉢であろう。内・外面ともに丁寧な横方向磨きを施すもので、外面がやや黒色系統に焼成される。口径は11.2cmをはかる。12は浅鉢の口縁部片であろうか。ゆるやかに内湾する口縁部の小片で、傾きは自信がなく径は復元できない。内・外面ともに横方向のヘラ磨きを施す。13は粗製鉢の底部片である。平底で、胴部はわずかに内湾しながら斜めに伸びる。器壁調整は内面がナデ、外面は細かいミガキである。これらは後期の土器群であろう。

#### 7層中出土土器(第21図、図版10)

縄文土器(14～21) 14は口縁部付近とやや下がった位置にそれぞれ2条の平行隆帯文を付す鉢で、溝B式に位置づけられよう。下側の平行隆帯文は山形にめぐるか。隆帯文付近の外面調整はナデ、内面には条痕が良く残る。小片で全形や径は不明、傾きには自信がない。15は口縁端部を肥厚させて上面に列点文を施し、胴部上位の外面にはヘラ状工具で斜め方向に平行線を連続させる。平行



第20図 下層遺物包含層中出土土器実測図その①(1/3)

線は左下から右上方向に跳ね上げるように描かれる。外面調整はナデ、外面調整は条痕。後期初頭出水式系の資料か。16は口唇部に列点文を施して口縁を波状に仕上げ、胴部には太い押し引き文を配する阿高式系統の鉢である。17～20はいずれも鉢の底部である。17～19は底部外面を窪ませて高台状に仕上げ。20は平底。いずれも、外面は条痕調整後ナデ仕上げ、内面も同様であるが条痕が残るものが多い。前～中期の土器群か。21は口縁部にリボン状の突起を配する深鉢である。胴部上位には平行押し引き文、中位にS字状文を配する。阿高式土器であろう。これらのうち、19・21は7・8層中から出土した土器が接合し、20は6・7層中から出土した土器が接合した。

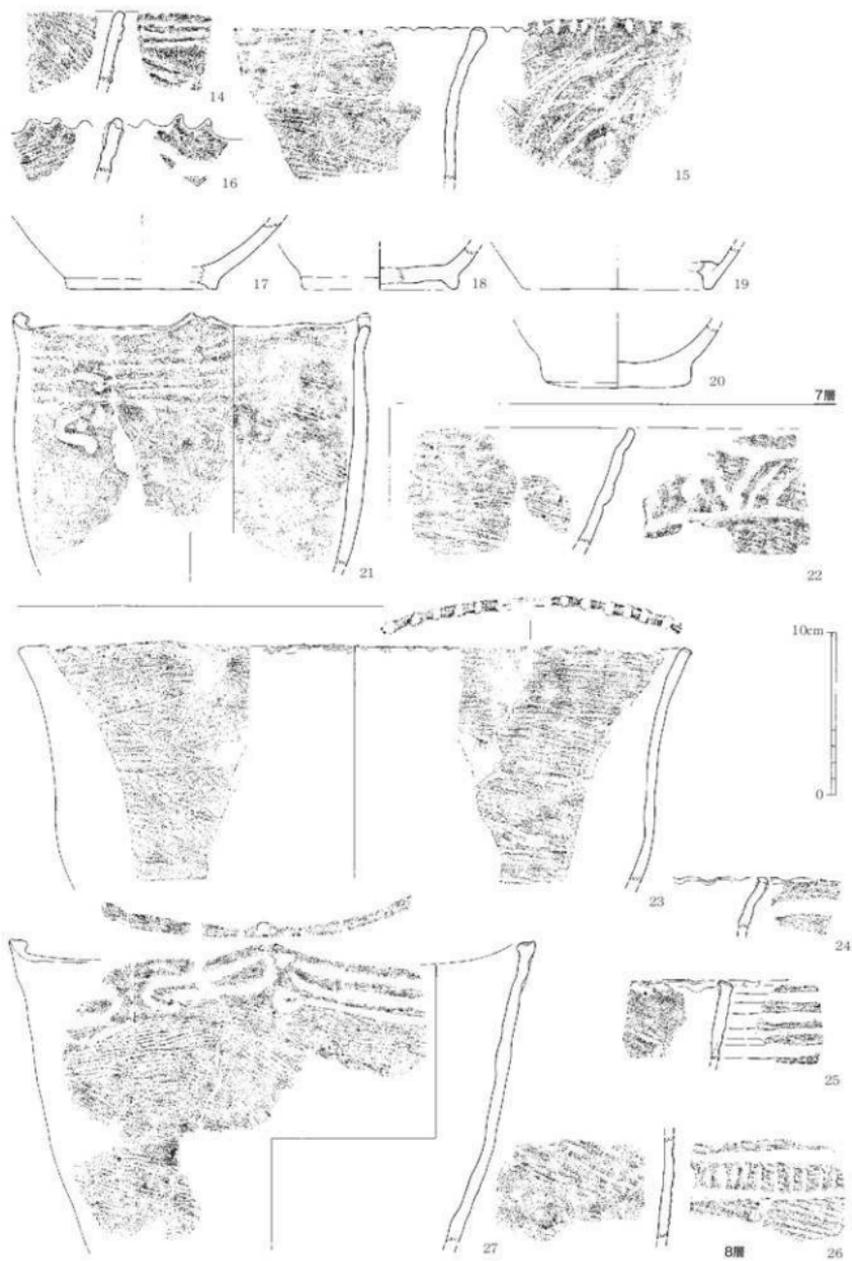
#### 8層中出土土器（第21～23図、図版10）

**縄文土器（22～50）** 22は深鉢の口縁部片である。口縁部下に5cm間隔の併行沈線をめぐらせ、その間に山形の沈線文をめぐらせる。沈線はヘラ描きで鋭い。後期初頭出水式系の資料か。23は口唇部に列点文をめぐらせる深鉢である。器壁には内・外面ともに貝殻条痕が良く残る。口縁部径が復元でき、41cmをはかる。西和田式か。24～33はいずれも、胴部上位に太い押し引き文を配する鉢形土器の一群である。24・25は口唇部に列点文を配し、口縁部下の外面に平行する太い押し引き文を施す鉢形土器である。いずれも小片で径は不明。26は鉢形土器の胴部片で、口縁部に近い破片か。二条の太い押し引き文を平行させ、その間をやや細い縦方向の連続押し引き文で充填する。文様部以外の外面と内面はともに貝殻条痕が良く残る。27は比較的大きな破片で口縁部径が復元でき32cmをはかる。口縁部は波形に仕上げ、その頂点にあたる口唇部に点文を配する。口縁部下にはやや崩れたS字状文を横向きに連続させ、その下には横方向の貝殻条痕が良く残る。内面調整も貝殻条痕である。28～33はいずれも太い押し引き文を器壁外面に配し、内面には条痕がよく残る鉢形土器の破片である。28は口唇部に列点文を配し、口縁部下には縦方向の短い押し引き文・横方向の沈線を配したあと、その下に三角形の渦巻き文をやや太い押し引き文で配する。29は口唇部に縄文がみられ、口縁部下にはS字状文を太い押し引き文で配する。30は胴部片で、波形に太い押し引き文をめぐらせる。31は2条の平行押し引き文、32も横方向の押し引き文がみられる。33は口縁部を大きく凹凸に仕上げるもので、さらに口唇部には列点文を配する。胴部にはやはり太い押し引き文で複雑な文様を配する。これらはいずれも阿高式土器あるいはその系統の土器群であろう。34～41はいずれも鉢形土器の胴部片で、そのほとんどは内・外面に条痕を良く残す。いずれも小片で径は復元できない。39・41は内・外面に条痕調整を施したあとナデ消しを行っており条痕の残りは悪い。42～46は鉢形土器の底部片である。すべて上げ底状に仕上げ高台状の接地部がめぐる。外面には底部も含めよく条痕が残る、内面にはナデ仕上げも認められる。以上は後期初頭に属するか。47はおそらくキャリバー形を呈する深鉢の口縁部片である。器壁外面に、沈線文と縄文から構成される複雑な擦消縄文を施す。後期に属する。48～50は内・外面にミガキ調整の痕跡が認められる深鉢の口縁部～胴部片である。いずれも器壁の光沢は乏しく、色調も明るめで、ミガキというよりはヘラ状工具を用いた強いナデ調整としてもいいかもしれない。

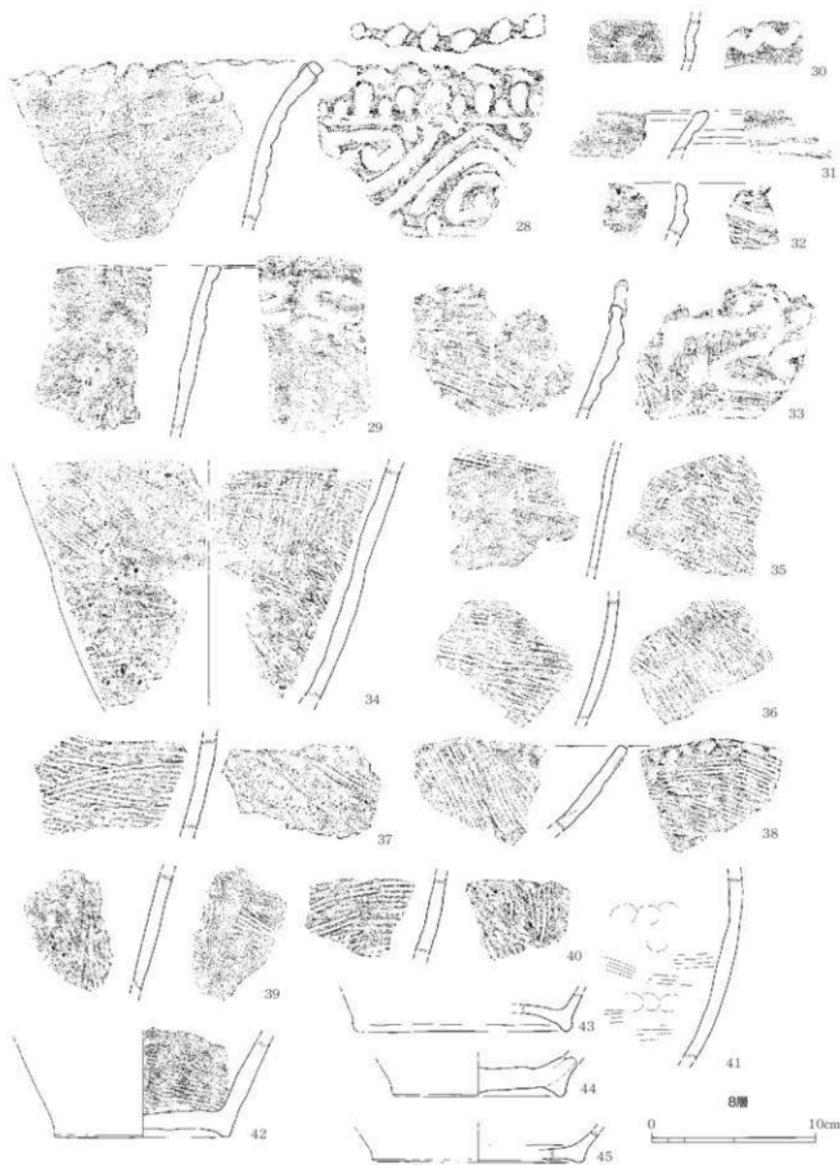
#### ②竪穴状遺構

##### 2号竪穴状遺構（第24図、図版6）

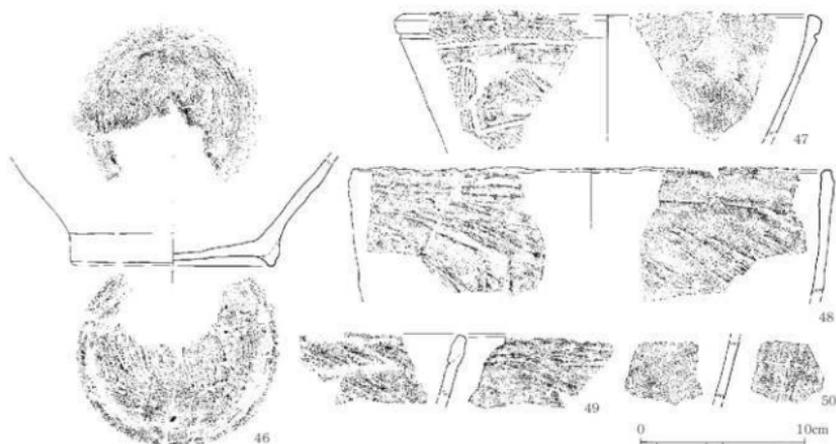
G-11グリッドで検出した。6層の掘り下げ中に遺物がまとまって多量に出土したため、改め



第21図 下層遺物包含層中出土土器実測図その② (1/3)



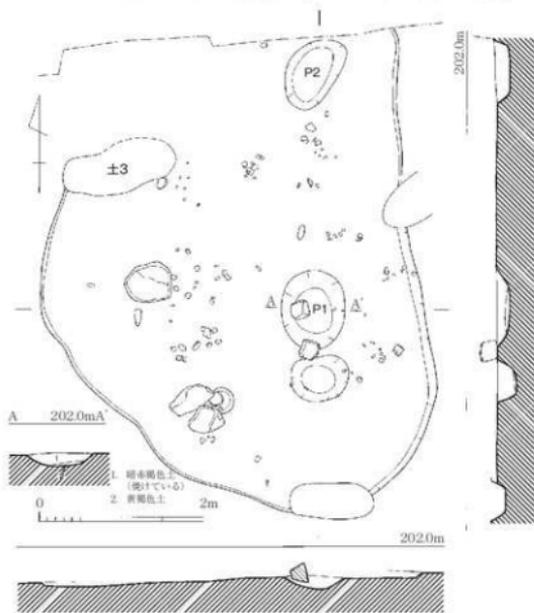
第22図 下層遺物包含層中出土土器実測図その③ (1/3)



第23図 下層遺物包含層中出土土器実測図その④ (1/3)

て周囲を精査したところ、6層とほぼ変わらない土質ながら遺構のプランが明らかになり、遺構と認識できたものである。従って、図示した状況での残存壁高はわずかに5cmほどであるが、本来は20cmほどの深さがあった遺構と考えられる。確認した遺構は、底面で不整長円形プランを呈し、

南北5.8m、東西4.6mの規模を測る。北側の辺は、上記のような検出経過であったため失われているが、遺物がまともに出土している範囲から本来の範囲を推定すると、第20図の土層A-A'ラインから1mほど北側まで伸びるものとみられる。床面は硬く締まった状態ではなく、またピットが3つ検出されているが、いずれも深さが20cmと浅く、堅穴住居跡の柱穴とは評価しがたい。また、Pit1・2の埋土中には焼土が堆積していたが、床面、壁ともに焼けた痕跡がないので炉跡とも判断できない。以上より、性格不明の堅穴状遺構として報告しておく。遺構内からは、縄文後



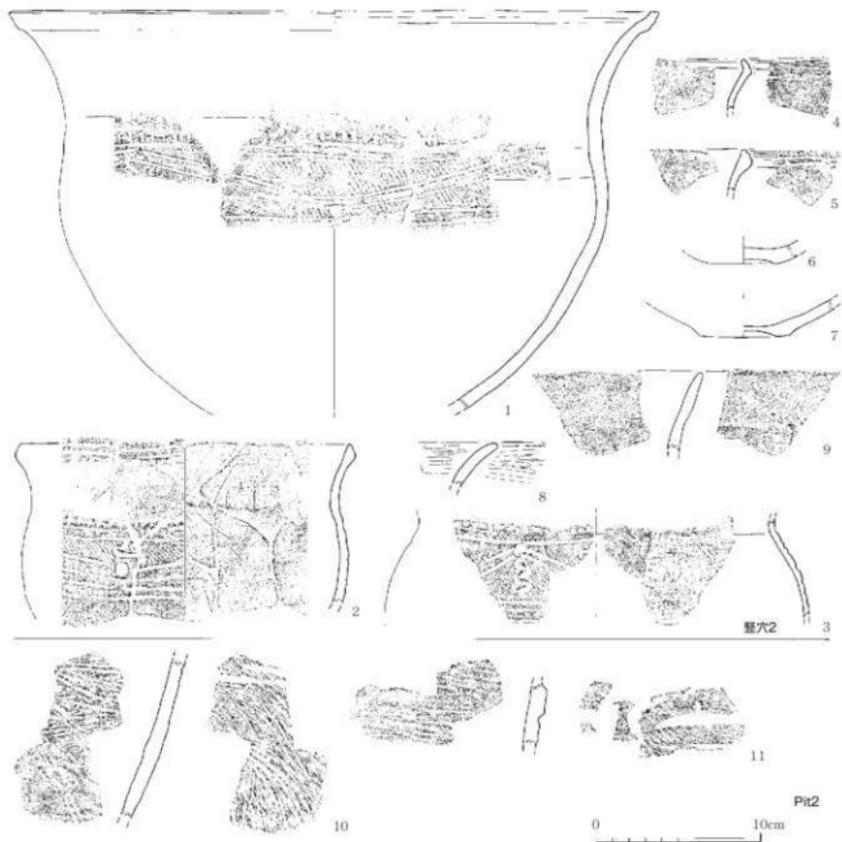
第24図 2号堅穴状遺構実測図 (1/60)

期中頃の土器が多量に出土した。

出土遺物 (第25・27図、図版10)

縄文土器 (第25図1~9)

1~7は縄文時代後期太郎迫式の鉢である。1は器形のほぼ全形が復元できる資料である。口縁部を短く屈曲させ外面には2条の並行沈線をめぐらせる。頸部はミガキ調整を施し無文、胴部上位には列点文をめぐらせ、その下に4cmほどの間隔を開けて二本の並行沈線を2セットめぐらせ、内部をやはり並行沈線で山・谷状に区画して縄文を施文する。山の頂点には小さな「S」字状文を、谷の直下には点文を配する。口径39.6cmをはかる大型品である。2はやや小型の鉢である。口縁部は肥厚させて外面に二条の並行沈線を刻み、胴部文様は1とよく似るが点文と逆「S」字状文が上下に施文される点が異なる。口径は20.0cmをはかる。3は胴部文様帯の付近のみ残る破片である。文様構成は2に類似するが、列点文の上下に沈線をめぐらせる点と「S」字を縦に2つ重ねた文様



第25図 2号竪穴状遺構・Pit2出土土器実測図(1/3)

を用いる点がわずかに異なる。胴部最大径付近まで残っており、24cmほどをはかる。4・5は鉢の口縁部片である。1は口縁上端を多少内傾させながら上に引き上げるように短く屈曲させ対面に並行沈線を施し、5は2と同じように口縁部を三角形に肥厚させて外面に並行沈線を施す。ともに頸部外面にはヘラミガキがみられる。いずれも小片で径は復元できない。6・7は底部片。6は丸い底部の最下部を上げ底にするもので、全体の器形が不明である。内・外面にミガキ調整を施し、底径は4cmほどと小さい。7はわずかに上げ底の薄い底部から屈曲して斜め上方に直線的に伸びる胴部過半までが残る破片である。やはり内・外面ともにミガキ調整を施す。8・9は深鉢の口縁部片であろう。ともに小片で全形も径も不明である。8は如意状に外反する口縁部が残る。内・外面ともに丁寧な横方向ミガキが認められる。9は直線的に斜め上方に伸びる口縁部片である。小片だがわずかに波状口縁状を呈するか。調整は、内・外面ともにナデ。なお、小片で図化はできなかったが、このほかに貝殻刺突文を施す個体もみられる。

石器（第27図12）12は凝灰岩製の磨石である。分厚い円礫の上下の中心部付近に磨痕が認められる。表面には全体に亀裂が入る。径は10.8×9.9cm、厚さ7.3cmほどをはかる。

### ③土坑

#### 1号土坑（第25図、図版7）

Ⅳ区に位置する。G-12グリッドで検出した。竪穴状遺構の南側1mの位置にある。6層上面より掘り込む遺構である。平面形状は不整形円形プランを呈し、規模は東西1.9m、南北1.3mをはかる。残存深さは10cm程度と浅い。埋土は黒褐色砂質土で、炭化物を多く含む。薄手の無文土器胴部片が出土したが図示できるほど遺存状況のよいものはない。

#### 2号土坑（第25図、図版7）

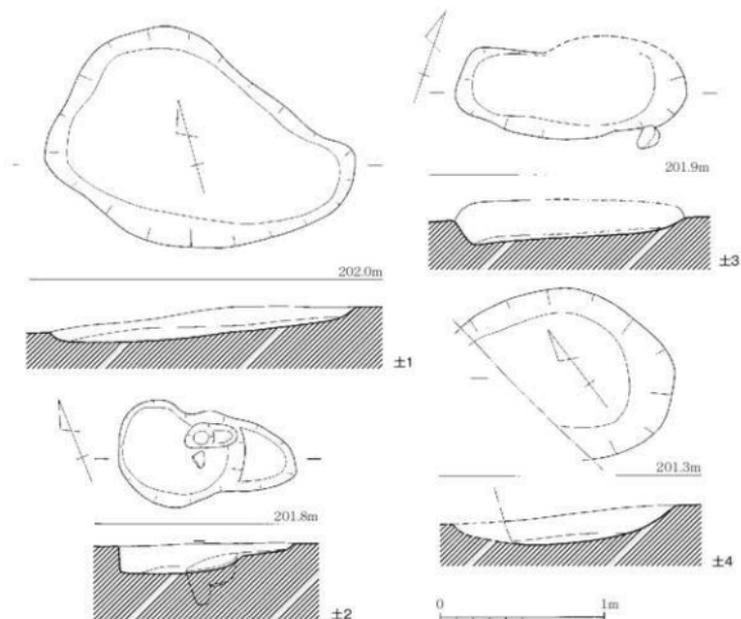
Ⅳ区に位置する。1号土坑の西側で検出した。やはりG-12グリッドにあり、6層上面から掘り込む遺構である。平面形状は略東西方向に長い長楕円形状で、東側に一段高いテラスを有する。規模は東西長が2.15m、南北幅は1.2m、残存深さは35cmを測る。埋土は黒褐色砂質土で、厚さ1cmと分厚い縄文時代後期の無文土器の胴部が底部直上から出土しているが、図示できる資料はない。

#### 3号土坑（第25図）

Ⅳ区に位置する。F・G-11グリッドで検出した。竪穴状遺構の北西端部を切る土坑である。平面形状は長円形プランを呈するものと思われるが、北壁は削平されていて全形は不明である。残存規模は東西が1.4m、南北が0.5mをはかり、深さは16cm最大である。床面は若干西側に傾斜している。無文土器片が出土したが、図示できる資料はない。

#### 4号土坑（第25図、図版7）

Ⅲ区に位置する。E-8グリッドで検出した、7層上面より掘り込まれた長円形プランの土坑である。西側は調査区域外にひろがる。残存規模は東西が1.2mほど、南北が1.1mをはかり、壁面は斜めに掘り込まれていて床面は凹む。埋土は黒褐色砂質土である。出土遺物はない。

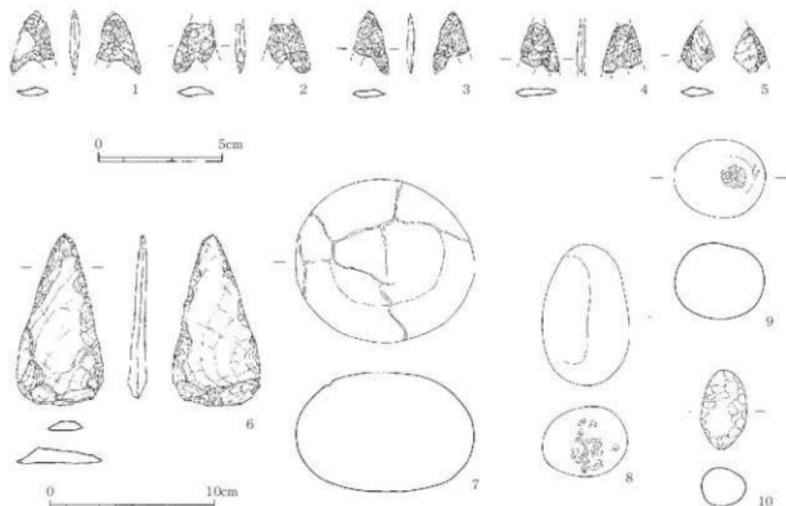


第26図 1～4号土坑実測図 (1/30)

④その他の出土遺物 (第27図、図版10)

下層の調査中に、おもに包含層から、打製石器と敲石が出土した。いずれも、6～8層の包含層中から出土したものである。以下、まとめてみていきたい。

**石器 (1～10)** 1～5は石鏃である。1は比較的長脚の鏃で、片面は大きく欠損する。残存長さ2.35cm、幅1.77cm、厚さ0.32cm、重さ1.1gをはかり、Ⅳ区6層の出土である。2は先端と片脚を欠損する大型の石鏃。調整は粗い。残存長さ1.95cm、幅1.7cm、厚さ0.4cm、重さ1.1gをはかり、Ⅲ区G-9グリッド8層中からの出土である。3は長脚鏃で片脚を欠損する。鋸歯状の側縁には丁寧な調整を加える。長さ2.5cm、幅1.45cm、厚さ0.3cm、重さ0.7gをはかる。Ⅳ区のH-13グリッド7層中からの出土。4は横長剥片を素材とする鏃。先端、両脚を欠損する。残存長さ2cm、幅1.6cm、厚さ0.32cm、重さ0.85gをはかり、Ⅳ区G-14グリッド8層中から出土した。5は一部に自然面を残す縦長剥片の側縁に調整を加える。長さ1.85cm、幅1.3cm、厚さ0.4cm、重さ0.75gをはかり、Ⅳ区H-13グリッド8層から出土した。石材は、1・3は安山岩、2・4は姫島産黒曜石、5は漆黒の黒曜石裂である。6は大型の楯状石器で先端は薄く尖る。形状は二等辺三角形に近く、基部は丸く突き出る。横長で薄手の剥片の両側縁には粗い剝離調整を、基部側は階段状剝離を施す。長さ11.4cm、幅5.35cm、厚さ3～11cm、重さ52.5gをはかり、Ⅳ区F-10グリッド6層から出土した。緑泥片岩製。7～9は敲石である。7は長径10.9cm、短径9.9cm、厚さ7.3cmをはかるやや大きめの敲石である。上下面にやや平坦な磨り面が形成される。G-10グリッド6層から出土した。砂岩製。8は乳棒状の石材の一端に細かな敲き痕が認められる。長さ8.7cm、幅5.3cm、厚さ4.2cmをはかり、Ⅳ区F-13グリッド



第27図 下層各遺構等出土石器実測図(1～5は1/2、他は1/3)

下8層から出土した。砂岩製。9は小型で円形に近い磨石である。全面に磨痕が残り、一部に敲き痕による凹部が見られる。径 $5.3 \times 4.8$ cm、厚さ4.8cmをはかる。IV区G-13グリッド6層から出土。硬砂岩製。10は軽石で、長軸4.8cm、短軸2.9cm、太さ2.3～2.7cmのラグビーボール状を呈し、全面に打ち欠き調整痕がみられる。



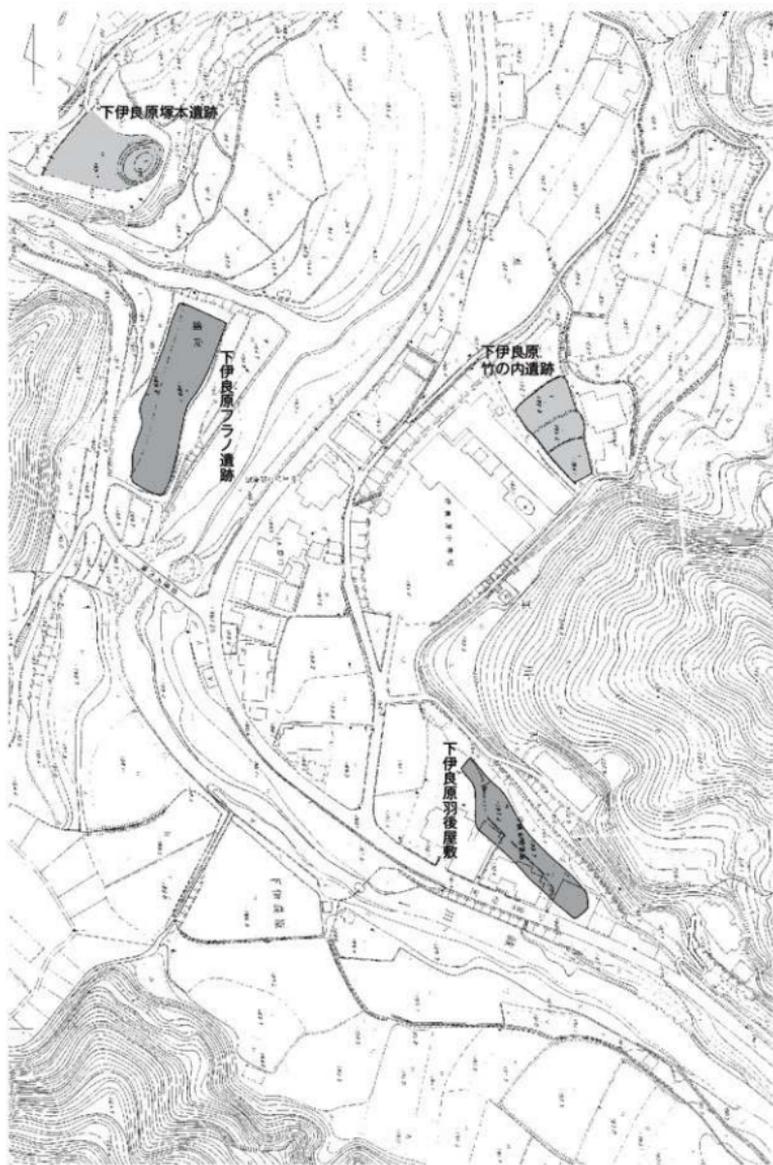
伊良原中学校生(1名)の職場体験風景

## 4 小結

上伊良原マトコロ遺跡からは2層の文化面が確認された。上層からは中～近世の遺構・遺物が出土した。主な遺構としては、中世に属すると考えられる掘立柱建物跡があり、その周囲にはいくつかの柵列状遺構が分布していた。おそらく、これらが一体となって中世の集落を構成していたものと考えられる。東側の斜面上位にあたる上伊良原榎遺跡では、やはり中世に属する掘立柱建物跡6棟や溝跡などからなる集落が検出されており、上伊良原マトコロ遺跡で検出した集落もこの一部を構成するものである可能性が考えられる。両方で検出された建物の間にはかなりの距離があり、建物の主軸方位は、上伊良原榎遺跡では大略南北方向にとる一方で、上伊良原マトコロ遺跡では南東～北西方向にとっており、さらには規模や柱間距離なども異なるなど、両者の間には多くの相違点が見られる。しかし、建物の規模については上伊良原マトコロ遺跡が斜面下位にあたり集落の中では周辺部に位置すると考えられること、建物の包囲については両者ともに遺構面のコンターラインに平行する方向に主軸方位をとっていると理解すれば整合性があることなどを鑑みれば、やはり両者ともに一体となって中世集落を構成していたと考えてよかろう。中世の山間地における小規模集落の一端を明らかにすることができたものと思われる。

縄文時代については、おもに中期末から後期にかけての出土遺物が出土し、後期に属する遺構も検出できた点が注目される成果であろう。土器の多くは包含層中からの出土であり、数点の前期竊式に該当する資料を含むほかはおおよそ阿高式から擦消縄文土器までが散発的に出土する状況であった。とくに、阿高式とその系統に含まれるとされる西和田式土器の出土量が卓越している点に注意されよう。

また、6層上面から掘り込まれたと考えられる土坑からは、後期太郎迫式にあたる土器が多く出土した。土器はほとんどが小片であり、また遺構面での検出に失敗してしまい包含層掘削中に遺構の認識にいたったため本来土坑中から出土したはずの土器のいくつかが含まれる中出土として取り扱われることとなったが、幸い包含層掘削中に土器の出土位置を記録しており、その記録から包含層中における土器集中部分が復元できたため、ある程度遺構の形と本来含まれていた土器について復元することができたのは幸いであった。



第28図 下伊良原フラノ遺跡・下伊良原羽後屋敷遺跡周辺地形図 (1/2,000)

## IV 下伊良原フラノ遺跡の調査報告

### 1 遺跡の概要

**遺跡の立地** 下伊良原フラノ遺跡は、祓川上流域左岸の低位段丘上に立地する。遺跡の東では、北西に向かって流れ下ってきた祓川が大きく東に反転して屈曲しており、川底が激しい水流に挟まれ、流れが深く滞留して深い淵が形成されている。このため、夏場になると上にかかる岩屋河内橋から祓川に飛び込む若者で賑わう。また遺跡の北側では、西野山地から流れ出てきた急流である岩屋河内川が祓川へ直角に合流しており、遺跡の乗る水田面は岩屋河内川に向かって急激に落ち込む。遺跡の西側は、等高線の密な山塊に接して、東側は5mほど下に水田面があるが、すぐに祓川に洗われており、狭小な平坦地となっている。

**周辺の遺跡** 遺跡から岩屋河内川を挟んで北岸には、平成20(2008)年度に発掘調査が行われ、縄文時代早期・後期、中世の遺構や包含層が出土した下伊良原塚本遺跡がある。また、東を流れる祓川の対岸にあたる河岸段丘上には、平成24年度に調査を行い縄文時代・中世の遺構・遺物が出土した下伊良原竹ノ内遺跡(未報告)や本報で中世の土坑や土壇墓などを報告する下伊良原羽後屋敷遺跡などが分布する。

**調査地点の概要** 調査地の地番はみやこ町犀川下伊良原1959-2番地で、地目は水田、旧地表面の標高は約188mで、東・北側に緩やかに傾斜する水田面を形成している。調査面積は約2,100㎡である。

### 2 調査の経過

**調査の着手まで** 下伊良原フラノ遺跡は、ダムの建設によって水没する国道449号線の付け替え事業に伴い、新設される橋梁の建設工事に伴って調査の必要性が生じたものである。平成21(2009)年度中より橋脚部分について発掘調査が必要かどうかの協議を行っていたが、平成23(2011)年度になって対象地である水田の買収が終了した旨の連絡があり、試掘調査を行った結果、遺跡の包蔵を確認したものである。

**調査の経過** 平成23(2011)年10月25日より、重機を導入して表土剥ぎを開始した。排土を保管する場所が調査区周辺に確保できず、やむを得ずダンプカーに積み込んで搬出することとなったが、このために表土剥ぎ作業は効率が悪くなり、難航した。10月27日に作業員を投入し、人力による作業を開始、まず北側壁の土層断面図の作成からスタートした。11月1日より、遺物包含層を手で掘り下げながら中世の遺構面を検出する。遺構の量は少なく、柱穴群や溝などからなる中世の遺構群について検出できたものから掘り下げていく。11月17日には中世遺構面を完掘して仮設足場の上から全景写真を撮影する。

写真撮影後に、下層の調査に入る。中世の遺構面を構成する6層は縄文時代の遺物を多く含む包含層で、これを人力で掘り下げたところ、下層にあたる7層上層から縄文～古墳時代の遺構を検出した。検出した遺構は4基の土坑であった。12月1日に下層遺構面の完掘写真を撮影し、図化作業を行って人力による作業を終了し、12月6日より重機を用いた埋め戻しを行って本遺跡の調査をすべて終了した。



第29図 下伊良原フラノ遺跡遺構配置図 (1/300)

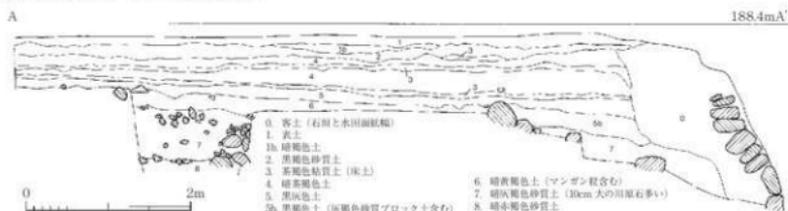
### 3 調査の成果

#### (1) 基本層序

調査区を略東西方向に横断する基本土層図を、調査区の北側で作成した(第30図)。簡単に見ておく。

図の右端に見られる0層は水田東側の法面構築のための客土で、東端部には法面保護のための石垣も見られる。1層は表土、1b層は暗褐色土、2層は黒褐色砂質土で、これらは水田耕作土である。部分的に見られる3層は水田の床土であろう。4層は暗茶褐色土、5層は黒灰色土、5b層は灰褐色砂質ブロック土を含む黒褐色土で縄文晩期の土器が出土する。これらは流入堆積土および水田造成時の盛土であろう。6層は暗黄色褐色土でマンガン粒を含む。この上面が上層の遺構検出面にあたり、主に中世の遺構が検出される。層厚は10～30cmを測る。7層は10cm大の河原石が多く堆積する暗灰褐色砂質土で層厚は70cmに達する。この上面が下層の遺構検出面にあたり、主に縄文～古墳時代の遺構が検出された。8層は暗赤褐色砂質土となる。

なお、調査においては基本的に7層上面までの掘り下げにとどめたが、これは7層中に遺物をほとんど包含していなかったこと、7層上面で縄文時代前期の遺構を検出したが、それよりも古い遺物が出土しなかったことによる。



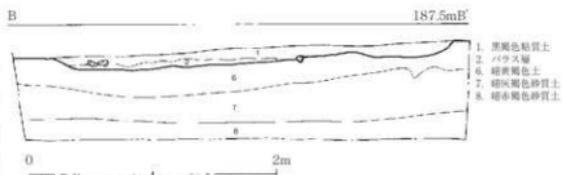
第30図 下伊良原フラノ遺跡基本土層図 (1/60)

#### (2) 遺構と遺物

##### ①溝

##### 1号溝 (第31図・図版12)

上層遺構面から検出した。調査区の南側を、西南から北東に向かって伸びる、全長22mほどの溝状遺構である。幅は一定ではなく、2m



第31図 1号溝土層図 (1/40)

～3.5mを測るが、これは上部の大部分が削平されたためと考えられ、ほぼ平坦面をなす底面までの残存深さは15cmと極めて浅い。溝の堆積土は1層が黒褐色粘質土、2層はバラス土となる。溝内より中世の土師器の極小片の他に、弥生土器が混入して出土した。中世土師器はいずれも図示できなかった。埋土や出土遺物から、中世の遺構であろう。

##### 出土遺物 (第33図、図版14)

弥生土器 (1) 1は甕の底部片である。底面は平底で直径6.4cmと小さい。器壁調整は、内・外面ともにナデ。中期の資料であろう。

## ②土坑

上・下層遺構面からは多くの掘り込みを検出した。柱穴状を呈するものもあれば大形で明確な掘り込みとしっかりとした壁を持つ掘り込みもあり、浅くアメーバ状をなし底面が著しく凹凸なものもあった。このうち、比較的大きく明確な掘り込みをもち壁や床がしっかりしているものを土坑として報告する。なお、それ以外の掘り込みについてはピットとして一括しているので留意されたい。

それぞれの土坑の検出面については報文中で述べる。

### 1号土坑（第32図、図版13）

下層遺構面にあたる7層上面から検出した。調査区の中央部やや西側で検出された土坑である。平面形状は、中央で捻れる、南北方向に長い隅丸長方形を呈する。北端の床面には2つの小穴を有する。床面は中央に高く、南北はやや下がる。残存規模は、検出面で南北3.0m、東西1.2m、残存深さは10～20cmを測る。

出土遺物（第33図、図版14）。

縄文土器（2）2は口縁部下に二条の刻目隆帯をめぐらせる深鉢である。口縁部はわずかに開きながら上に伸び、端部を細らせる。晩期突帯土器とも考えられるが、器壁調整に特徴があり、外面が太くはっきりとした条痕を縦方向に施し、内面はやや浅い条痕を横方向に施す。南九州において見られる、轟A・B式の間を埋める土器形式とされる西ノ齒式土器とみたい。

### 2号土坑（第32図、図版13）

下層遺構面にあたる7層上面から検出した。調査区の北側やや西寄りにある。平面形状は不整長円形を呈する。長軸を南北方向にとり、南側で2段のテラスを持つ。土坑の底面は2段目のテラスより30cm下がり、やや丸みを持つ。規模は検出面で南北3.25m、東西1.2～2m、残存深さ70cmを測る。土坑の下層からは隆帯土器が、上面近くからは土師器甕が出土した。出土遺物から、古墳時代の遺構か。

出土遺物（第33図）。

縄文土器（3）3は口縁部下に一条の刻目隆帯をめぐらせる深鉢の口縁部片である。小片で口径は復元できず、傾きも自信がない。隆帯は高さが低く刻目も明瞭ではない。器壁調整は内面がナデ、外面は浅い条痕。

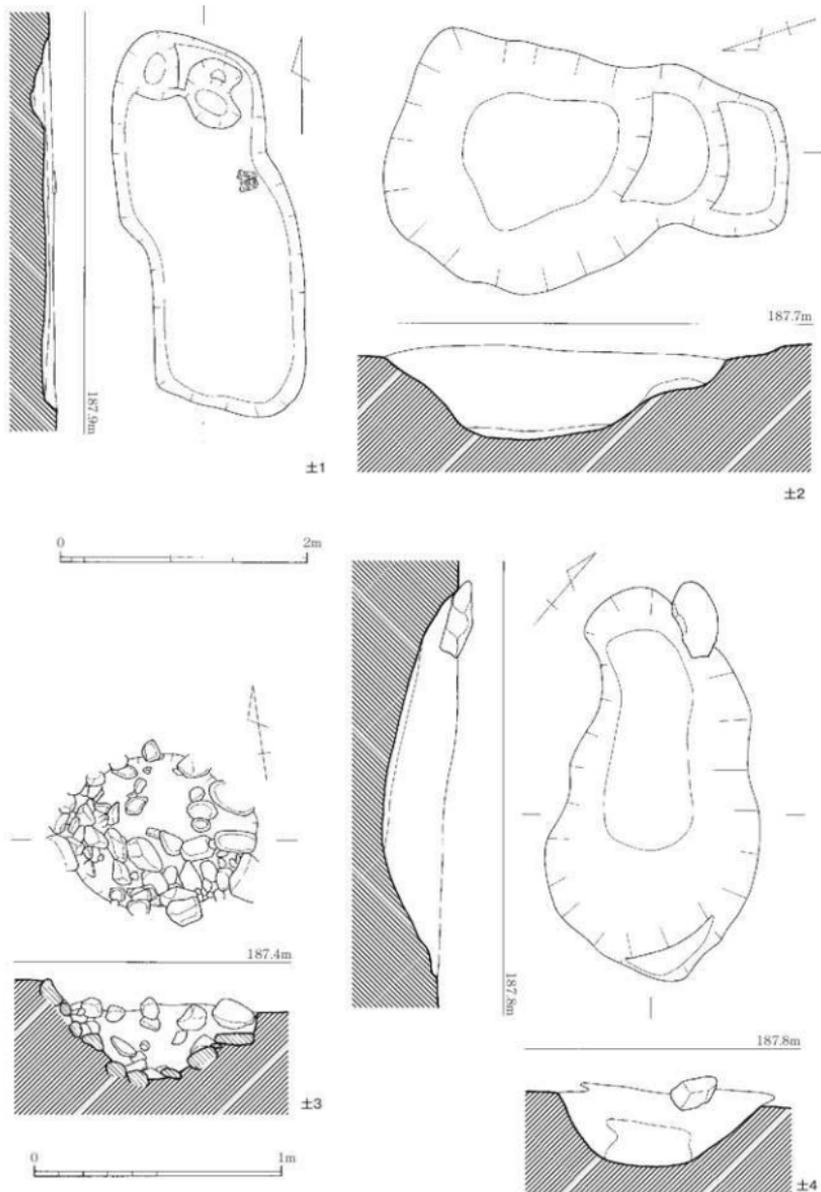
土師器（4）4は甕の口縁部片である。小片で径は自信がないが22cmほどに復元した。頸部はよく締まり、口縁部は直線的に伸びて端部を四角く収める。5世紀前半代の資料か。

### 3号土坑（第32図）

調査区の北側ほぼ中央部に検出された土坑である。やはり7層上面から掘り込む。平面形状はややゆがみのある円形で、規模は80×65cmほどをはかる。残存深さは35cmほどである。なお、床面や壁に河原石を配すように見えるが、これはおそらく人為的なものではなく、礫集中部に土坑を掘り込んだものであろう。埋土はやや粘土質の黒褐色土で、出土遺物はなく、時期を判断する明確な手がかりはない。

4号土坑 (第32図)

調査区の北側西寄りで見出された。北西端を2号土坑に切られ、これより古い。長軸を南北方向



第32図 1～4号土坑実測図 (3号土坑は1/20、他は1/40)

とる、不整長楕円形の土坑である。7層上面から掘り込まれている。床面はやや南に傾斜し、幅は65cm前後をはかる。検出面での規模は全長3.1m、幅1～1.7m、深さ60cmを測る。出土遺物には縄文土器があり、特に表裏に条痕のある土器や丸底となる底部付近の土器が出土したことから、縄文時代前期の遺構と考えたい。

出土遺物 (第33図)。

縄文土器 (5・6) 5は鉢の底部付近の資料であろう。器壁は厚く、強く湾曲する。形状から丸底を呈するものであろう。内・外面に太い条痕が明瞭に残り、前期の資料であろう。6は刻目隆帯文土器か。鉢の胴部上半の隆帯文をめぐらせる部分の小片である。

### ③ 落ち込み状遺構

1号落ち込み状遺構 (第29図、図版13)

上層遺構面から検出した。調査区の北東端で検出された、東西幅3m、南北長4m、残存深さ30～50cmほどの不整形な大きな落ち込み状遺構である。東側は段落ちにより削平されて失われており、また、南側は新しい落ち込みに切られる。遺構内には花崗岩の大石が点在する。埋土は5b層とした黒褐色土が20cmほど堆積し、縄文時代晩期の土器が出土した。性格や所属時期は不明ながら、浅い谷状の地形を形成しており、自然流路であろうか。

出土遺物 (第33図)

縄文土器 (7～11) 7～11はいずれも縄文晩期黒色磨研土器の浅鉢である。7・8は胴部屈曲部付近が残る資料である。一度逆「く」の字に折れて、すぐに反転する。内面は外面よりなだらかに仕上げる。器壁調整は内・外面ともにミガキ。古閑式期の資料であろう。9は口唇部のいわゆるリボン状突起が残る資料で、黒川式期のものか。10・11は直線的に開く口縁部付近の資料である。ともに、内・外面を丁寧なミガキで覆う。

### ④ 遺物包含層

上層遺構面の基盤を構成する6層を人力で掘削して下位遺構面を検出する際に、土器が出土している。量は少ないが、上層遺構面の下限を決定する資料であることから、ここで報告しておく。

6層出土土器 (第34図)

縄文土器 (7～11) 7～9は深鉢の胴上位～口縁部片である。いずれも小片で直径は復元できず、傾きもやや自信がない。7は口縁部外面につまみ出したような細い突線を縦位に連続施文するものである。突線の長さは2.5cmほどでやや湾曲し、間隔は8mm程度で、おそらく口縁部下を一周する。その下に幅5mmほどの低い突帯を縦横に配し、小さな刻目を連続させる。器壁は黒色でやや光沢があり、器壁調整は内・外面ともに横位の貝殻条痕である。8は7と同一個体である可能性があるが接合箇所がなく、また器壁の雰囲気もやや異なる(光沢がない)ので別に図示した。外面には低く幅の狭い隆帯を横・山形に配し、細かい刻み目を入れる。突帯の間隔は丁寧にナデを施す。縄文時代前期の轟B式の資料である。9はゆるやかに外湾しながら開く口縁部片で、器壁外面にコゲ状の付着物がみられる。器壁調整は内・外面ともに横位の貝殻条痕で、文様こそないが8と雰囲気似る。やはり轟B式土器か。

弥生土器 (10) 10は甕の底部片である。内壁は遺存していないが、残存部の形状からみてかなり厚底の資料であろう。底面はわずかに上げ底状を呈する。器壁調整は外面がハケ目、底面はナデ。前期末～中期初頭の資料か。

#### ⑤その他の出土遺物

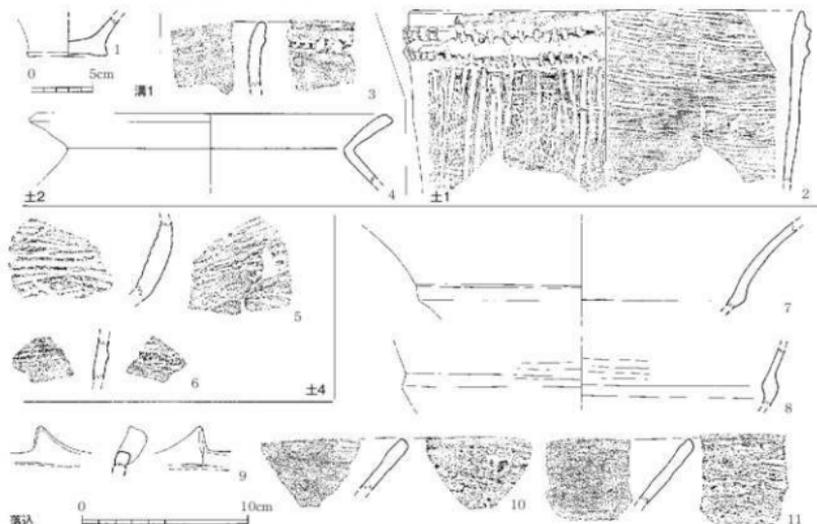
以下では、ピット内、またその他の遺跡内から出土した土器や、その他の種類の遺物について報告していく。

調査区からは、主に上層から多数のピットが検出された。その形状は多様で、柱穴状を呈するものもあればアメーバ状の不定形の掘り込みもある。特に柱穴状の遺構については、他の遺構と組み合わさって建物を構成する可能性があり慎重に検討したが、そのような例を指摘することはできなかった。

その他の遺跡内から出土した土器には、6層より上層の遺物包含層中から出土した土器や、表採資料などが含まれる。また、その他の種類の遺物として石器が出土しているが、量が少ないため遺構に伴うか否かにかかわらずまとめて報告し、出土位置を文中で個別に記述することとしたので注意されたい。

#### Pit出土土器 (第34図、図版14)

縄文土器 (2・4～6) 2は深鉢の胴部片か。小片で径は復元できず、傾きも自信がない。外面に3条の平行隆帯文を貼り付けて横ナデを施し、内面には条痕が残る。藁B式か。Pit9出土。4も深鉢で、口縁部下に1条の隆帯文を貼り付ける。小片で径は不明、傾きも自信がない。調整は内・外面ともに貝殻条痕で貼付隆帯付近のみナデ。藁B式か。Pit35出土。5も深鉢の口縁部片で径は復元できない。内・外面に貝殻条痕がよく残る。Pit35出土。6は深鉢の口縁部片である。外面に高さのあ



第33図 各遺構出土土器実測図 (1は1/4、他は1/3)

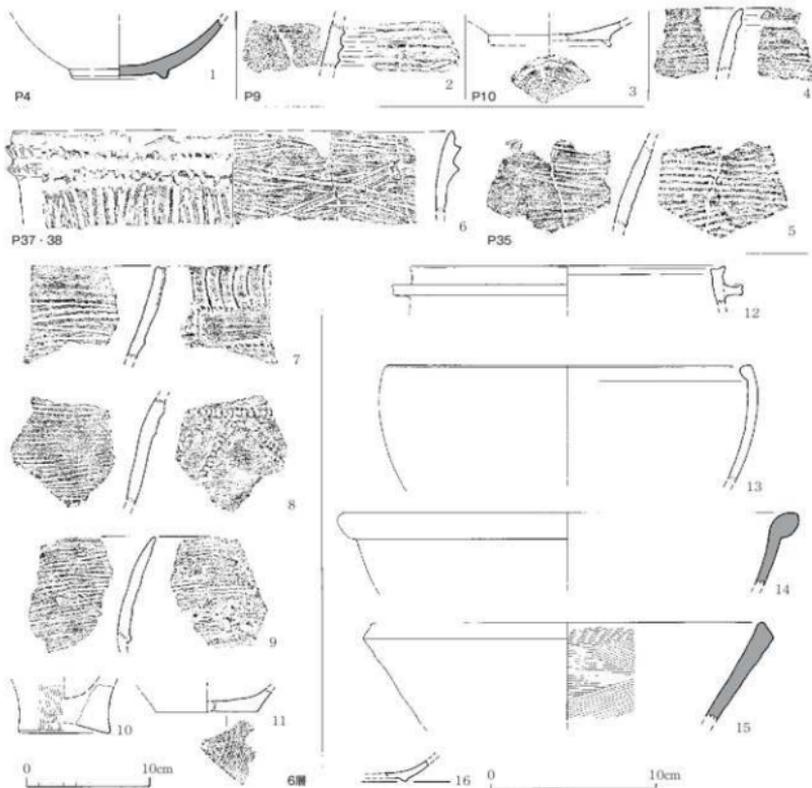
る三角隆帯を2条平行させ、深い刻目を施す。隆帯部下には縦位の深い貝殻条痕がよく残り、内面には横位の浅い貝殻条痕がみられる。調整や口縁部断面形状の特徴から、前期西ノ圃式に比定したい。Pit37・38 から出土した2つの破片が接合した。

土師質土器 (3) 3は皿または碗の底部片である。底部はゆるやかに湾曲する。やや細めの高台を付す。器壁調整は内・外面ともにナデで、高台内側の底外面に糸切り痕跡を残す。中世の資料か。Pit10 出土。

瓦質土器 (1) 1は碗の底～体部片である。碗部形状は半球形状を呈し、断面がややつぶれた三角形状の低い高台を付す。器壁調整は内・外面ともにナデ。中世の資料であろう。Pit4 出土。

その他の遺跡出土土器 (第34図、図版14)

縄文土器 (13) 13は浅鉢である。体部は半球状に立ち上がり、口縁部を玉縁状に肥厚させる。内・外面ともに丁寧にミガキを施し、光沢を出す。色調は黒褐色を呈し、縄文後・晩期黒色磨研土器の一種であろう。



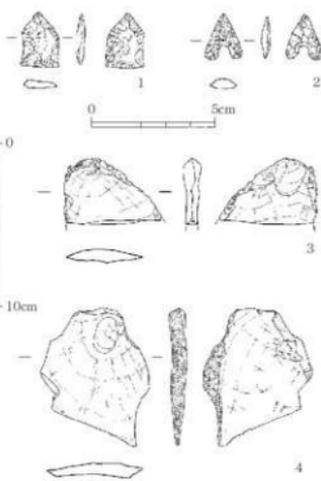
第34図 その他の遺跡出土土器実測図 (10・12は1/4、他は1/3)

弥生土器(12) 12は弥生中期須玖式の樽形土器であろう。口縁部は直立し、口縁部下に一条の鐮状突帯をめぐらせる。器壁調整は、内・外面ともにナデ。須玖I式期の資料か。

瓦質土器(14・15) 14・15は瓦質土器の鉢である。ともに口縁部の資料で、いずれも斜め上方に開きながら立ち上がる。14は口縁端部を玉縁状に肥厚させる。器壁はナデ調整で仕上げる。15は口縁端部をわずかに肥厚させ、斜めに仕上げる。内面にハケ目がよく残り、外面はナデ。いずれも中世の資料であろう。

#### 遺跡出土石器(第35図、図版14)

打製石器(1~4) 1は横長の剝片を素材とした五角形で平基の石鏃の完形品。各側辺にはやや粗い調整を施す。長さ2.25cm、幅1.6cm、厚さ0.3cm、重さ1.1gを測る。安山岩製で6層出土。2はハート形を呈す凹基無茎の完形品。姫島産の黒曜石製で、長さ1.75cm、幅1.5cm、厚さ0.4cm、重さ0.35gを測る。表土中の出土。3は安産岩製の削器。幅広の横長剝片の側縁の一部に刃部を作出する。長さ4.0cm、幅6.0cm、厚さ1.1cm、重さ24.5gを測る。6層の黄褐色土中からの出土。4は安山岩の剝片。端部に原面を残す。長さ8.5cm、幅5.6cm、厚さ1.1cm、重さ55.3gを測る。6層中からの出土。

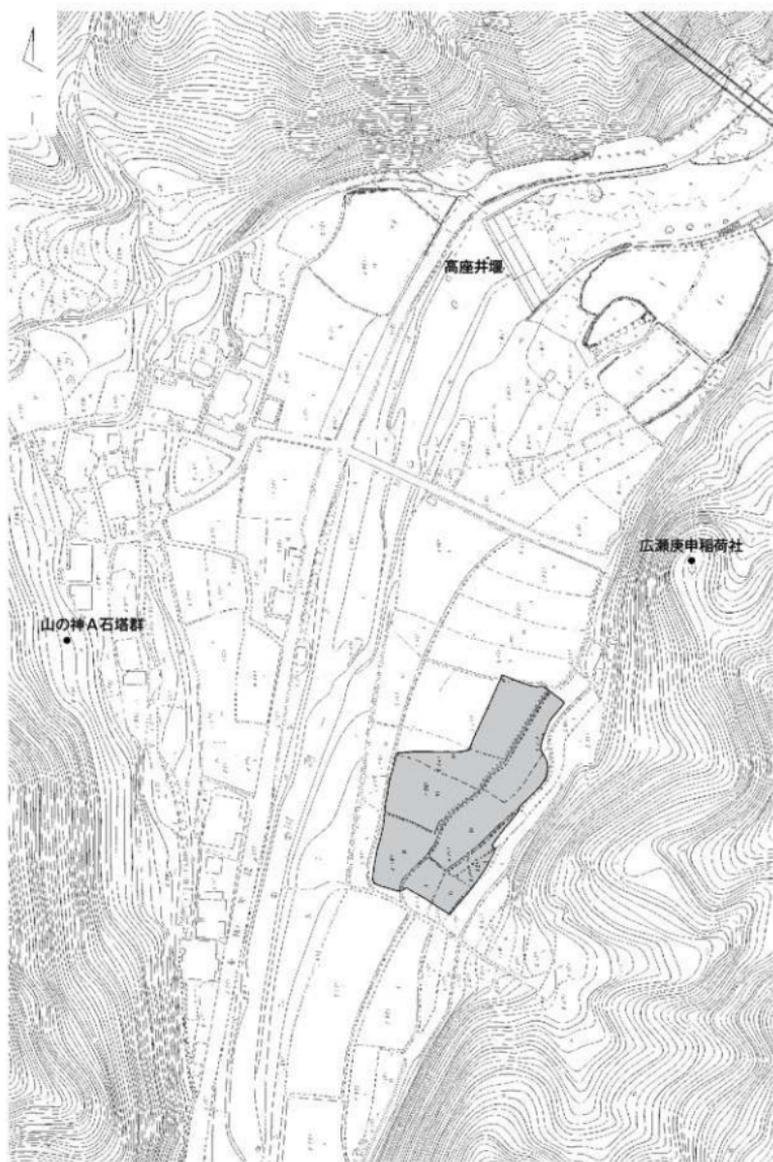


第35図 遺跡出土石器実測図  
(1・2は1/2、他は1/3)

## 4 小結

下伊良原フラノ遺跡からは、溝、4基の土坑や大きな落ち込み状遺構のほか、不定形の浅い掘り込みを多く含む多数のピット群などを検出した。しかし残念ながらこれらは遺物を伴うものに乏しく、その多くは所属時期を決定できなかった。したがって、遺跡の性格を推測するに足るような資料を入手できたとはいえない。

ただ、出土遺物の中で注目すべき資料がある。口縁部下に刻み目を持つ隆帯を廻らせる深鉢である。当初は縄文時代晩期の刻目突帯土器かとも考えたが、口縁部断面形状にやや違和感があり、また器壁調整が非常に深い(おそらく巻き貝を用いた)条痕であって晩期の土器にはあまりみられないものであることなどを考慮し、縄文時代前期の葬式併行期に南九州地域で主にみられる西ノ園式土器であるとの結論に達した。供伴関係こそ定かではないが、前期葬B式土器とみられる小片も遺跡から出土している。西ノ園式土器は福岡県下ではあまり見ることのない資料であり、この資料がどのような経緯で本遺跡に包蔵されるにいったかは大変興味深いところである。西ノ園式や葬B式を含め、伊良原地区では縄文時代早~前期の資料が、出土状況はそれほどよくないながらも多く見つかっており、それらを含めた本地域における縄文時代資料の評価を考えていく必要がある。今後の研究の進展に期待したい。



第 36 図 下伊良原東向川原遺跡周辺地形図 (1/2,000)



圖 37 圖 下伊豆原集約川原遺跡群遺址配置圖 (1:200)

## V 下伊良原東向川原遺跡の調査報告

### 1 遺跡の概要

**遺跡の立地** 下伊良原東向川原（ひがしむかいかわら）遺跡は、祓川の中流域右岸に形成された幅の狭い中位河岸段丘上に立地する。調査地の周辺では祓川に沿って南北方向に狭い谷平野が形成されており、調査地の東側には山地が迫り、祓川を挟んだ対岸には広瀬集落がひろがる。調査地付近では山麓の傾斜地を南北に細長い棚田状に造成しており、低位段丘面との比高差は1m以上に達する。この低位段丘面には試掘調査の結果祓川の氾濫原がひろがっていることが明らかとなっている。一方、遺跡の東側は丘陵の裾部が間近に迫り、急斜面となっていて、北東裾部からは湧き水がしみ出している。なお、この東側丘陵の頂部には、広瀬地区の拝み所でもある庚申塚稲荷社が造成予定地内にまつられていた。ダムの堰堤はこの北側で祓川の東西から迫る丘陵を堰き止めて築かれることになっている。

**調査地の概要** 調査地の地番はみやこ町犀川下伊良原 737、738、742～746、旧状は水田で、調査面積は約 3,900㎡であった。調査地の地形は、南東端が一段高く旧地表で 156.7m をはかる一方、北西部は低く 153.2m ほどで、おおよそ 3.5m 傾斜していることとなるが、棚田の造成により数段の平坦面が連続する地形となっていた。この造成は遺構面にも影響を及ぼしており、多くの遺構が削平を受けているものとみられる。

**調査の概要** 遺構の密度は希薄で、東側の丘陵裾部付近から、ドングリ貯蔵穴 8 基、溝 2 条が検出されたほか、中世の遺構として杭列・畑の畝状遺構・土坑・柱穴群などが検出された。また、上層遺構面から縄文土器の出土をみたので、全面に調査グリッドを設定して、特に遺物の出土量の多かった 3 箇所を掘り下げた結果、縄文時代前期・早期・弥生時代中期の遺構・遺物が出土した。

### 2 調査の経過

**調査の着手まで** 祓川右岸を南北に走る工事用仮設道路の敷設については、平成 21 年度頃より文化財保護課と伊良原ダム建設事務所の間で議題として上がってきていた。ダム建設事務所側の示した計画地はおもに祓川右岸の中位段丘上にあたり、従来より遺跡の包蔵する可能性が指摘される場所であったことから、文化財部局としては早めの調整を要請していたが、用地の買収の進捗が思わしくなく、なかなか調査の着手にいたることができなかった。

平成 22（2010）年 4 月、両者の定例協議の席上にて、広瀬地区の工事用道路予定地について買収が終了したため試掘調査を行ってほしいとの依頼があり、これをうけて文化財保護課調査第一係が同年 7 月 5～9 日に計画地一帯の試掘調査を実施した。その結果、中位段丘上の広い範囲に埋蔵文化財が包蔵されていることが明らかとなり、埋蔵文化財の調査を行うこととなった。しかし、文化財保護課では同時に東九州自動車道の建設にかかる発掘調査を行っていて人員を割く余地がなく、ダム建設事務所との協議の結果、翌平成 23（2011）年秋頃より調査に着手することで合意した。なお、一部の表土剥ぎを先行して平成 22 年度末に実施することとし、平成 23（2011）年 1 月 25 日に重機を搬入し、3 月 8 日までの間にこれを行っている。

**調査の経過** 平成23(2011)年11月より九州歴史資料館文化財調査室が主担当となり、重機による表土剥ぎ(前年度の残り分)より作業を開始する。12月6日に休憩所の設置、駐車場整備など環境整備を行い、人力を用いた調査は12月12日から開始した。12月15日、北東端の山麓部に近接する地区で、ドングリの貯蔵穴群8基を検出する。特に、1号貯蔵穴は遺存度が良く、ドングリと木の葉の腐植土が互層をなしていた。

1月25日より、下層にあたる縄文時代包含層の調査に入る。2月21日にダム事務所と平成24年度調査地点の協議を行い、3月21日に同年度の調査を終了する。

翌平成24年度も引き続き下伊良原東向川原遺跡の発掘調査を行う。4月24日に休憩所を搬入して現場を再開し、下層縄文時代文化層のF・H-10・11グリッド付近の調査を継続する。5月1日、G-10グリッドで土坑2基を検出する。包含層では、押型土器包含層の下層から薄手の条痕文土器が出土した。5月16日に、K-5区8層より押型土器がまとまって出土する土坑1基を検出する。5月18日には、文化財安全月間の一環として安全パトロールが実施され、教育長等の視察があった。5月22日に発掘調査を終了し、休憩所などの搬出を行う。その後、重機を用いた埋め戻し作業を行い、東伊良原東向川原遺跡の調査を終了する。

### 3 調査の成果

#### (1) 基本土層

調査区南端のほぼ中央部で、基本土層図を作成した(第38図、図版17)。上から順に見ていく。

1層は表土で、上半は削平されている。2層は暗灰色土、3層は暗茶褐色砂質土。4層は黄褐色土で、東側は赤褐色の色調となる。上面が主に中近世の遺構確認面となり、伊良原地区の鍵層でもある。5層は淡灰褐色砂層で層厚50cm以上に達する。縄文時代早期の15号土坑はこの層の上面から掘り込まれる。6層は黄灰色シルト層、7層は灰褐色土で5cm大の小礫が多い。8層は標高153.8mをはかり、暗灰褐色の河原礫層となる。



第38図 下伊良原東向川原遺跡基本土層図(1/40)

#### (2) 上層の遺構と遺物

##### ①貯蔵穴(第40図、図版18)

調査区北半の東側端部付近にあたる丘陵裾部にまとまって、内部にドングリを多量に包含する貯蔵穴群が検出された。検出面は4a層の黄褐色土ではなく、この部分のみにあらわれる青灰色粘質土を地山とする。なお、すぐ西側には4a層の黄褐色土がひろがっており、おそらく削平により付近のみ失われてしまったものであろう。

貯蔵穴は、丘陵裾部から北方へ傾斜する緩斜面の18mほど続く浅い凹部からその東側にかけて、8基がまとまって分布する。3・6号貯蔵穴の間には短い2条の溝(1・2号溝)が並ぶ。

貯蔵穴の分布するこの凹部は、周囲より20cm前後深くなっていて、中央が狭く幅4.5m、北側で

幅 8m、南側で 8m とひろがり、北側にかけて 154m ~ 153.25m の等高線がめぐる。当所には、絶えず山麓裾部から水が浸み出しており、貯蔵穴が付近に占地した要因はこのあたりに求められるものとみられる。貯蔵穴からの土器の出土は皆無で、土器資料を根拠とした時期の特定はできないが、3号貯蔵穴からカシ材の鋭く尖った杭状の木製品があったこと、また、凹部からは中世の糸切り底をもつ土師質小皿の小片や青磁小片が出土したことなどから、調査時には中～近世の所産と考えた。なお、出土したドングリのサンプル分析と年代測定を行っているので参照されたい(後述)。



第39図 下伊良原東向川原遺跡上層  
主要遺構配置図(1/1,000)

### 1号貯蔵穴(第41図、図版18)

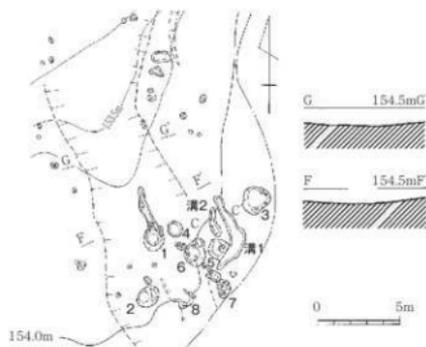
直径1.2mとほぼ円形プランで、北側に長さ2.5m、30～45cm、深さ5cmほどの溝が伸びており、検出面での切り合い関係が認められなかったため一体の遺構であり排水溝ではないかと考えた。貯蔵穴は断面が溜り鉢状の形状をなし、深さ35cmほどである。内部には多量のドングリが数層に分かれて堆積している。ドングリの遺存状態は良好で、最上部の1層はドングリの単純層で層厚5cm、次いで2層は木の葉や細かな木片(カシ・桜)と多くのドングリを含む黒茶色の腐食土が10cm、次に3層は青灰色砂質土の間層、そして再びドングリ単純層が5cmの厚さで堆積する。最下層の5層は青灰色砂質土となり、ドングリ、木の葉、木片等を全く含まない。のこり具合の良いドングリを一升枙で計測したところ、3升以上の量があった。ほかに出土遺物はない。

### 2号貯蔵穴(第41図、図版19)

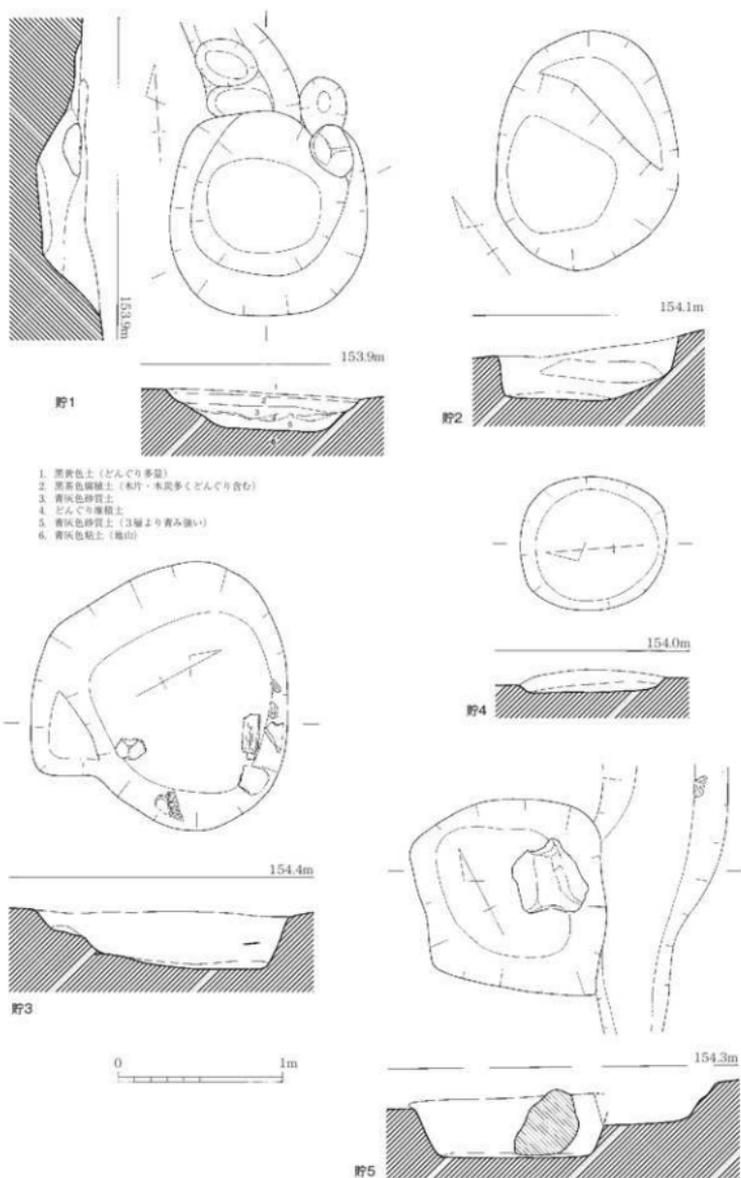
1号貯蔵穴の1m南に位置し、平面形状は円形プランを呈する。規模は長辺1.45m、短辺1.1m、をはかり、東側にテラス面を有する。遺存深さは35cmを測る。灰褐色土の下にカシを主とする木材片とドングリが出土した。ほかに出土遺物はない。

### 3号貯蔵穴(第41図、図版19)

北東端にある、付近で最大の規模を持つ貯蔵穴である。直径が1.6mのほぼ円形プランで、南側に小さなテラスを持ち、底面はやや



第40図 貯蔵穴群配置図(1/300)



第41図 1～5号貯蔵穴実測図 (1/30)

北側に傾斜する。遺存深さは35cmを測る。上部には木片や多くのドングリが詰まり、中位からカシの板材や杭状に先端を尖らせた材が出土した。ドングリは1号貯蔵穴と同様に3升以上出土した。ほかに出土遺物はない。

#### 4号貯蔵穴（第41図）

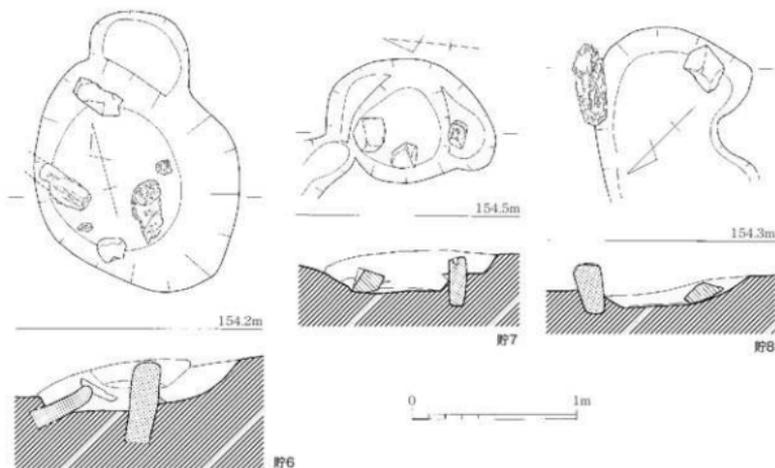
5cmほどの深さしか遺存しておらず、基底部分のみが残ると考えられる貯蔵穴である。平面形状は円形プランで直径80cmほどをはかり、ほかと比べてやや小型であるが、削平されており本来の規模はもう少し大きかったものとみたい。床面にドングリが貼り付いて出土した。ほかに出土遺物はない。

#### 5号貯蔵穴（第41図、図版20）

1号溝に切られる遺構である。平面プランはほかに例を見ない略方形で、規模は一辺が約1.1mをはかる。深さは40cmほどで、カシを主とした木の根が上層に多く、最下層では青灰色砂質土に混ざりドングリが比較的多く出土したことから、やはり他例と同様にドングリ貯蔵穴と判断した。ほかに出土遺物はない。

#### 6号貯蔵穴（第42図、図版20）

貯蔵穴群の中央部に位置する。1.5×1.2mの長円形プランを呈し、床面は西側に傾斜する。床には表皮を残す2本のカシ材が、東側は直に、西側は壁に向かって斜めに立ち、両者とも切断面を丸く加工した痕跡が顕著に見られる。樹木片も多く、少量のドングリが下層から出土した。ほかに出土遺物はない。



第42図 6～8号貯蔵穴実測図（1/30）

### 7号貯蔵穴（第42図、図版20）

直径が80cmと小型で、深みのない貯蔵穴である。かなり削平されている可能性もある。東側テラスには長さ30cm、径10cmのカシ材が直立する。カシ材は、下部が切断され、上部には5cmほどの深さの穴を穿つもので、その性格は不明である。ドングリは若干量が出土した。ほかに出土遺物はない。

### 8号貯蔵穴（第42図、図版20）

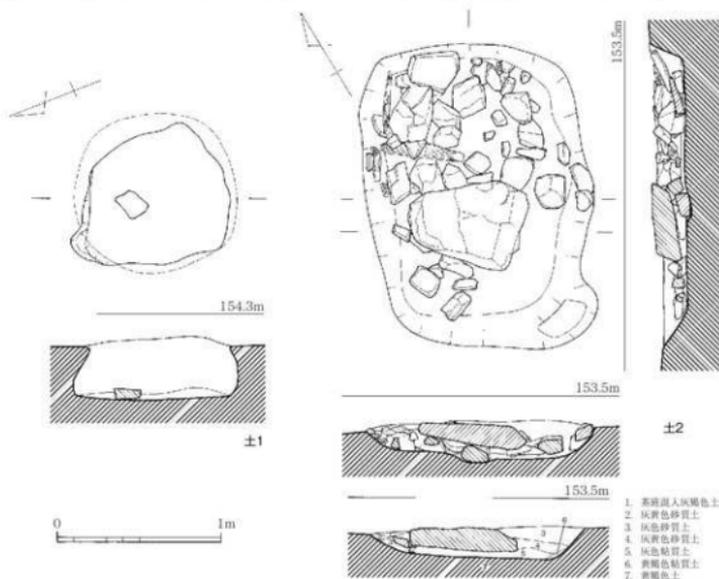
西側が削平され、わずかに基底部のみを残す遺構である。遺構外の東側に7号と同様の切断されたカシ材が立つが、遺構は削平により本来より小さくなっており、本来このカシ材は貯蔵穴中にあったものとみたい。ほかに出土遺物はない。

### ②土坑

上層遺構面からは、計2基の土坑を検出した。いずれも調査区の中央やや南寄りの上位平坦面上にあり、本来の形状より大きく削平されている可能性が高い。検出された遺構面から、ともに中世以降の遺構と考えられる。

### 1号土坑（第43図、図版21）

1号落ち込み状遺構の下層で検出された、ほぼ円形プランの土坑である。袋状に掘り込まれており、底面は上面径より広い。検出面の直径は85cmであり、底面の直径は1mを測る。深さは35cmで、



第43図 1・2号土坑実測図 (1/30)

中世の埋土である黒褐色土が充填されていた。中世の土師器が若干出土しており、中世の遺構であろう。出土土器は小片で図示できない。

## 2号土坑 (第43図、図版21)

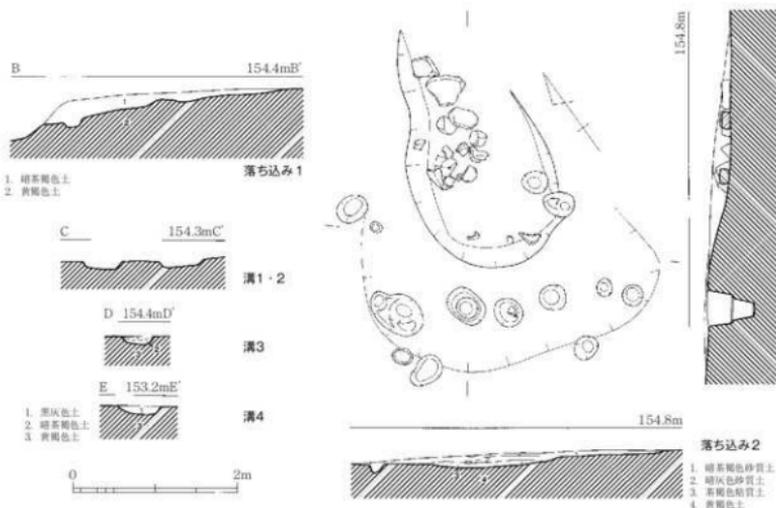
2号落ち込みの北で検出した。長方形の土坑で、中央南側に長さ70cm、幅50cm、厚さ15cmの板状の大石を配し、東半を大量の角礫、板石で充填している。中には一部加熱されている石材もある。中央の板石の下には、それを支える石材を据える。土坑の規模は長辺1.85m、短辺1.3mをはかり、深さは20cmほどである。北西端から両端を尖らせた杭状の木材が出土した。埋土の最上部に見られる灰褐色の土や灰色の砂質土は、中世の埋土とは明らかに異質であり、近世の所産と考えたいが、積極的な根拠はない。

## ③落ち込み状遺構

調査区の南側で2基の不整形の落ち込みを検出した。いずれも削平により全形が失われるなど遺存状況は悪く、その性格も定かではない。なお、1号落ち込み状遺構については規模が大きいため個別図面は土層図のみの掲載とする。全形は第37図を参照されたい。

## 1号落ち込み状遺構 (第44図、図版22)

調査区の南側で、後述する2号落ち込み状遺構と東西に並ぶ形で検出された。東側は弧状にひろがるが西側は水田境の段落ちで削平されており、全形は不明である。規模は南北10m、東西28mをはかり、深さは10～30cmほどと浅い遺構である。埋土は暗茶褐色土を主体とする。落ち込み内にはピットのほか1号土坑があり、本遺構が1号土坑を破壊するものとして報告する。埋土より土



第44図 1・2号落ち込み状遺構、1～4号溝実測図 (1/60)

師質土器の坏、小皿等が出土しており、中世の遺構と考えられる。

#### 出土土器（第45図）

**土師質土器（1～6）** 1～5は土師質土器の坏である。底部は平坦で外面に糸切り痕跡を残し、体部はわずかに内湾しながら斜め上方に立ち上がる。2は口縁端部を短く内側に折り曲げる。底部外面以外の器壁調整はすべてナデ。6は土師質土器の小皿である。底部は平坦で外面に糸切り痕跡を残し、口縁部はごく短く斜めに伸びる。いずれも中世の資料である。

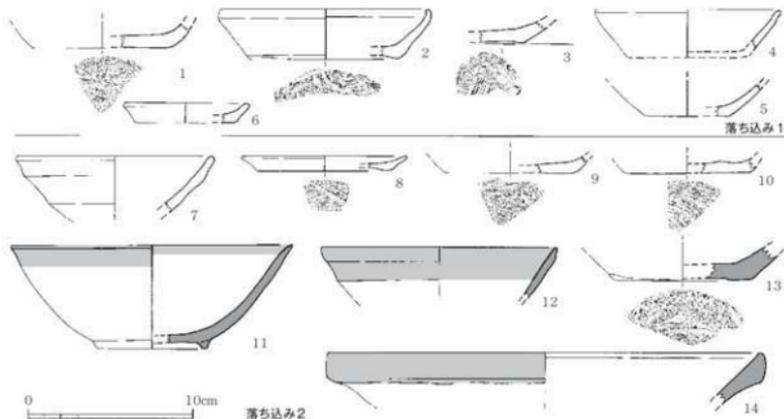
#### 2号落ち込み状遺構（第44図、図版22）

直径3.5mの円弧状を呈する、不整形の浅い落ち込み状の遺構である。遺構の中央北側に、長さ3.1m、幅1.8mのやや深みのある長円形の段落ちが取りつく。南側では6本のビットが一列に並び、特に断面図に示したビットは60cmと深い。埋土は3枚あり、上から暗茶褐色土、暗灰色砂質土、茶褐色粘質土である。土師器小皿、青磁片等が出土しており、中世の遺構と考えられる。

#### 出土土器（第45図）

**土師質土器（7～10）** 7は土師質土器の碗であろうか。小片のため径の復元に自信がない。口縁～体部が遺存しており、わずかに内湾しながら斜め上方にひろがる。8～10は土師質の小皿であろう。底部外面は糸切りで、8にはその後板圧痕が付着する。10は2度の糸切り動作が見て取れる。  
**瓦質土器（11～14）** 11・12は瓦質土器の碗である。いずれも半球形の体部を持つもので、11の口縁端部がわずかに外反するのに対し12はそのまま伸びる。11には高台部が遺存しており、断面が低い三角形の高台がめぐるのが認められる。13は鉢の底部片であろうか。底部外面には糸切り痕跡が認められ、坏の可能性もあるが器壁が厚く違和感がある。内面はナデ仕上げ。12は鉢の口縁部片である。口縁端部は肥厚し、内面を上方に引き上げる。小片のためやや不安があるが径を26.4cmに復元した。

以上の資料はいずれも中世のものであろう。



第45図 1・2号落ち込み状遺構出土土器実測図（1/3）

#### ④溝

上層遺構面の各所で溝状の掘り込みが確認された。その多くはきわめて浅く、遺構として報告するほどのものでもない。ここでは、明瞭な溝状遺構と認識出来た4条の遺構について報告する。なお、うち1・2号の2条の溝はドングリ貯蔵穴群の分布範囲内にあり、これらと関わりのある遺構である可能性が高い。

##### 1号溝（第44図、図版20）

ドングリ貯蔵穴群の分布する中にあって、これに付随する可能性がある溝である。5号貯蔵穴と切り合い関係にあり、これを破壊している。2号溝の東に並行する。「く」字状に屈曲する。残存長さ4.5m、幅30～90cmをはかり、残存深さは10cmときわめて浅い。断面形状はU字状を呈す。出土遺物はなく時期は不明。

##### 2号溝（第44図、図版20）

1号溝と同じくドングリ貯蔵穴群の分布範囲にある溝状遺構である。長さは1.8mと短い。幅は30cmで、深さは10cmと浅い。5号貯蔵穴の北側に隣接して伸びることから、1号貯蔵穴の排水溝と同様に5号貯蔵穴用の排水施設であった可能性も考えられるが、接点はおそらく削平により失われている。出土遺物はない。

##### 3号溝（第44図）

調査区の南半部で検出した。1・2号落ち込み状遺構の間にある弧状の溝である。検出長さは3.5mを測る。埋土は黒灰色土で中世の所産と考えられるが、出土遺物はない。

##### 4号溝（第44図）

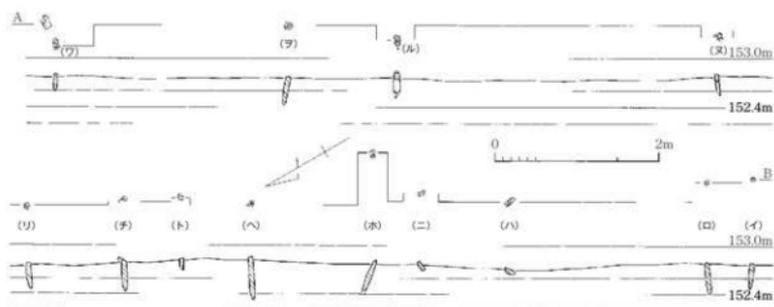
調査区の中央西端部で検出された溝状遺構である。検出長さは8mほどで直線的に北東の調査区外へと伸びる。深さは50cmほどをはかる。埋土は中世の遺構に共通する黒灰色土で、中世の所産と考えられる。出土遺物はない。

#### ⑤杭列（第46図、図版21）

調査区の北東側で、山麓からの傾斜が緩やかになった地山等高線152.75mに沿って、若干の出入りはあるが北東から南西に直線的に伸びる杭列である。長さ19mにわたり、13本の杭が打たれている。杭材はタケ2本（ト・ヌ）、スギ6本（イ・ロ・ニ・チ・リ）、カシ2本（ハ・ホ）、ヒノキ3本（ル・ヲ・ワ）である。タケを除く各材とも樹皮を残す丸太材で、径は6cm前後である。全ての杭は先端を鋭く尖らせ、長さ60cm程度を測る。杭の周囲に掘り込みは確認されず、打ち込まれたものであろう。近世の所産と思われるが確証はない。なお、杭は持ち帰らず現地に埋め戻した。

#### ⑥畝状遺構（第37図）

調査区の南側、1・2号落ち込み状遺構の間で検出された、並行する5条の細い溝群からなる遺構である。溝群の長さは3～8mをはかり、溝幅はおおよそ30～50cmで、深さは5cmに達さずきわ



第46図 杭列実測図 (1/60)

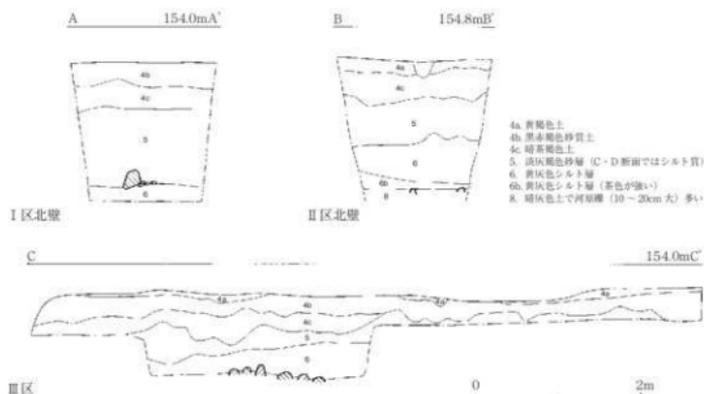
めて浅い。溝間は40～50cmと安定しており、畑地の畝遺構と考えられる。埋土は中世の黒褐色土ではないことから、近世の所産と考えたい。出土遺物はない。

### (3) 下層の遺構と遺物

#### ①調査区割と検出遺構、土層

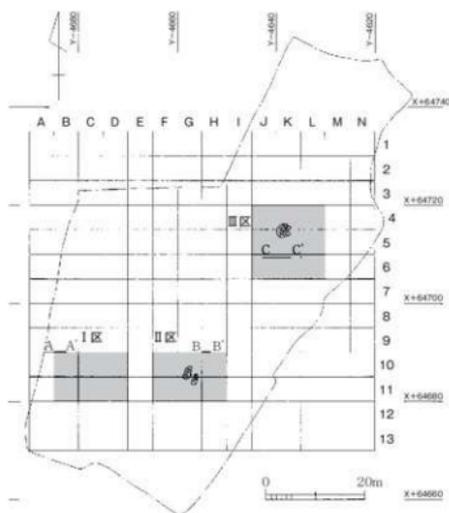
**調査区の設定** 中世の遺構検出層である4層黄褐色土中から、縄文土器が検出されたため、遺物が出土した地点を中心として、3箇所の調査グリッドを設定して包含層と下層の調査を行った。まず、調査区のほぼ全域に5m方眼のグリッドを設定し、遺物包含層の掘削を行った。調査した範囲は、グリッド番号でA～D・10グリッド・A～C・11グリッド(I区)、F・G・H・10・11グリッド(II区)、I・7、J・6～8、K・4～9、L・5～7グリッド(III区)である(第47図)。

**検出遺構** 中世の検出面を構成する4層黄褐色土を除去したところ、その下層から遺構を検出した。検出した遺構はいずれも土坑で、G・10・11グリッド(II区)で2基、K・5グリッド(III区)で1基を検出している。検出面は13・14号の2基が4c層上面、15号が5c層の下面にあたる(第47図)。



第47図 下層遺物包含層調査グリッド土層図 (1/60)

土層 第47図に、下層調査区であるⅠ～Ⅲ区の基本土層図を示した。B-B'がⅠ区北壁の部分土層、B'-B'がⅡ区北壁の部分土層、C-C'がⅢ区北寄りの北面土層である。上層から順にみていく。なお、4層の黄褐色土以下を細分しているのので、調査区全体の基本土層図(第38図)とは異なる点がみられる。了解されたい。中世の検出面を上面に持つ4層をa～cの3層に分層した。最上層が黄褐色粘砂質層でこれを4a層とした。次に黒赤褐色土である4b層が20～30cmの厚さで、さらに暗茶褐色土である4c層が20～40cmほどの厚さで堆積する。その下層には5層の淡灰褐色砂層が分厚く堆積する。6層の黄灰色シルト層の次は、基本土層に示した7層を欠き、8層の河原礫層となる。4a～5層が、遺物包含層である。



第48図 下層遺構配置図・包含層調査グリッド位置図(1/1,000)

## ②下層遺物包含層の調査概要

### 遺物の平面・垂直分布

第49図に、Ⅰ区の遺構・遺物の平面・垂直分布図を示す。遺構はC-10グリッドに5層を掘り込む小さな柱穴がある以外にはない。遺物は、C-11グリッドで4b層中から弥生土器が出土したが、遺物量は少なく、5層以下では土器の出土を見ない。

第50図に、Ⅱ区の遺構・遺物の平面・垂直分布図を示す。遺構は、G-10・11グリッドの4c層上面より13・14号土坑を検出した。遺物は、4～5層で比較的多くの縄文土器・石器が出土している。H-10グリッド4c層からは山形押型土器が、H-11グリッドの5層からは薄手の条痕土器がそれぞれ出土しており注目される。

第51図に、Ⅲ区中心部の遺構・遺物の平面・垂直分布図を示す。遺構は、K-4・5グリッドにおいて5層の下部を掘り込む15号土坑を検出した。遺物は、K-5グリッドにおいて15号土坑の検出面より上層にあたる4b層中に早期後半の塞ノ神B式土器のまとまりが見られるが、その周辺の遺物量はほとんどないに等しい。

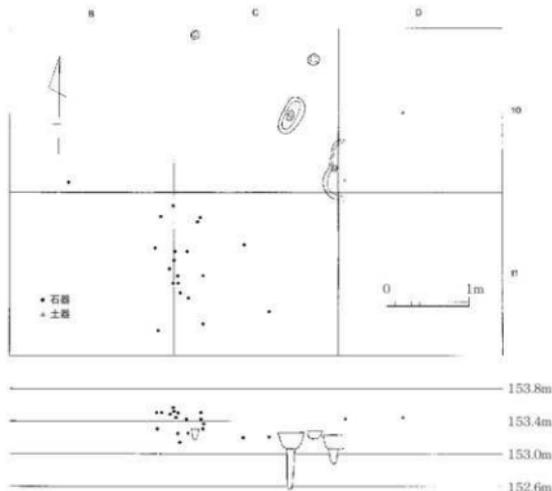
## ③下層遺物包含層の出土遺物

上層(中～近世)の遺構掘り込み基盤層である4-a～c・5層中からは、縄文土器と弥生土器が出土した。最上層にあたる4a層中からは遺物の出土を見なかったが、4b層中からは弥生土器1点と縄文時代早期塞ノ神式土器、また4c層中からは縄文早期押型土器、最下層にあたる5層中からは薄手の条痕土器が出土した。これらは遺構に伴うものではなく、また小片がほとんどであり、弥生土器と縄文土器が同一層序から出土するなどの状況から、基本的に上部からの流れ込みと考え

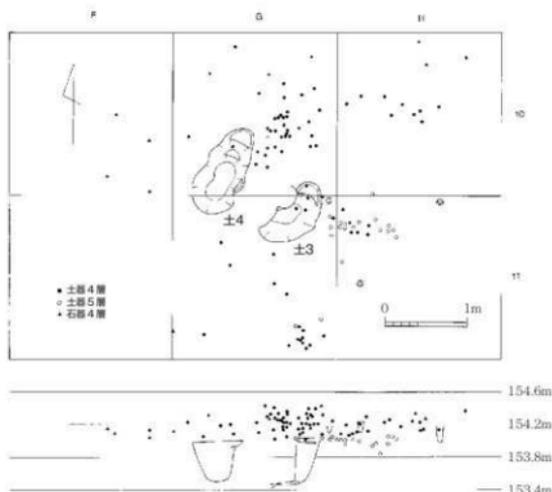
られるが、一応層位的に古相から新相へと移行するようである。以下、これらの資料について説明していく。

#### 4b 層出土土器 (第 52・53 図、図版 27)

**縄文土器 (1～19)** 1 は深鉢の底～胴部片である。底部は丸底で、体部はやや内湾しながら上方



第 49 図 I 区遺物分布図 (1/60)



第 50 図 II 区遺物分布図 (1/60)

に伸びて、繭状を呈する。器壁は分厚く、内・外面ともに無文でナデ調整痕跡が見られ、特に外面にはナデ工具の端部により形成されたと見られる斜め方向の条痕が認められる。

I 区出土。2～19 は、外面に工具を用いた 2 条単位の沈線と、二枚貝の端部を用いた刺突文を、水平方向にめぐらせる文様構成を持つ資料群で、塞ノ神 B 式土器に該当する資料である。2～6 は口縁部が遺存するもので、口唇部には刺突文を連続させて凹凸を付ける。8・9 は胴部上位の屈曲部が遺存する資料、他は頭部あるいは胴部の資料である。いずれも小片で、図に示した傾きにはそれほど積極的な根拠があるわけではない。2～11 には二条の並行沈線と貝殻を用いた刺突文が繰り返し施されるが、12～19 は 2 本以上の平行沈線を間隔を開けて施し、刺突文が見られない。おそらく胴部下半の資料であろう。なお、器壁の内面調整はすべてナデである。これらの資料は胎土の質や色調がよく似ており、本来 1～数個体分の土器であった可能性があるが、接合しなかったためやむ

を得ず別個の個体として提示しているの、その点に留意されたい。

弥生土器 (20) 20は弥生土器の甕の底部片である。底部はやや厚く、わずかに上げ底状を呈し、中期須玖I式期の資料であろう。

#### 4c層出土土器 (第53図、図版27)

縄文土器 (21~29) 21~25は器壁内・外面に押型文が認められる資料である。21は口縁部下内・外面に斜め方向に列点状の押型文を施すほか、口唇部にも間隔を開けて同じ施文具で列点文を施す資料である。22にも外面に列点状の押型文とみられる痕跡があるが、器壁剥離などにより明瞭に観察できない。23は外面に列点文と短斜線文を組み合わせた文様らしきものが認められる。24・25は山形文を施すもので、24は外面と内面上位に、25は外面のみに認められる。以上の資料はいずれも、押型文が認められない部位はすべてナデ調整で仕上げる。26・28は内・外面をナデ調整で仕上げるものである。27は器壁内・外面の両方に条痕調整を施すもので、やや不安が残るが口径を復元でき、16.8cm、縄文時代早期の資料であろう。これらの資料はすべてⅡ区から出土した。

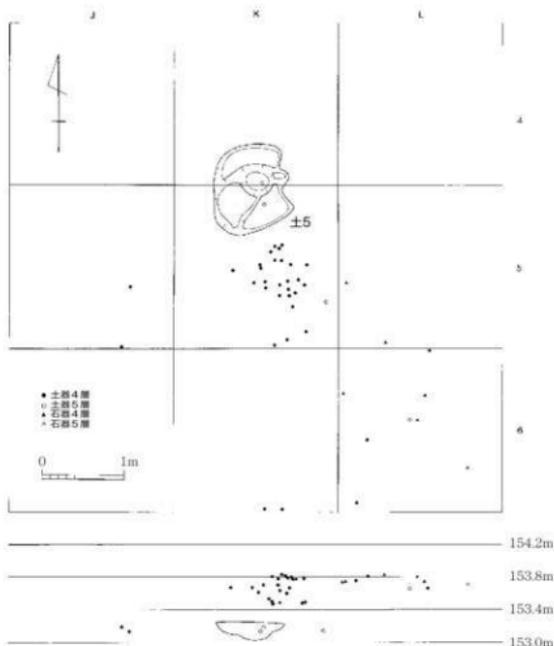
#### 5層出土土器 (第53図、図版27)

縄文土器 (30・31) 30・31は器壁の内・外面に条痕調整を施すものである。うち31は口縁部が残っていて径を復元でき、23.8cmをはかる。いずれも縄文時代早期の資料であろう。

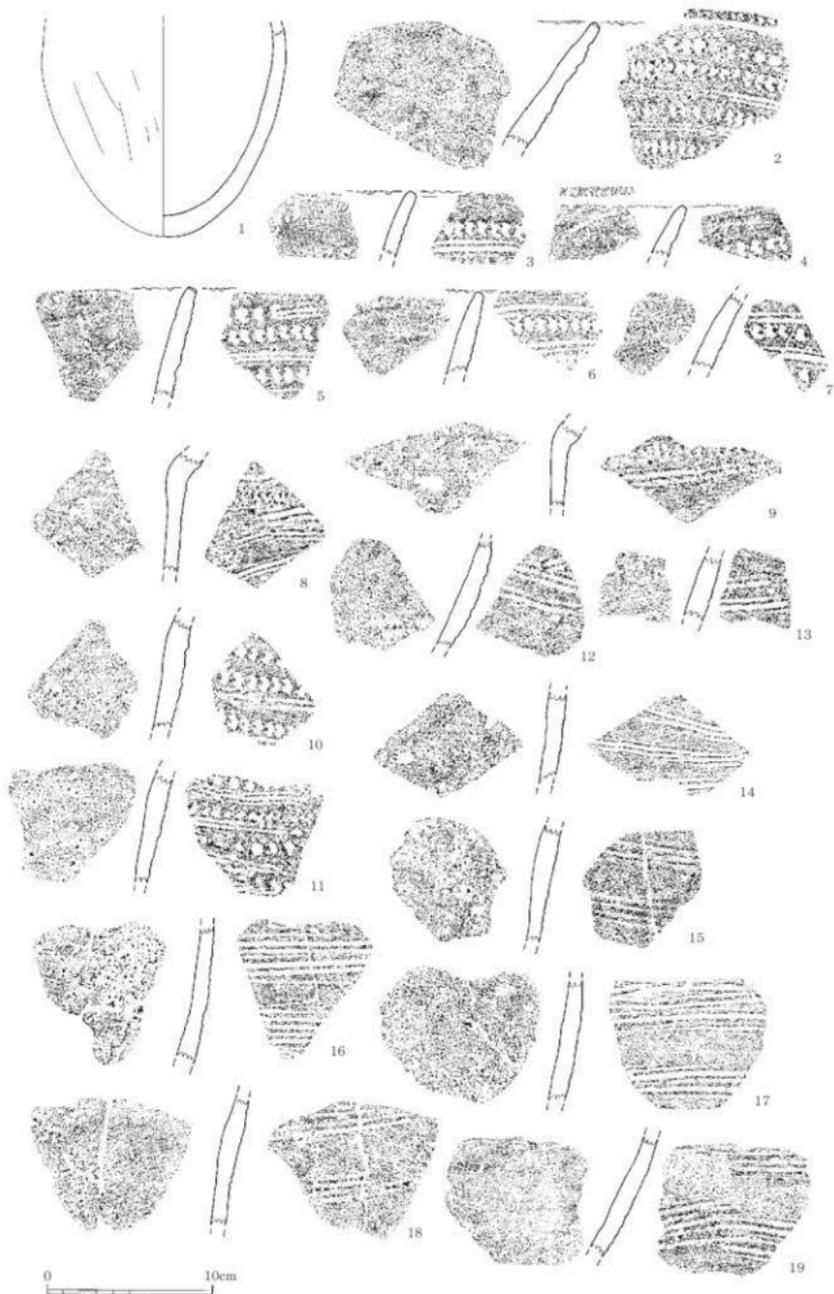
#### ④土坑

##### 3号土坑 (第54図、図版24)

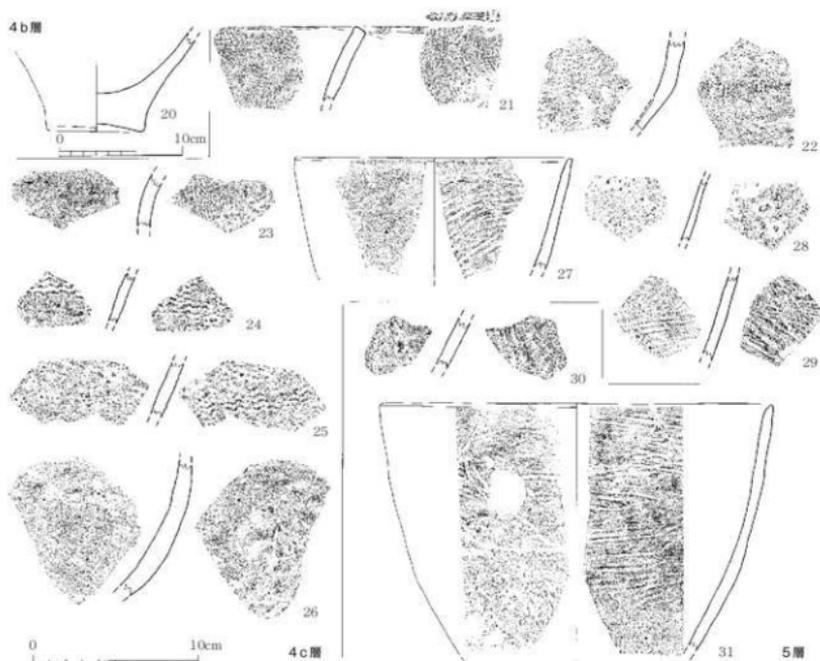
Ⅱ区G-11グリッドで検出された、4c層を掘り込んだ長さ2.2m、幅40cmほどの不整長円形の土坑である。北西側は攪乱を受けて壁が失われている。北側にテラスを有し、やや急傾斜で50cmほど掘り込まれて床面に達する。上層から無文土器の胴部片が若干出土したがいずれも小片で図示に耐えない。器壁調整は内・外面ともにナデで、早期押型文土器に伴う資料であろうか。これらから、一応縄文時代早期に位置づけておきたい。



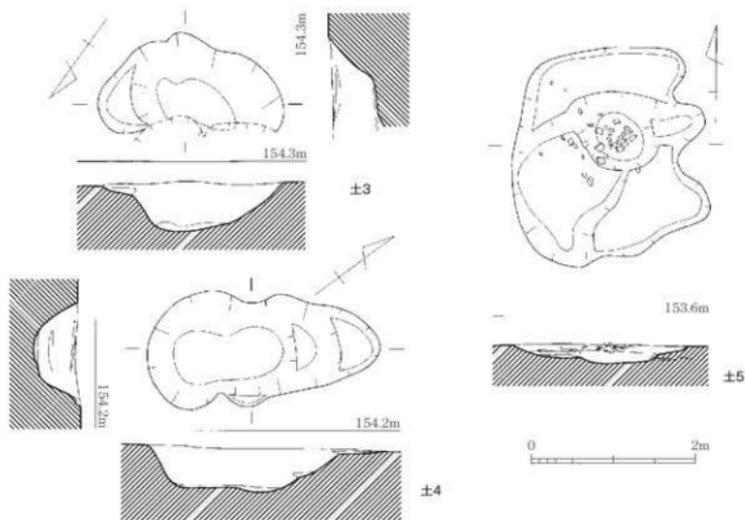
第51図 Ⅲ区遺物分布図 (1/60)



第52図 下層遺物包含層出土土器実測図その① (1/3)



第53図 下層遺物包含層出土土器実測図その② (20は1/4、他は1/3)



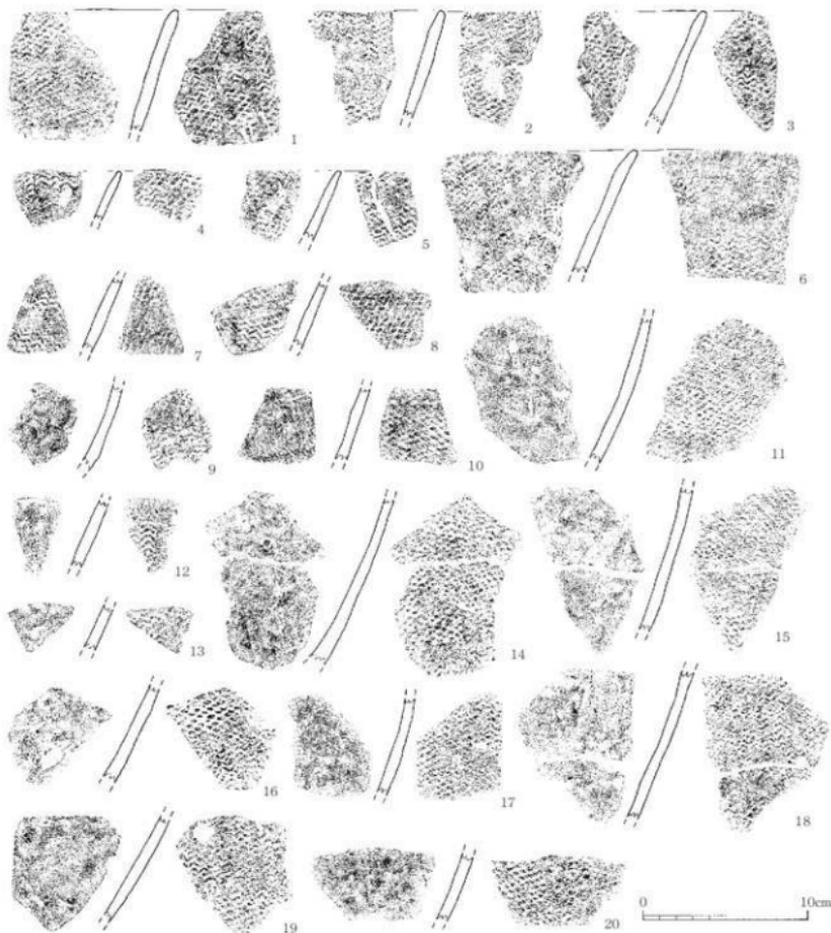
第54図 3～5号土坑実測図 (1/60)

#### 4号土坑 (第54図、図版24)

Ⅱ区G-10・11グリッドで検出された、4c層を掘り込んだ長円形土坑で、形態は13号土坑に類似する。規模は長さ2.85m、最大幅1.4m、深さ50cmをはかり、北東側に2段のテラスを持ち、緩やかに傾斜して床面に移行する。出土遺物には13号土坑出土資料と同様の無文の縄文土器片があるが小片で図示に耐えない。やはり縄文時代早期に位置づけておきたい。

#### 5号土坑 (第54図、図版26)

Ⅲ区K-4・5グリッドにおいて、5層下部から掘り込まれた不整隅丸方形の土坑である。規模



第55図 5号土坑出土土器実測図 (1/3)

は東西 2.35m、南北 2.6m を測り、中央部に 1m ほどの円形の掘り込みを持つ。深さは 25cm と浅い。埋土は黒褐色粘質土で、中央部の掘り込み部上層から山形文を施文する押型文土器が出土した。出土土器から、縄文時代早期の遺構と判断できる。

#### 出土遺物 (第 55 図、図版 27)

**縄文土器** (1～20) いずれも、外面全体に山形の押型文を施す土器群である。1～6 は口縁部が遺存する。すべて小片で、径が復元できるものではなく、傾きも自信を持って提示できるものはない。口縁部形状は直線的に伸びて端部がわずかに外湾し、端部をやや尖らせて取める。内面にもすべて山形の押型文が施されている。一方、7～20 は口縁部が遺存しない資料である。外面が山形の押型文により充填される点では口縁部片と共通するが、内面はナデ調整で仕上げられておりやや異なる。図示できない小片の中に、内面の半分ほどに押型文が施され、残りの半分がナデ調整で仕上げられる資料が見られることから、口縁部を含む胴部上半には内面にも押型文が施され、中～下半部は内面がナデ仕上げであったと考えられる。これらの資料は胎土もよく似ており、同一個体となる可能性もあるが、接合資料がなく、やむを得ず別個の個体として提示しているので留意されたい。

#### ⑤ その他の出土遺物

調査区からは、以上に述べたほかに遺構検出時や上層遺構面より上位の包含層(表土を含む)中などからいくらかの土器が出土した。また、土器のほか各所から石器が出土した。これらの遺物についてはここでまとめて報告を行う。なお、土器以外の出土遺物のうち、遺構に伴うものについては各遺構の報告の項でも触れているので参照されたい。

#### ピット出土土器 (第 56 図 1～15)

**土師質土器** (1・7・10・12・13・15) 1・5・10 は土師質の小皿である。いずれも底面が平坦で外面に糸切り痕跡を残し、口縁部は短く斜めに伸びるもので、10 は特に器壁が薄く精製品か。1 は Pit5、5 は Pit23、10 は Pit37 出土。2・3・13 は土師質の坏である。底面は平坦で外面に糸切り痕跡を残し、口縁部は斜め上方にやや長く伸びる。小皿よりも底面径が大きい。2・3 は Pit21、13 は Pit60 出土。4・6・7 は土師質の碗である。4・6 は内湾しながら斜めに立ち上がる口縁部が残る資料で、6 は径が復元でき口径 16.8cm ほどをはかる。7 は底部付近の資料で、断面が三角形に近い低い高台を持つ。4 は Pit23 出土、6・7 は Pit24 出土。12・15 は土鍋であろうか。12 は口縁部が短く屈曲するもの、15 はやや長く屈曲するもので、ともに口縁部正面が水平に近く伸びる。15 は小片で口径は計測できなかったが、かなり大形の品であろう。12 は Pit55 出土、15 は Pit65 出土。

**須恵質土器** (8・14) 8 は小片で径が復元できず、傾きもやや自信がないが、壺形土器の胴部片か。輪積み成形による粘土紐接合痕跡と、接合部のユビオサエ痕跡が内・外面によく残る。胎土は明灰白色でやや色調が明るい焼成は良好で硬質であり、須恵質土器とした。Pit24 出土。14 は大形の甕または壺の胴部下半片であろう。内面に青海波文が明瞭に残り、外面上半部には自然釉がかかる。Pit62 出土。

**瓦質土器** (11) 11 は瓦質の鉢の口縁部片である。ごく小片で径は復元できず、傾きもやや自信がない。器壁調整は内・外面ともにハケ目。Pit41 出土。

**陶磁器** (9) 9 は龍泉窯系青磁碗の口縁部片である。わずかに内湾しながら斜め上方に伸びて、口

縁端部でわずかに外反する。外面には鎬蓮弁を彫りこむ。小片でやや自信がないが径を17.4cmに復元した。Pit24 出土。

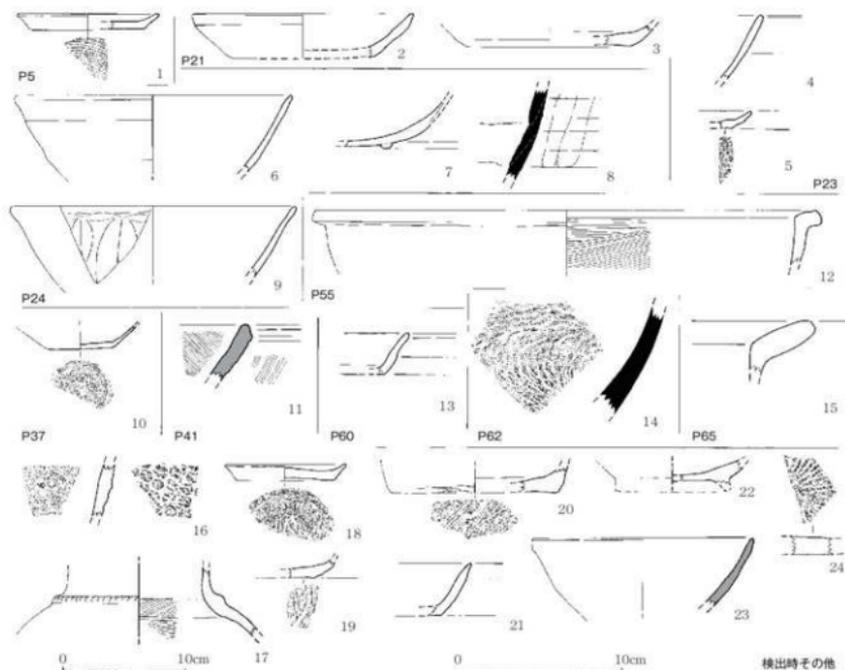
その他の遺跡出土土器 (第56図、図版27)

**縄文土器 (16)** 16は表土中から出土した縄文土器の鉢の胴部片で、楕円形の粒文が押型により施される資料である。早期か。

**弥生土器 (17)** 17は須玖式土器の壺の肩部片である。胴部上半はややなだらかに湾曲し、頸部下半は直立に近く伸びる。頸部屈曲はゆるやかで、外面に断面三角形の突帯を一条めぐらせ、刻目を施す。中期須玖式土器でも古いタイプのものであろう。表土中からの出土。

**土師質土器 (18～22)** 18・19は土師質土器の小皿である。底部は平坦で外面に糸切り痕を残し、口縁部はごく短い。18は調査中の表採、19は攪乱坑からの出土。20・21は土師質土器の坏である。ともに底部が平坦で外面に糸切り痕を残すもので、20は口縁部がほとんど遺存しないが21のように斜めにやや長く伸びるものであろう。ともに表土中からの出土。22は土師質土器の碗である。欠損しているがおそらく断面がやや短い丸形の高台を持つものであろう。表土中からの出土。

**瓦質土器 (23)** 23は瓦質の碗である。わずかに内湾しながら斜め上方に伸びる口縁部付近が遺存する。表土中からの出土。



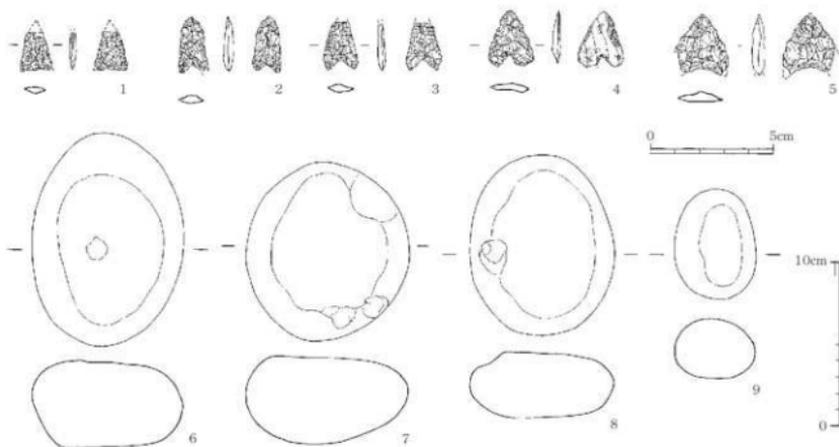
第56図 その他の遺跡出土土器実測図 (17は1/4、他は1/3)

炆器(24) 24は焼き締まって硬質の土器で、片面に放射状の刻目を有することから、播鉢の底部片と判断した。胎土は赤褐色で、遺存部位の完形もあろうが軸が認められず、炆器として報告しておく。表採資料である。

遺跡出土石器(第57図、図版27)

打製石器(1~5) 1~5はともに打製石鏃である。1は平基で先端部を欠損する。残存長さ1.6cm、幅1.25cm、厚さ0.25cm、重さ0.5gをはかる。表採資料である。2は幅狭い挟り部を持ち粗い調整を施すもので、長さ2.2cm、幅1.2cm、厚さ0.4cm、重さ0.85gをはかる。I区D-10グリッド4層出土。3は薄手の鋸歯鏃で先端部を欠損する。残存長さ1.9cm、幅1.3cm、厚さ0.27cm、重さ0.55g。上層検出のP2出土。これらはともに安山岩製。4は剥片鏃の完形品。背面のみにやや粗い調整を施す。長さ2.2cm、幅1.8cm、厚さ0.35cm、重さ1gをはかる。II区G-10グリッドの4c層出土。4・5はともに姫島産黒曜石製。5は大型の五角形鏃。長さ2.2cm、幅2.05cm、厚さ0.5cm、重さ1.95gをはかる。II区F-10区4c層出土。漆黒の黒曜石製。

6~10は磨石である。6は長円形で厚みがある。片側面の磨痕は著しく、1cmほどの凹みを有する。径13×9.1cm、厚さ5.2cm、重さ859gをはかる。II区G-10グリッド4c層出土。7は円形に近く、片面に平坦に近い磨面がある。径10.9×9.8cm、厚さ5.4cm、重さ696gをはかる。II区G-11グリッド4c層出土。8は長円形で、両面に磨痕が残る。径10.9×8.8cm、厚さ4.0cm、重さ472gをはかる。II区F-10グリッド4c層出土。9は小型で長円形を呈す磨石。全面に磨痕が残る。径6.7×4.9cm、厚さ3.7cm、重さ133gをはかる。III区L-5グリッド4b層出土。7が花崗岩、他は凝灰岩製である。



第57図 遺跡出土石器実測図(1~5は1/2、他は1/3)

## 4 分析

出土ドングリの種子同定と C14 年代測定を行う。

放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林絏一

Zaur Lomtatidze・黒沼保子

### 1. はじめに

福岡県京都郡みやこ町に位置する下伊良原東向川原遺跡から出土した試料について、加速器質量分析法 (AMS 法) による放射性炭素年代測定を行った。なお、同一試料を用いて種実同定も行われている (大型植物遺体分析の項参照)。

### 2. 試料と方法

試料は、3号貯蔵穴から出土した種実試料4点で、アカガシ垂実 (PLD-32059) と、ツクバネガシ果実 (PLD-32060)、イチイガシ果実 (PLD-32061)、イチイガシ未熟果実 (PLD-32062) である。

測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計 (パレオ・ラボ、コンパクト AMS: NEC 製 1.5SDH) を用いて測定した。得られた  $^{14}\text{C}$  濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 $^{14}\text{C}$  年代、暦年代を算出した。

表1 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-32059	遺構: 3号貯蔵穴 試料No. 1 遺物No. 1A	種類: 生試料・種実 (アカガシ果実) 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-32060	遺構: 3号貯蔵穴 試料No. 2 遺物No. 2A	種類: 生試料・種実 (ツクバネガシ果実) 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-32061	遺構: 3号貯蔵穴 試料No. 3 遺物No. 1B	種類: 生試料・種実 (イチイガシ果実) 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-32062	遺構: 3号貯蔵穴 試料No. 4 遺物No. 2B	種類: 生試料・種実 (イチイガシ未熟果実) 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)

### 3. 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ( $\delta^{13}\text{C}$ )、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した  $^{14}\text{C}$  年代を、図1に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

$^{14}\text{C}$  年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 $^{14}\text{C}$  年代 (yrBP) の算出には、 $^{14}\text{C}$  の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した  $^{14}\text{C}$  年代誤差 ( $\pm 1\sigma$ ) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の  $^{14}\text{C}$  年代がその  $^{14}\text{C}$  年代誤差内に入る確率が 68.2% であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定で半減期が5568年として算出された<sup>14</sup>C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の<sup>14</sup>C濃度の変動、および半減期の違い(<sup>14</sup>Cの半減期5730±40年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

<sup>14</sup>C年代の暦年較正にはOxCal4.2(較正曲線データ: IntCal13)を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された<sup>14</sup>C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は<sup>14</sup>C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

表2 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	δ <sup>13</sup> C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	<sup>14</sup> C年代 (yrBP±1σ)	<sup>14</sup> C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-32059 アカガシ果実	-28.83±0.17	3826±24	3825±25	2298-2267 cal BC (23.2%)	2431-2424 cal BC (0.6%)
				2261-2206 cal BC (45.0%)	2403-2381 cal BC (2.8%) 2349-2198 cal BC (91.0%) 2163-2152 cal BC (1.1%)
PLD-32060 ツクバネガシ果実	-30.74±0.24	3801±25	3800±25	2286-2201 cal BC (68.2%)	2335-2325 cal BC (1.2%) 2307-2190 cal BC (81.0%) 2181-2141 cal BC (13.3%)
PLD-32061 イチイガシ果実	-29.39±0.19	3742±21	3740±20	2200-2160 cal BC (45.2%) 2154-2135 cal BC (19.4%) 2070-2065 cal BC (3.6%)	2206-2120 cal BC (71.9%) 2095-2041 cal BC (23.5%)
PLD-32062 イチイガシ未熟果実	-29.77±0.19	3784±21	3785±20	2278-2251 cal BC (25.0%) 2229-2221 cal BC (5.9%) 2211-2196 cal BC (14.4%) 2171-2146 cal BC (22.9%)	2287-2190 cal BC (65.4%) 2182-2141 cal BC (30.0%)

#### 4. 考察

以下、各試料の暦年較正結果のうち2σ暦年代範囲(確率95.4%)に着目して結果を整理する。なお、縄文時代の土器編年と暦年代の対応関係については富井(2008)を参照した。

アカガシ果実(PLD-32059)は、2431-2424 cal BC (0.6%)、2403-2381 cal BC (2.8%)、2349-2198 cal BC (91.0%)、2163-2152 cal BC (1.1%)の暦年代を示した。ツクバネガシ果実(PLD-32060)は、2335-2325 cal BC (1.2%)、2307-2190 cal BC (81.0%)、2181-2141 cal BC (13.3%)の暦年代を示した。イチイガシ果実(PLD-32061)は、2206-2120 cal BC (71.9%)および2095-2041 cal BC (23.5%)の暦年代を示した。イチイガシ未熟果実(PLD-32062)は、2287-2190 cal BC (65.4%)および2182-2141 cal BC (30.0%)の暦年代を示した。4点とも縄文時代後期前葉に相当する。なお、種実試料の場合、測定結果は種実の結実年代を示す。

#### 引用・参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.  
 中村俊夫(2000)放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の<sup>14</sup>C年代編集委員会編「日本先史時代の<sup>14</sup>C年代」:3-20, 日本第四紀学会。

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hafliðason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.

富井 眞 (2008) 並木式・阿高式土器. 小林謙一編「総覧縄文土器」: 658-665, アム・プロモーション.

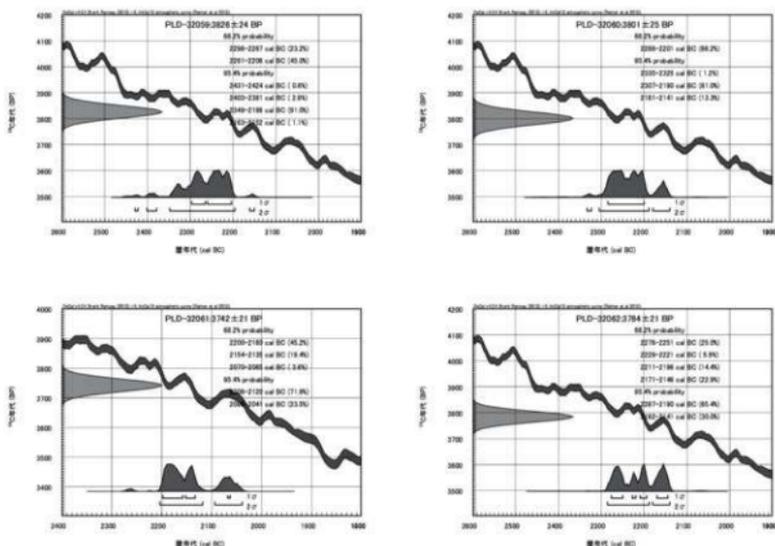


図1 暦年較正結果

## 1. はじめに

福岡県京都郡みやこ町下伊良原に位置する下伊良原東向川原遺跡は、祇川の右岸段丘上に立地する中世～近世と弥生時代、縄文時代早期の複合遺跡である。谷部からは、ドングリを貯蔵する土坑が 8 基検出されている。ここでは、縄文時代後期前葉の年代が得られた貯蔵穴から出土した大型植物遺体を同定し、利用された種実について検討した。なお、試料の一部を用いて放射性炭素年代測定も行われている（放射性炭素年代測定の項参照）。

## 2. 試料と方法

試料は、発掘調査中に肉眼で回収された 3 号貯蔵穴から出土した大型植物遺体である。試料の取り上げは、九州歴史資料館によって行われた。委託用の種実は、調査者により任意に抽出されてグループ分けされたものである。種実の年代測定の結果は、縄文時代後期前葉であった（放射性炭素年代測定の項参照）。

抽出・同定・計数は、肉眼および実体顕微鏡下で行った。試料は、九州歴史資料館に保管されている。

## 3. 結果

同定の結果、アカガシ果実・殻斗付果実・幼果と、イチイガシ果実・殻斗付果実・殻斗、アカガシーツクバネガシ果実、コナラ属アカガシ亜属果実の 4 分類群が得られた。同定結果を表 1 に示す。

以下に、出土傾向について記載する。

アカガシ果実 52 点・殻斗付果実 3 点・幼果 1 点、イチイガシ果実 10 点・殻斗付果実 7 点・殻斗 4 点、アカガシーツクバネガシ果実 16 点、コナラ属アカガシ亜属果実 2 点が得られた。

次に、産出した代表的な分類群の種実について記載し、図版を掲載して、同定の根拠とする。

(1) アカガシ *Quercus acuta* Thunb. 殻斗付果実・果実・幼果 プナ科

果実は円柱状楕円体。上部は太く、先端は急に細くなる。臍の幅は果実幅の約 50% 以上。果実頂部に輪状紋がみられ、果実から突出し、太い。突出部（首）は伏腕状。臍は膨らむ。殻斗付果実の大きさは、高さ 20.8mm、幅 10.1mm。果実の大きさは、高さ 20.3mm、幅 11.3mm。幼果は殻斗が付着する。高さ 11.8mm、幅 10.2mm。

(2) イチイガシ *Quercus gilva* Blume 殻斗付果実・果実・殻斗 プナ科

果実は楕円形～長楕円形で、突出部（首）は円柱状ないし円錐状で輪状紋がある。柱頭は短く横を向く。果実の上部とその付近には毛が密生する。臍は中央部が尖るものが多い。殻斗は円錐形で、鱗

表1 下伊良原東向川原から出土した大型植物遺体

分類群	遺構 3号貯蔵	
	時期	縄文後期前葉
アカガシ	殻斗付果実	3
	果実	52
	幼果	1
イチイガシ	殻斗付果実	7
	果実	10
	殻斗	4
アカガシーツクバネガシ	果実	16
コナラ属アカガシ亜属	果実	1 (1)
括弧内は破片数		

片は合着して輪状に並ぶ。殻斗付果実の大きさは、高さ 16.2mm、幅 11.1mm。果実の大きさは、高さ 16.6mm、幅 8.7mm と高さ 13.9mm、幅 9.0mm。核斗の大きさは、高さ 6.9mm、幅 14.6mm。

(3) イチイガシーツクバネガシ *Quercus gilva* Blume - *Q. sessilifolia* Blume 果実 ブナ科

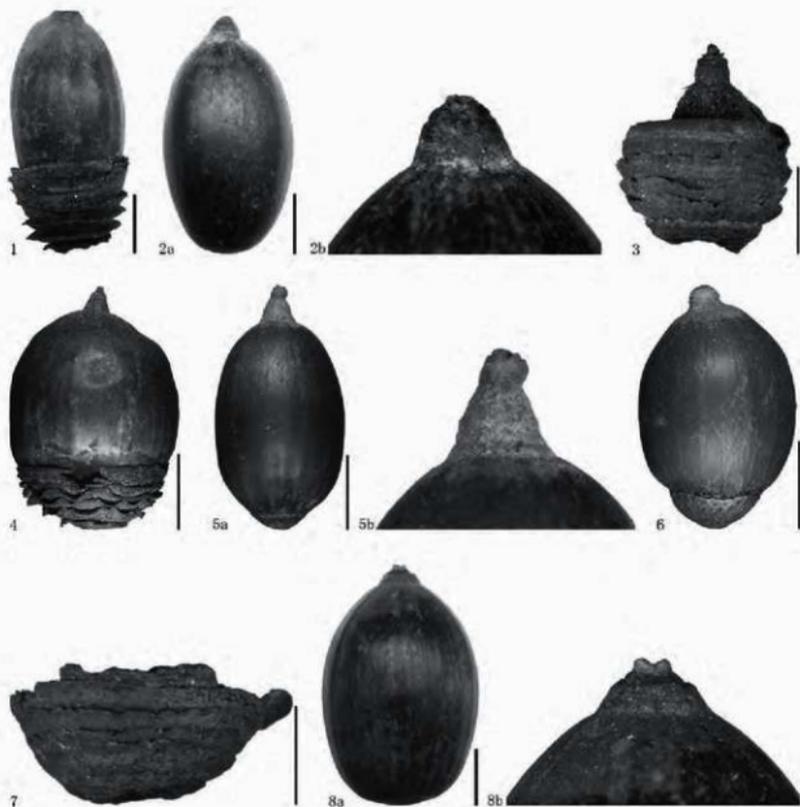
果実は楕円形～長楕円形で、円柱状楕円形体。堅果上部は太い。臍の幅は果実幅の約 50%以上。突出部はなだらかな円錐状。光沢がある。高さ 14.1mm、幅 10.1mm。種レベルの同定ができない一群はアカガシ亜属とした。

#### 4. 考察

発掘調査中に回収された縄文時代後期前葉の 3 号貯蔵穴から出土した大型植物遺体を同定した結果、広葉樹のアカガシとイチイガシ、アカガシーツクバネガシ、コナラ属アカガシ亜属が得られた。少なくとも、2 種もしくは 3 種のカシ類が貯蔵されている点が明らかになった。

食用にあたり、アカガシは水さらしが必要なのに対し、イチイガシは生食可能な種である。この 2 種が混合して貯蔵され、また食用部位ではない、いわゆるドングリの帽子の部位（殻斗）や幼果が確認されている産出状況から、採取されたドングリ類が貯蔵穴に水漬けにされ、保管されていた可能性がある。水漬けにより果実内に入り込んだ虫殺しの役割もあった可能性がある。今回検討した試料の中では、果実で見るとアカガシが多く、イチイガシは 3 割ほどであった。今後、3 号貯蔵穴から出土した全体量の中での比率や他の貯蔵穴から出土したドングリ類との比較を行う必要がある。

今回は貯蔵穴内のみを検討であったが、今後谷部から出土した大型植物遺体や花粉化石、木材遺体と比較すれば、アカガシとイチイガシが周辺にどの程度生育していたのか、あるいはある程度離れた場所から採取してきたのかを検討することができると期待される。



スケール 1, 2a, 3-5a, 6-8a: 5mm, 2b, 5b, 8b は任意

図版1 下伊良原東向川原遺跡3号時藏穴から出土した大型植物遺体

1. アカガシ果実 (PLD-32059)、2. アカガシ殻斗付果実、3. アカガシ幼果、4. イチイガシ果実 (PLD-32061)、
5. イチイガシ果実 (PLD-32062)、6. イチイガシ殻斗付果実、7. イチイガシ殻斗、8. アカガシーツクバネガシ果実 (PLD-32060)

## 5 小結

東向川原遺跡の調査では、縄文時代早期から近世にいたる様々な遺構・遺物が出土した。特に重要な調査成果について簡単に触れておきたい。

縄文時代の資料としては、5号土坑より山形の押型文土器が、また包含層中からは塞ノ神B式土器がまとまって出土した。山形の押型文土器は、縄文時代早期中葉に編年される黄島式土器の古段階に類例がある。表採資料ではあるが、黄島式中段階に比定される楕円型の押型文土器もあることから、5号土坑と出土土器群は早期中葉に比定して大過ないものと考えられる。

包含層中から出土した、二枚貝の腹縁を用いた刺突文と二条の平行沈線を繰り返す文様構成を持つ土器については、二枚貝の腹縁を用いた刺突文より、縄文時代早期末葉に比定される塞ノ神B式土器として報告した。頸部屈曲部や刺突文を連続させる口唇部などの特徴もおおよそ合致する。

縄文時代早期の資料については、これまでも上伊良原塚遺跡や上伊良原台ノ原遺跡などで出土しているが、そのほとんどが二次形成の包含層中からの出土であった。今次調査で遺構に伴う黄島式土器が発見されたことは重要であり、今後の北部九州地区における縄文時代土器編年にとって貴重な資料であろう。

ドングリを充填した貯蔵穴群については、先述の通り調査の時点で中世から近世のものであると判断した。ところが3号貯蔵穴出土のドングリ4点を試料に実施した放射性炭素年代測定の結果では、縄文時代後期前葉にあたることとなった。内部にドングリを包含する貯蔵穴については、平成25年度に調査を実施した下伊良原西の塚遺跡でも約20基を検出しており、縄文時代後期前葉から中葉の時期に比定されている。丘陵裾部の絶えず水が浸み出す位置に占地する様子や、アカガシ・ツクバネガシを主体にイチイガシが混じる組成も今回の調査例と近似しているといえ、比較すれば下伊良原東向川原遺跡の貯蔵穴を縄文時代の所産とすることには一定の整合性があるといえる。当遺跡からは基本的に縄文時代後期の遺物は出土しておらず、また理化学的な分析を無批判に援用することもできないが、少なくとも調査時点での所見は訂正せざるを得ないであろう。



貯蔵穴群の調査風景

## VI 下伊良原羽後屋敷遺跡の調査報告

### 1 遺跡の概要

**遺跡の立地** 下伊良原羽後屋敷（はごやしき）遺跡は、祓川上流域右岸の低位河岸段丘上に立地する。国道496号線の北側に位置し、集落はすでに移転したが、かつて南には伊良原郵便局、北には伊良原小学校、西にはJA 犀川の伊良原店が、また周囲には民家もまもって存在しており、下伊良原地区の中心地にあたる（第28図）。

**調査地点の概要** 調査区の地番はみやこ町犀川伊良原29-1・2番地で、旧状は北および西に傾斜する段造成された数枚の水田面であった。道路からの比高は1mほど高くなっていて、調査着手前の地表面の標高は193.2～194.2mをはかる。なお付近には、南100m上流に五輪塔・一石五輪塔・



長畑 A 石塔群

板碑・石塔等が3箇所にとまる羽後屋敷石塔群が、またすぐ北東側の山麓部では段造成を施して五輪塔・一石五輪塔・板碑・石塔を納めた長畑石塔群も立地する。また、先に本報で報告した下伊良原フラノ遺跡は、本遺跡からみて祓川の対岸200m下流左岸にあたる。

**調査の概要** 調査面積は1,350㎡、調査期間は平成24年6月6日～9月5日であった。検出された主な遺構は中世の土坑と土壇墓で、土壇墓からは完形の輸入青磁が出土している。

### 2 調査の経過

**調査の着手まで** 伊良原ダム水没予定地内には国道449号線が南北に走っており、これを水没地外に移す付け替え工事が進められている。この付け替え事業において、祓川を渡る新しい橋梁を伊良原小学校南側につくることとなり、平成21（2009）年頃より2者協議の場において埋蔵文化財の試掘調査が必要がある旨を協議していた。平成23（2011）年度になって、橋脚部分建設予定地とその周囲の水田の買収が終了した旨の連絡があった。そこで、九州歴史資料館と福岡県文化財保護課では平成23年度末に該当地の試掘調査を行った結果、埋蔵文化財が包蔵されていることを確認した。ダム建設事務所との間で発掘調査についての日程等調整を行い、平成24（2012）年度当初より発掘調査に着手することで協議が成立した。

**調査の経過** 平成24（2012）年6月6日より、重機を用いた表土剥ぎに着手する。調査地には数段の水田造成面が見られたが、遺構面は大きく東から西へとなだらかに傾斜していて、造成団の影響はほとんど認められない状況が現れる。6月8日に、調査を終了した下伊良原東向川原遺跡の作業ヤードより休憩所の引越しを行い、翌週に入った6月13日より、重機による表土剥ぎと一部



第 58 図 下伊良原羽後屋敷遺跡遺構配置図 (1/300)

併行しつつ作業員を投入して人力を用いた作業を開始する。調査区の西側には南北に伸びる段落ちがあり、その縁を石垣にて保護しているが、出土遺物からこれが近世以降のものであることがわかったため、人力によりこれを除去したところ、下層より黒灰色粘砂質土からなる中世の遺物包含層が現れ、これを人力により掘り下げる。すると下層より黄褐色砂質土からなる中世の遺構面を検出できた。以後、黒灰色粘砂質土を人力により除去しつつ遺構面の検出範囲を広げるとともに、適宜検出したピット等の遺構の掘り下げ作業を併行して行う。

7月19日に調査区北寄りでは平面長方形プランの中世墓とみられる遺構を検出する。以後8月前半までに、周囲では中世墓などの検出が相次ぐ。8月2日には、1号土壙墓より略整形の青磁碗が出土し、注目を集めた。

8月後半までには遺構の掘削も終え、8月27日に仮設足場上より調査区的全景写真を撮影する。その後、4号土坑の中央に据えられており人力では除去できなかった花崗岩の大石を重機を用いて除去シタメ押しの調査を行い、人力を用いた調査を完全に終了する。最後に、重機を用いて埋め戻しを行い、9月10日に調査を完全に終了する。

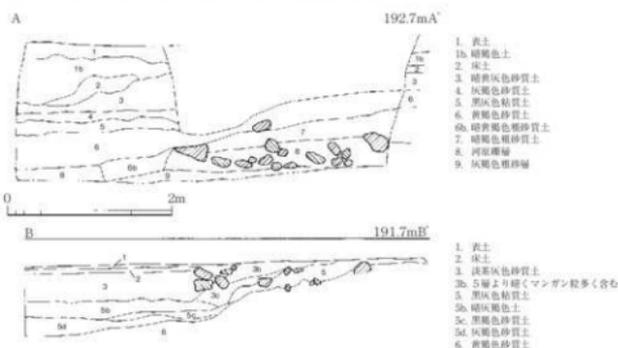
### 3 調査の成果

#### (1) 基本層序

第59図に調査区の基本土層図を示す。A-A'土層図は遺跡中央東側に、B-B'土層図は遺跡北寄りの西側にそれぞれ設定した(第58図参照)、土層観察壁の土層断面である。土層の堆積は大きく9枚観察された。1層は表土、1b層は水田耕作土で暗褐色土、2層は水田床土である。3層は暗黄灰色砂質土で東側に厚く堆積しており、山側からの流入堆積土であろう。4層は灰褐色砂質土で洪水砂か。5層の黒灰色粘質土はA-A'土層図の付近では層厚15cmに満たないが、B-B'土層図を見ると西側段落ち部付近では30cmと厚く堆積していることが読み取る。また、調査区西側端部では5層と土質が共通する5b~d層の上面が水平になっており、おそらく水田造成時の盛土と見られる。中世の遺物を多量に包含しており、中世以降の水田造成盛土であろう。

6層は伊良原地区で鍵となる黄褐色砂質土で、この上面が中世の遺構面となる。6層自体は40cm以上の厚みを持つ。6b層はピットであろうか。7層は暗褐色粘砂質土で丘陵付近のみに堆積し、遺物は包含しない。以下、基盤層となり、8層は河原礫層、9層の灰褐色粗砂層へと続く。

なお、伊良原地区ではしばしば中世の遺構面下層に縄文時代の遺構面や遺物包含層が見られるため、本調査区でも念のため、中世の調査終了後に遺跡の北側三箇所に調査グリッドを設定し6層を掘削したが、押型文土器1点が出土したのみであった。



第59図 下伊良原後屋敷遺跡基本土層図 (1/60)

## (2) 調査の概要

調査地は山麓部に形成された幅 15m、長さ 75m の狭長な水田面で、北東側は山麓が迫る一方、西に隣接する水田面は試掘の結果祇川の氾濫原と判明している。遺構面における 25cm ごとの等高線はほぼ等間隔で南北方向に走り、全体に緩やかに西に下る傾斜を持つ。ただし調査区西端部では段造成の痕跡が認められる。

遺構は 6 層の黄褐色砂質土上面で確認され、その分布は全体的に見られるが、特に中央部やや北寄りに集中しており、柱穴以外の遺構はすべてここから検出されている。検出した遺構には、土坑 4 基、土墳墓 2 基があり、これらはいずれも中世に属するものと考えられる。また、これらと埋土が共通して黒褐色土の埋土をもつ多数の柱穴群もやはり同時期のものと考えられるが、残念ながら建物跡・欄干などとしてまとまるものは指摘できなかった。また、遺構が集中する付近を中心に、6 層の上に遺物包含層である 5 層黒灰色粘質土が堆積していて、多くの土師器や青磁・瓦器等が出土した。

## (3) 遺構と遺物

### ① 土坑

調査区の北半部に 4 基を確認した。うち 1・2・4 号土坑は調査区中央部やや北寄りにまとまって分布し、3 号土坑はやや離れた北寄りにある。形態は長方形を呈するが、うち 2・3 号土坑は幅が狭く、後述する土墳墓と平面形状が似ているため、埋葬施設である可能性もあるが、1・2 号土墳墓のような明らかに副葬品と判断出来る遺物の出土を見なかったため、ここでは土坑として報告しておく。

### 1 号土坑 (第 60 図、図版 29)

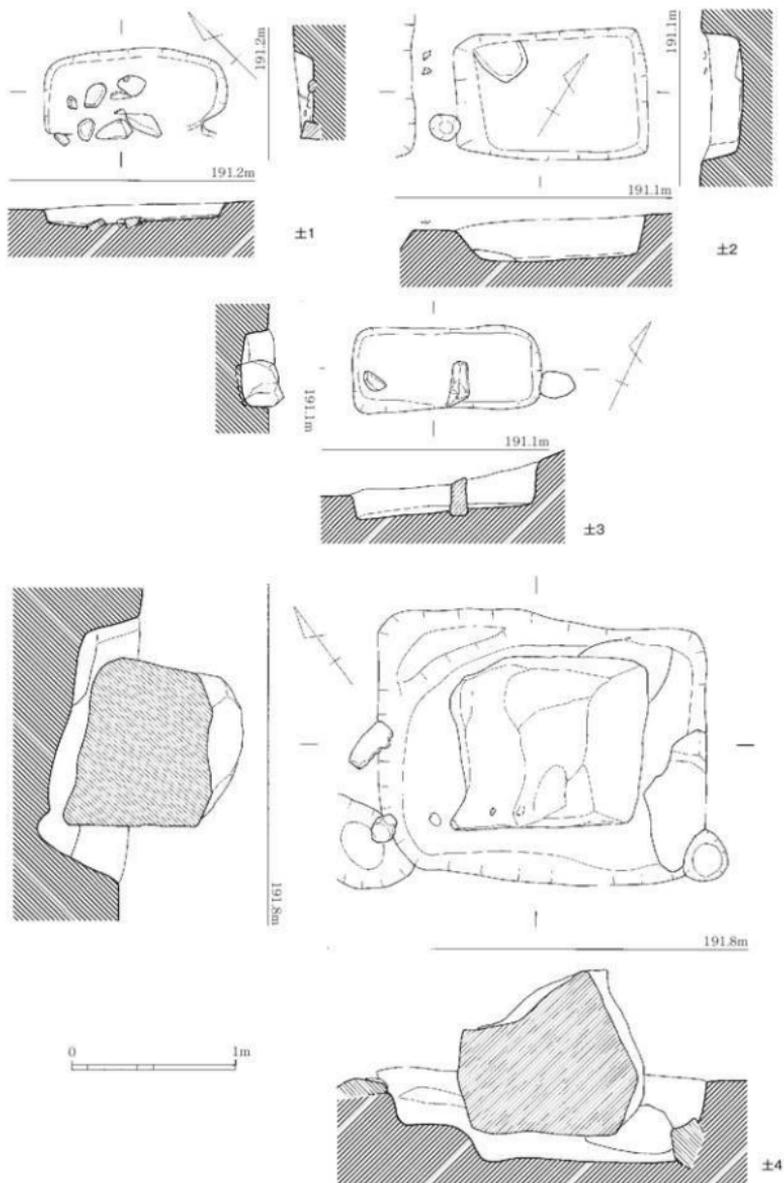
調査区の中央やや北寄りで検出された土坑である。西側辺はピットにより削平されているが全形は復元可能で、平面形状は隅丸長方形を呈し、床面は中央部がやや下がっていて、底面で 15cm 大の河原礫に当たる。規模は、長辺 1.11m、短辺 0.53m をはかり、残存深さは 10cm と浅い。床面にひろがる礫内より瓦質土器が出土した。

### 出土遺物 (第 62 図)

瓦質土器(1) 1は瓦質の鉢の胴部片である。小片で径・傾きともに不安がある。輪積成形とみられ、3cmほどの間隔を開けて横方向にユビオサエの痕跡が2条ほど連続する。中世の資料か。

### 2 号土坑 (第 60 図、図版 30)

調査区中央部やや北寄り、1号土坑の南側で検出された東西方向に長い土坑である。西側 25cm の位置には巨石を置く 4号土坑が隣接するが切り合い関係はない。平面形状は幅広の長方形を呈し、規模は長辺 1.16m、短辺 0.8m、深さ 0.25m を測る。側辺の壁、床面とも緩やかなカーブを持つ。西端部には河原石が顔を出す。4号土坑との間の遺構外から糸切りの底部をもつ小皿と高台付椀が出土した。遺構外出土とはいえ、本遺構ときわめて近い位置で出土しており、本遺構とも何らかの関係が推測されるため、ここで報告しておく。なお、遺構の内部からも土師器の小片が出土しているが図化に耐えない。



第60图 1~4号土坑实测图(1/30)

## 出土遺物（第62図）

**土師質土器（2～5）** 2・3は碗である。胎土や色調、焼成度合い、器表の摩耗度合いがよく似ており、同一個体の破片の可能性があるが、接合箇所が遺存しておらず、ここでは別個体として報告しておく。破片資料のためそれぞれのみでは全形を復元出来ないが、おそらく半球形の碗であろう。2には断面三角形の低い高台が残り、3の口縁端部は丸く取める。器壁は摩耗していて調整は観察できない。4は坏である。底部は水平で外面は糸切り成形ののちに2mmほどの厚さの粘土を貼り付ける。その外面には板目がついており、おそらく糸切り後に板に乗せて最終整形を行ったときに、板の上に乗っていた粘土が付着したものと考えられる。5は小片で全形は不明だが土師皿か。底部は糸切り後に板目が付着する。これらはいずれも中世の資料であろう。

## 3号土坑（第60図、図版30）

調査区の中央部北側で検出された土坑で、主軸をほぼ東西方向にとる細長い土坑である。平面形状は隅丸長方形形状を呈し、中央付近を浅く掘り凹めて花崗岩の板石を立てる。規模は長辺1.15m、短辺0.51m、深さ15～25cmを測る。出土遺物はない。

## 4号土坑（第60図、図版30）

調査区の中央やや北寄りですら2号土坑の西側に隣接して検出された。相互に切り合い関係はない。重機による遺構検出時点から、すでに花崗岩の巨石がかなり上部に突き出す形で座っていて、これを当初は転石と判断していたが、その周囲に土坑の堀方を確認してこれを掘り下げた結果、巨石の根が土坑の内部に伸びており、巨石の下半部を内部に収める特殊な土坑と判明した。

内部におかれた高さ1m、両幅1mの花崗岩の烏帽子岩状の巨石は、土坑掘方の床面より17cmほど浮いていて、このレベルで石材底の高さを揃えた状態で土坑のほぼ中央に据えられる。東隅には巨石を噛む石材を配しバランスを保つ。掘方の主軸はN-52°-Wで、北側にテラスを有する。土坑の平面規模は長辺2m、短辺1.6m、深さ50cmで、巨石は掘方から上に約60cm顔を出すことになる。重機により巨石を除去したが、直下からの遺物は無く、掘方内からわずかに青磁片、土師器小皿、瓦質土器片が出土したのみである。あるいは巨石の魔棄土坑であろうか。

## 出土遺物（第62図）

**瓦質土器（6）** 6は碗の口縁部片である。半球状の体部をなすものであろう。器壁内面に横方向のミガキを施し、外面はナデ。口縁部内・外面が黒化する。

**土師質土器（7・8）** 7は碗の底部片である。半球状の体部を持つものであろう。高台は断面三角形状で低い。8は土師皿である。小さく平坦な底部と短い口縁部を持つ。底部外面に糸切り痕が残る。

**陶磁器（9）** 9は龍泉窯系青磁の小碗である。釉はオリブ色で細かい貫入が入り、ごく薄くかかる。胎土は灰白色で非常に精良である。見込みに片刃彫りで花文を描く。

以上はいずれも中世の資料である。

## ②土墳墓

調査区の中央やや北寄りから北側にかけて2基の土墳墓を確認した。いずれも平面形状が長方形で壁が垂直に近く立つ。埋土中から、略完形の青磁碗が1固体ずつ出土しており、これを副葬品と

判断してこの遺構を土壌墓と考えたものである。よく似た形状の掘り込みは他に2基見つかっているが、明らかに副葬品と判断出来る遺物の出土を見なかったため、本書ではこれらを土坑として報告している(2・3号土坑)。

### 1号土壌墓(第61図、図版31)

調査区の中央部やや北寄りの西側で検出した。東西を花崗岩の巨石に挟まれた狭い空間に、南北に細長い長方形の土坑を掘っており、内部から青磁碗の完形品が1点北壁に寄って正位で出土したため、これを副葬品と考え、本遺構を土壌墓と認定した。規模は検出面で長辺1.08m、0.51m、残存深さは0.23mを測る。床面はやや丸みを持つ素掘りで北に若干高いこと、青磁碗の位置から、頭位方向が北になるものと推測される。主軸がN-7°-Wにとる。

### 出土遺物(第62図、図版32)

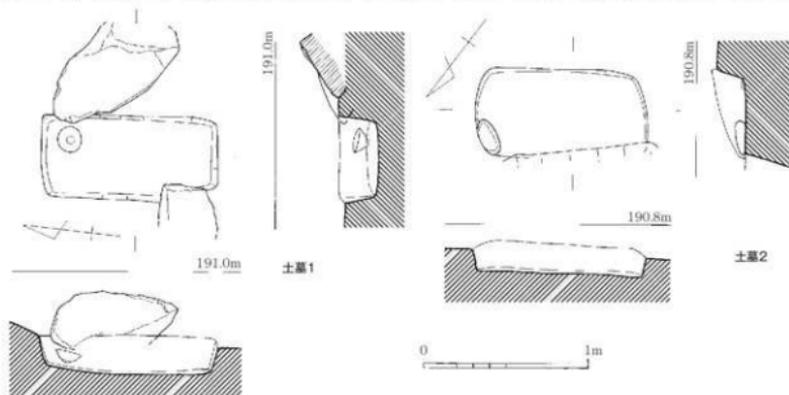
**陶磁器(10)** 10は龍泉窯系青磁碗で、ほぼ完形品である。底部は水平で、体下部で屈曲しており、口縁部はまっすぐに伸びながら開く。高台はやや細めで外側に面取りを施す。軸は透明感のある灰緑色で、やや大きめの貫入が全体に入り、高台部は露胎。見込みには花文をあしらひ、外面には片刃彫りで連弁文を施して、弁には縦方向の細かい櫛目を施すが、文様は浅く不明瞭である。12世紀中～後葉の資料とされる。

### 2号土壌墓(第61図、図版31)

調査区の北側で検出した。すでに試掘調査の段階で遺構の存在を認識していた。やはり素掘りで、北西壁は重機により削平されているが平面プランは隅丸長方形で、青磁碗を副葬することから土壌墓と判断した。墓坑は主軸をN-44°-Eにとり、規模は長辺1.03m、短辺0.53mをはかり、残存深さは13cmと浅い。床面は北にやや高いがほぼ平坦である。出土した同安窯系青磁碗は土壌墓(棺蓋)上に置かれていた可能性もある。

### 出土遺物(第62図、図版32)

**陶磁器(11)** 11は同安窯系青磁碗で、口縁部の一部を欠くほかはほぼ完形である。半球形状の体部をもち、素口縁で、高台は断面三角形状に近く、内・外角に面取りを施し、高台内面の底部が盛



第61図 1・2号土壌墓実測図(1/30)

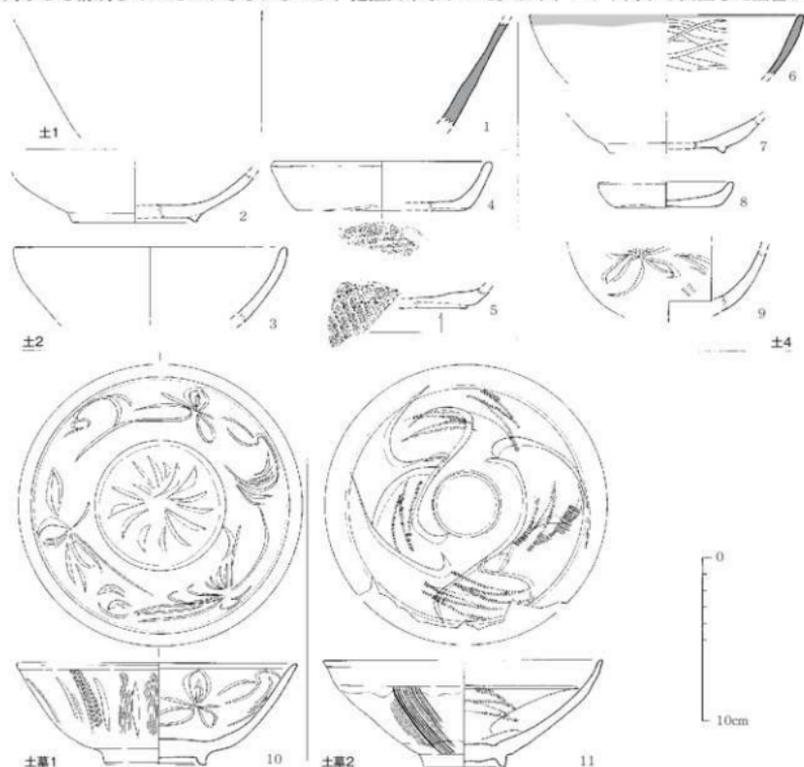
り上がる。軸は透明感のあるやや黄色みがかった灰緑色で薄くかかり、外面最下位から高台にかけては露胎。器壁内面には貫入が多く見られるが外面にはほとんどない。見込みには片刃彫りと櫛目技法を用いて花文をあしらひ、底部中央には深い両刃彫りで円弧を描く。外面には縦方向に長い櫛目を入れる。12世紀中～後葉の資料である。

### ③その他の出土遺物

以下では、ビット内、遺物包含層、またその他の遺跡内から出土した土器や、その他の種類の遺物について報告していく。また、その他の種類の遺物として土製品と石器が出土しているが、量が少ないため遺構に伴うか否かにかかわらずまとめて報告し、出土位置を文中で個別に記述することとしたので注意されたい。

### ビット出土土器（第63図、図版32）

調査区の全域から、多数のビットを検出した。平面形状が円形で、柱穴と考えるものがその多数を占めるが、一部に不定形のものも含まれる。本来は他のビット等と組み合せて掘立柱建物跡や欄列などを構成していたのかもしれないが、把握出来なかった。以下、ビット内から出土した土器に



第62図 各遺構出土土器実測図（1/3）

ついて報告する。なお、遺構配置図には図示した遺物が出土したピットのみ番号を記しているので参照されたい。

**土師質土器** (1・3～5・8～21) 1・5・9・10は土師質土器の碗である。いずれも破片資料で全形の判明するものはないが、すべて同じ形をした土器とみられ、おそらく半球状の体部と断面三角形の低い高台を持つものであろう。10は高台が細長く伸び、やや古相を呈するものか。10のみ、内面を黒色に仕上げた黒色土器A類である。いずれも器壁は摩耗しているが、調整が判明するものはすべてナデ。3・4・8・11～18・20は土師質土器の小皿である。いずれも、底部は平坦で外面に糸切り痕が残り内面はナデ、口縁部はごく短く、直径は8～10cm程度と小さい。うち、11・15の底部外面には糸切りの痕跡の上から板目がついている。また、14は底部外周に段が形成されておりおそらく一度糸切りに失敗した痕跡とみられる。19はやや大きな皿形土器で、口縁部が破損しているため口径は不明ながら、底径が10cm近くある。器壁調整は小皿と共通である。

これらはそれぞれ、1がPit1、3がPit7、4がPit13、5がPit8、8がPit16、9・10がPit17、11～17がPit18、18がPit20、19がPit24、20がPit26、21がPit28出土。

**瓦質土器** (6・7) 6・7は瓦質土器の碗である。いずれも底部が欠損しており、ゆるやかに内湾しながらひろがる口縁部が残される。器壁は灰褐色で口縁部内外面のみ黒色化する。Pit14出土。

**陶磁器** (2) 2は龍泉窯系青磁碗の口縁部片である。胎土は灰色で非常に精良であり、釉はやや透明感を帯びた灰黄緑色を呈し、細かい貫入が見られる。内面に草花文とみられる文様の一部が残される。Pit6出土。

これらの資料はいずれも中世のものであろう。

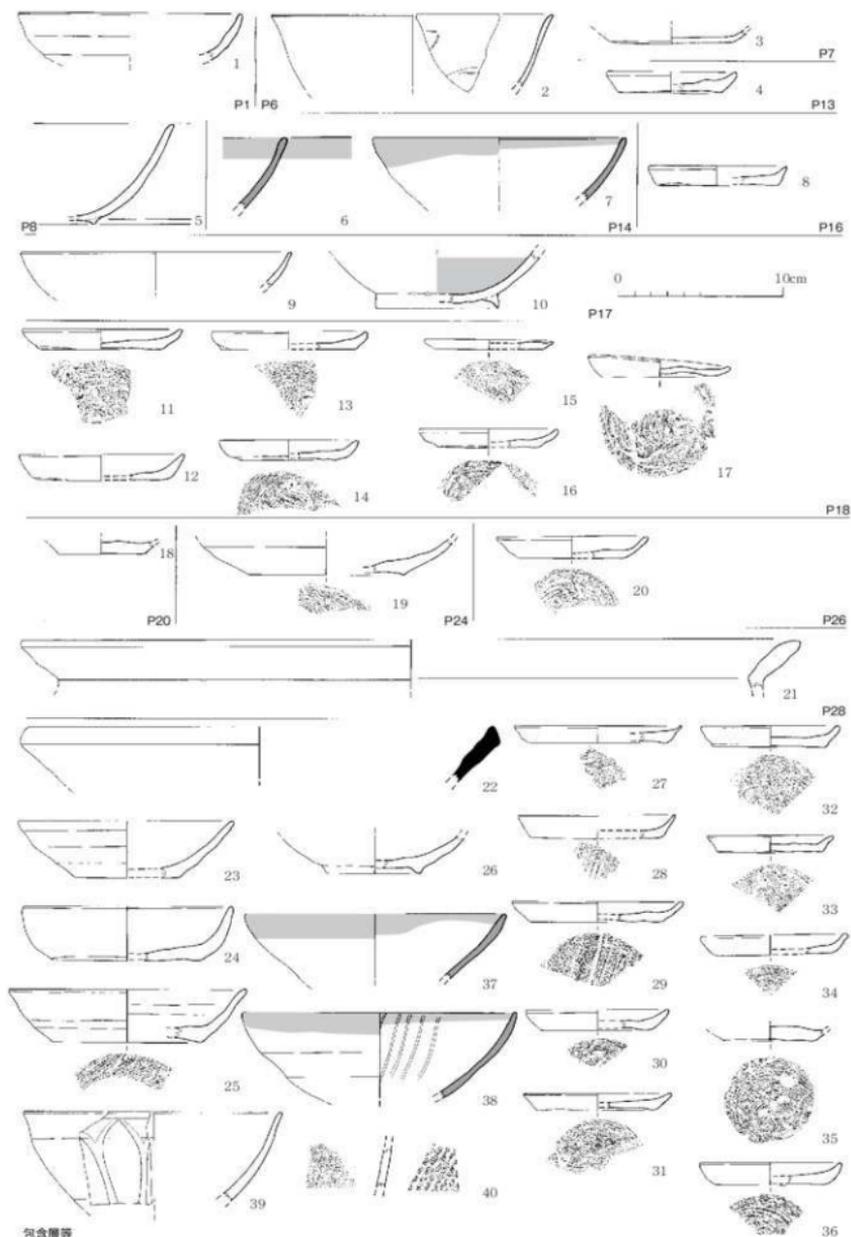
#### 検出時その他出土土器 (第63図、図版32)

**須恵質土器** (22) 22は須恵質の鉢の口縁部片である。直線的に斜め上方に開き、口縁部がやや肥厚して、端部を斜めに処理する。口径は28.2cmに復元したが、小片でやや自信はない。遺物包含層5層(水田造成盛土)中の出土。

**土師質土器** (23～36) 23～25は坏である。底部はいずれも水平で、外面に糸切り痕を残し、24はその上から板目がついている。体～口縁部は、23が斜めに長く伸びるタイプ、24はやや強く湾曲して上に立ち上がるタイプ、25がやや短く斜めに伸びるタイプで三者三様である。口径は24が最も小さく12.8cm、23が13.0cm、25は14.4cmをはかる。26は碗である。断面三角形のやや低い高台がつく底部付近のみが残された資料である。27～36は小皿である。いずれも底部は平坦で外面に糸切り痕を残し、うち28・29・35にはその上から板目がつく。口縁部はごく短く斜めに立ち上がる。孔径は大きいもので10cm、小さいものでは7.6cm程度をはかる。これらのうち、23・24・26・30が表土掘削中の採集品で、他はいずれも遺物包含層5層(水田造成盛土)中の出土である。

**瓦質土器** (37・38) 37・38は碗の体～口縁部片である。いずれも、底部からわずかに内湾しつつ斜め上方に伸びて、口縁部付近でやや強く内湾するものである。38は内面に暗文状の縦方向ミガキが見られ、38の外面と37の内・外面はナデ調整。ともに口縁部付近の内・外面が黒色化する。いずれも表土掘削中の出土である。

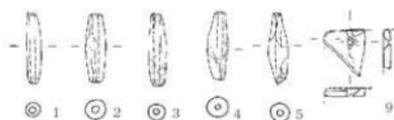
**陶磁器** (39) 39は龍泉窯系青磁碗の口縁部片である。小片で、径にはやや不安が残る。胎土は灰白色で精良、釉は黄緑色でやや透明感がある。外面に片刃彫りで蓮弁文を描く。遺物包含層5層(水



第 63 図 その他の遺跡出土土器実測図 (1/3)

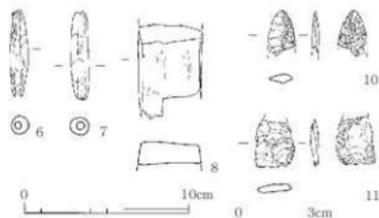
田造成盛土) 中の出土。

**縄文土器 (40)** 40は押型文土器の小片である。器種や径は不明、傾きも自信がない。遺物包含層6層の出土で、縄文時代早期か。



**遺跡出土土製品 (第64図、図版32)**

**土錘 (1~7)** 1~7はいずれも土師質の管状土錘の完形品で、指による整形、調整の痕跡が残るが、6のみは全面丁寧に面取りされる。いずれも色調は黒褐色を呈す。形状は、2がやや幅広、4・5は中位が膨らみラグビーボール状に近いが、他は筒状を呈す。1~5は長さ42cm前後、幅1.05~1.3cm。6・7は長さ5.3cmと大きい。完形のもののみ重さを記すと、孔径の小さい2が7gと重く、1は3.6g、4は5.8gをはかる。4がPit21、5・6はPit16出土で、他は5層の黒灰色土から出土した。



第64図 遺跡出土土製品・石器実測図  
(10・11は1/2、他は1/3)

**遺跡出土石器 (第64図、図版32)**

**磨製石器 (8・9)** 8は茶黄灰色を呈す頁岩製の仕上砥石で、両端と下面を欠損する。残長6.7cm。9は3.5~5mmと薄く、隅丸状に加工した板状の石材の上部に、径3mmほどの孔を穿つ有孔石製品。雲母片岩製で、装身具の可能性もある。5層黒灰色土の出土。

**打製石器 (10・11)** 10は石鏃の未成品で、漆黒の黒曜石製。残長1.9cm。11は縦長の剥片を素材とする安山岩製の石鏃で、平基で先端を欠損する。長さ1.9cm。Pit6より出土した。

## 4 小結

下伊良原羽後屋敷遺跡における調査では、土墳墓2基、土坑4基をはじめとする、主に中世の遺構・遺物が出土した。注目される成果に絞って簡単にまとめておきたい。

中世の土墳墓として1・2号の2基を示した。1号土墳墓からは龍泉窯系の青磁碗、2号土墳墓からは同安窯系の青磁碗がそれぞれ1点ずつ出土した。2号土墳墓出土資料は削平により一部が失われていたが、いずれももとは完形で副葬されたものとみられる。ともに12世紀中~後葉の指標資料とされる。

ほかに、ほぼ同形・同大の掘り込みを2基検出したが、これらからは明らかに副葬品と考えられる遺物の出土を見ず、調査時にはこれらを土坑としていた。本報でも一応調査時の理解に従って土坑としたが、形状や規模、位置や主軸方位等を総合的に勘案すれば、これらについても1・2号土墳墓と同じく中世の土墳墓である可能性が考えられよう。

伊良原地区ではほかにもいくつかの遺跡で中世の集落や墓が調査されているが、そのほとんどが12世紀代以降に位置づけられる。宇都宮氏の豊前への入植と時期的によく整合し、宇都宮氏の城井地区への入植を契機として、上流域にあたる伊良原地区の開拓が積極的に行われたことをよく示すものであろう。

## Ⅶ 下伊良原中ノ切遺跡の調査報告

### 1 遺跡の概要

**遺跡の立地環境** 下伊良原中ノ切（なかのきり）遺跡は、祇川上流域の右岸に形成された低位河岸段丘上に立地する。ダムによる水没地となつてすでに移転したかつての下伊良原東講の集落がひろがる北側の水田面に調査区が立地する。西を流れる祇川との間には幅 50m ほどの水田面が存在するが、試掘調査の結果この付近の地山には祇川の氾濫原がひろがるのがわかっている。

東側には丘陵裾部に狭い帯状に集落が営まれる。それぞれの家屋は山裾側を削り、川側に盛土をして造成段を作り出し、段部外側にはそれぞれ石垣を造成する。特に、集落の北東側にある江戸時代前期に遡るとされる旧庄屋敷白川家住宅では、高さ 5m に達する堂々とした石垣が巡らされ、中には矢痕の残る大きな花崗岩の石材も散見される（平成 25 年度に下伊良原庄屋敷遺跡として発掘調査した。未報告）。この山裾部の造成段と調査区を設定した水田との境には、幅 1.5m ほどのかつての旧道が伸びている。

**調査地点の概要** 調査地は東に行くほどに高く造成された南北に細長い数段の水田面を形成しており、旧地表高は 171.8～175.1m をはかる。調査区東側に伸びる集落の乗る造成段の標高は、調査区の旧地表高よりも 3～5m ほど高く、一方調査区西側の一段低い水田面との比高差は 1～4m ほどをはかる。なお、祇川の対岸やや南側には、本遺跡と同様に中世の集落跡と縄文時代前期・晩期の包含層が出土した下伊良原中ノ坪遺跡が、やはり低位段丘状上に立地しており、両者の関係が注目されるところである。

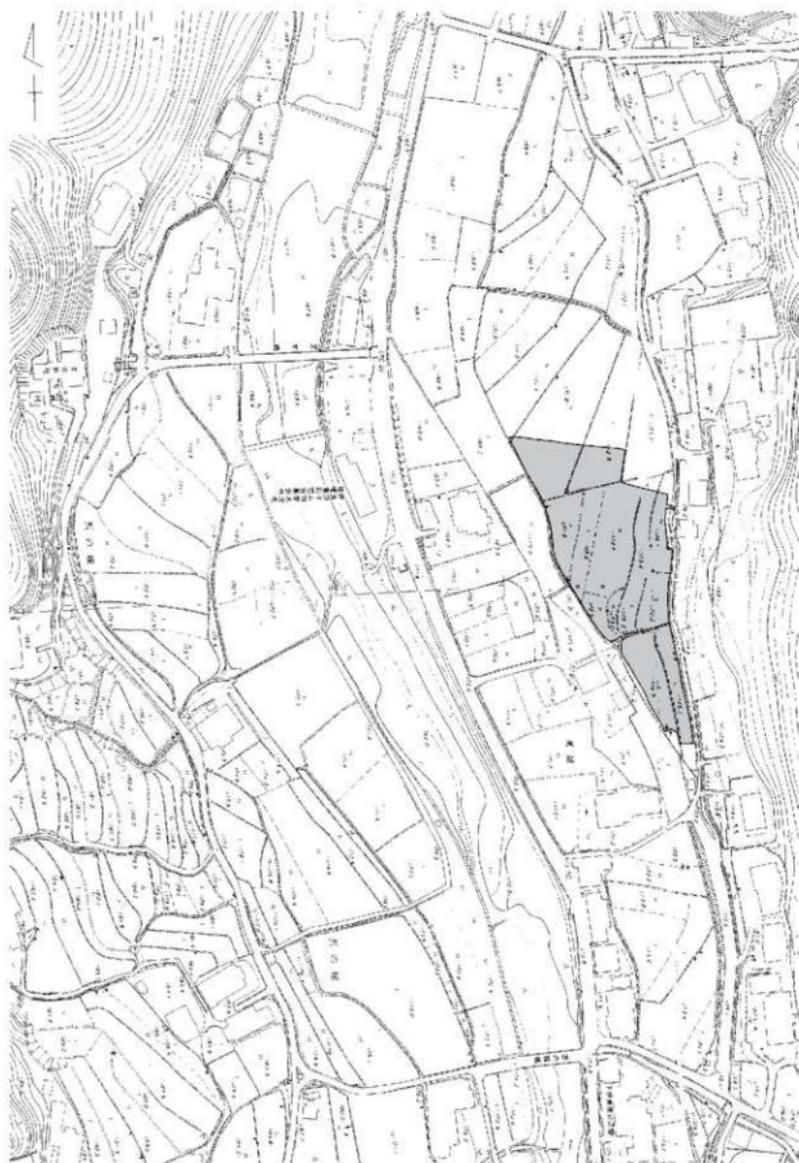
**調査の概要** 調査区の地番はみやこ町犀川下伊良原 509-1、510-1、512 番地で、調査面積は約 4,600㎡、調査期間は平成 24 年 8 月 12 日～平成 25 年 3 月 12 日で、7ヶ月の長きにわたった。検出された遺構は、近世、中世、弥生、縄文時代に属し、特に中世の掘立柱建物からなる集落跡と縄文時代前期・中期・晩期の包含層が目立つ。

### 2 調査の経過

**調査の着手まで** 伊良原ダム建設事務所と文化財保護課・九州歴史資料館との間で定期的に行われていた協議の中で、平成 21 年度頃より、東講地区の旧旧道を並行して走る工事用道路の施工について議題に上がっており、文化財部局は予定地に埋蔵文化財が包蔵されている可能性が高いことから調査の必要性を指摘してきていた。平成 22 年度に、ダム建設事務所側より、買収の終了した土地について試掘依頼があり、6 月 21～30 日に試掘調査を行ったところ、中世の遺構が広く確認された。

その後の協議においては、工事用道路の施工については議題に上がりつつもなかなか実現化しなかったが、平成 24 年度当初の協議においてようやく、平成 25 年度当初より工事用道路を施工したい旨の計画が示され、平成 24 年度中に調査を終了する必要があることが明らかとなった。これを受けて九州歴史資料館では、平成 24 年 8 月より発掘調査を開始した。

**調査の経過** 平成 24（2012）年 8 月 2 日、下伊良原中ノ切遺跡に重機を入れ、表土剥ぎを開始する。9 月 3 日、作業員を投入して人力による遺構検出を南側より開始する。



第 65 圖 下伊良原中ノ切遺跡周辺地形図 (1/2,000)

調査区の南半では、土坑や掘立柱建物跡、柵列などの遺構が次々と見つかる。9月18日、台風一過を待って掘立柱建物、土鍋を伴う土坑等の写真撮影を行う。

また、花崗岩等の大石を落とし込んだ廃棄土坑群6基が集中して見つかり、調査を行う。一部の石材には、石を割ったときの矢跡が認められる。水田面拡幅時の地業と考えられる。

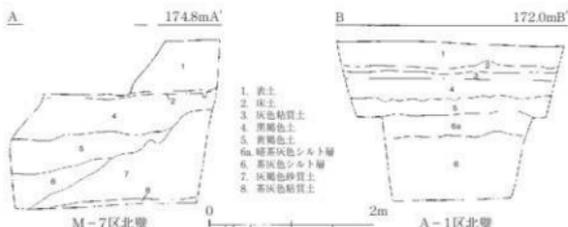
11月8日に気球を用いて空中写真の撮影を行い、その後グリッドを設定して下層の縄文時代遺構の調査に入る。12月10日、Eグリッド6層で薄手の条痕文土器出土。

年が明けて平成25(2013)年1月8日、北側の調査区にも5m方眼のグリッドを設定する。2月6日、F-7グリッドで石鏃3点が出土。2月15日よりグリッド調査で検出した下層の11~13号土坑の調査。12号土坑では阿高式土器が出土する。3月12日、合計21箇所に達したグリッド調査を終了し、重機を用いた埋め戻し作業に移る。3月15日、埋め戻しが終了し、下伊良原中ノ切遺跡の発掘調査が完全に終了した。

### 3 調査の成果

#### (1) 基本層序

遺跡北東端に設定した下層調査区M-6グリッドの南壁土層を第66図A-A'に、同じくA-1グリッド北壁土層をB-B'に示す(図版36も併せて参照されたい)。



第66図 下伊良原中ノ切遺跡基本土層図 (1/60)

A-A'断面では、東側の丘陵裾に近いために、5~7層にかけて東にのぼる傾斜が著しい。それと対照的に、B-B'断面は調査区の北西端部にあたり、遺構面が比較的平坦な場所であるため6層以上がほぼ水平に堆積する。

各層について説明する。1層は表土・水田耕作土、2層は水田床土である。3層の灰色粘質土を間層に挟み、4層は黒褐色土である。中世の遺構埋土はこの土と同質の埋土である。5層は伊良原地区で広く中世の遺構検出面を形成する鍵層となっている黄褐色土で、縄文~弥生時代の遺物包含層でもある。本調査区でも5層の上面が中世を中心とする遺構確認面となっている。これを以下では上層遺構面と呼ぶこととする。5層は東側ほど厚く、A-A'土層図では40cmほどの厚さで堆積しているのに対し、西側のB-B'土層図では20cm前後の厚さである。6a層は砂質の暗茶灰色シルト層で、遺跡の西側に堆積しており、東側に堆積する6層に比べてやや黒みが強い。6層は茶灰色シルト層で縄文土器の包含層である。調査区の西側では70cm以上と分厚く堆積するのに対し、東側では徐々に薄くなりA-A'土層図の右端で消滅している。7層は灰褐色砂質土、8層は茶灰色粘質土で、その以下は礫層となる。なお、縄文時代の調査グリッドの壁面観察により、遺物包含層である6層を細分している。詳しくは後述したい。



第 67 圖 下沙灣中/河邊新石器時代遺址 (1:300)

## (2) 上層検出の遺構と遺物

### ① 廃棄土坑

概して深さ1m以上の大きな土坑内に、しばしば矢を用いて花崗岩や暗い青灰色を呈する玢岩の巨石を分割し、落とし込んだ遺構である。遺跡の中央部東側に12基が集中して検出され、うち6基を図示した。落とし込まれた石材が最も高く突出する部分の標高は、3号廃棄土坑での174.65mであり、これは水田床土のレベルにほぼ取まる。おそらく、水田面開削時に、大きく移動することが難しい巨石の下に穴を掘って落とし込み、埋め込んだものとみられ、ほぼ同時期に調査を行っていた五ヶ山ダム建設予定地内の尼寺跡遺跡や東九州自動車道建設予定地内の塔田琵琶田遺跡などでも同様の例が認められた。土坑内から遺物がほとんど出土せず、積極的に時期を推測する資料に欠けるが、石材に掘り込まれた矢穴の大きさが近世の石垣と伝えられる下伊良原庄屋敷遺跡の石垣に見られる矢穴の大きさと共通し、層位的にも中世よりは新しいことが確実であり、おそらくは近世の遺構であろう。遺構内部からはごくわずかの遺物が出土しているが、そのうち第74図2は調査時の記載漏れでどの廃棄土坑から出土した遺物か不明である。ここで説明しておく。

#### 出土遺物 (第74図)

**土師質土器(2)** 2は土師皿である。底部は平坦で口縁部はごく短い。底部に糸切り痕が残り、他はナデ調整。中世の所産であろう。

#### 1号廃棄土坑 (第69図、図版37)

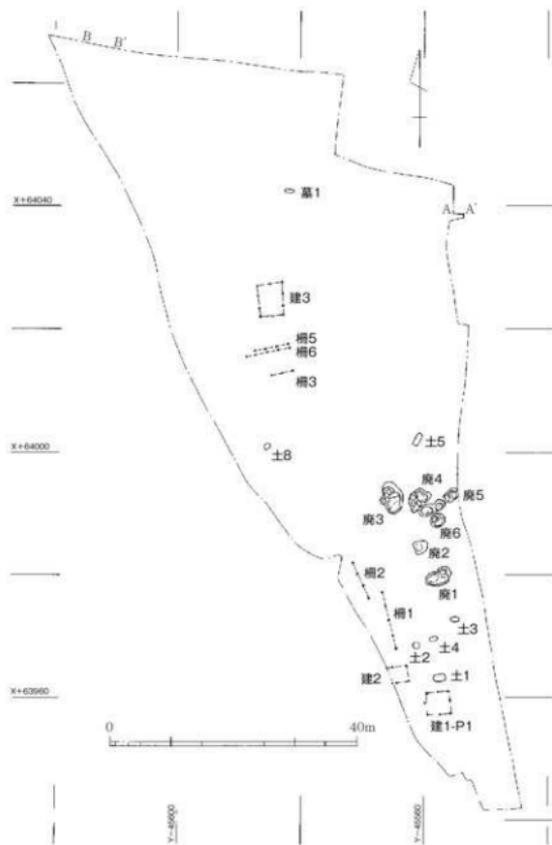
最も南側に位置する廃棄土坑で、径3mの土坑内に矢穴がある玢岩2石が残る。石材は北東部で接合する。最頂部の高さは174.65m。出土遺物はない。

#### 2号廃棄土坑 (第69図、図版37)

1号廃棄土坑の北側に位置する。4箇所の子跡を頂部に残す厚さ75cmの玢岩1石が、径1.7mの土坑内に残る。石材の最頂部の高さは174.45m。

#### 出土遺物 (第74図、図版48)

**瓦質土器(1)** 1は火鉢の口縁部片



第68図 下伊良原中ノ切遺跡上層主要遺構配置図 (1/800)

である。直線的に上に伸びる器形を持ち、口縁部は断面台形に肥厚する。肥厚部の直下に断面三角形の突帯をめぐらせる。台形肥厚部と三角突帯との間が文様帯となり、直径2mmほどの円形の刺突具で約9cm間隔に「×」印を並べる。器壁は乳白色を呈するが胎土内部は黒色を呈し、外面には被熱による剥離が認められる。中～近世の遺物である。

### 3号廃棄土坑（第69図、図版38）

南北4.7m、東西4.1mと大きな土坑内に遺された3種5石で、矢跡が残るのは2m以上の玢岩の巨石で坑内に落とされてから頂部を分割されたものであろう。他の石材は花崗岩が1石、他の2石材は不明。出土遺物はない。

### 4号廃棄土坑（第69図、図版38）

東西5m、南北3.5m、深さ80cmと大きな土坑内に7石を遺す。石材は花崗岩2石、玢岩が2石、他の3石は不明。最頂部の高さは174.25m。出土遺物はない。

### 5号廃棄土坑（第69図）

4号廃棄土坑の東に接する長辺3.1m、短辺1.9m、深さ1m以上の規模を持つ土坑である。土坑内部には花崗岩・玢岩の2石を残す。両石の頂部は、穿たれた土坑のやや上に出る程度である。出土遺物はない。

### 6号廃棄土坑（第69図、図版38）

4号廃棄土坑の南側に位置する。径2m前後の厚みの少ない玢岩をT字状の3石に分割したもので、矢穴はない。最頂部の高さは174.45m。出土遺物はない。

## ②掘立柱建物跡

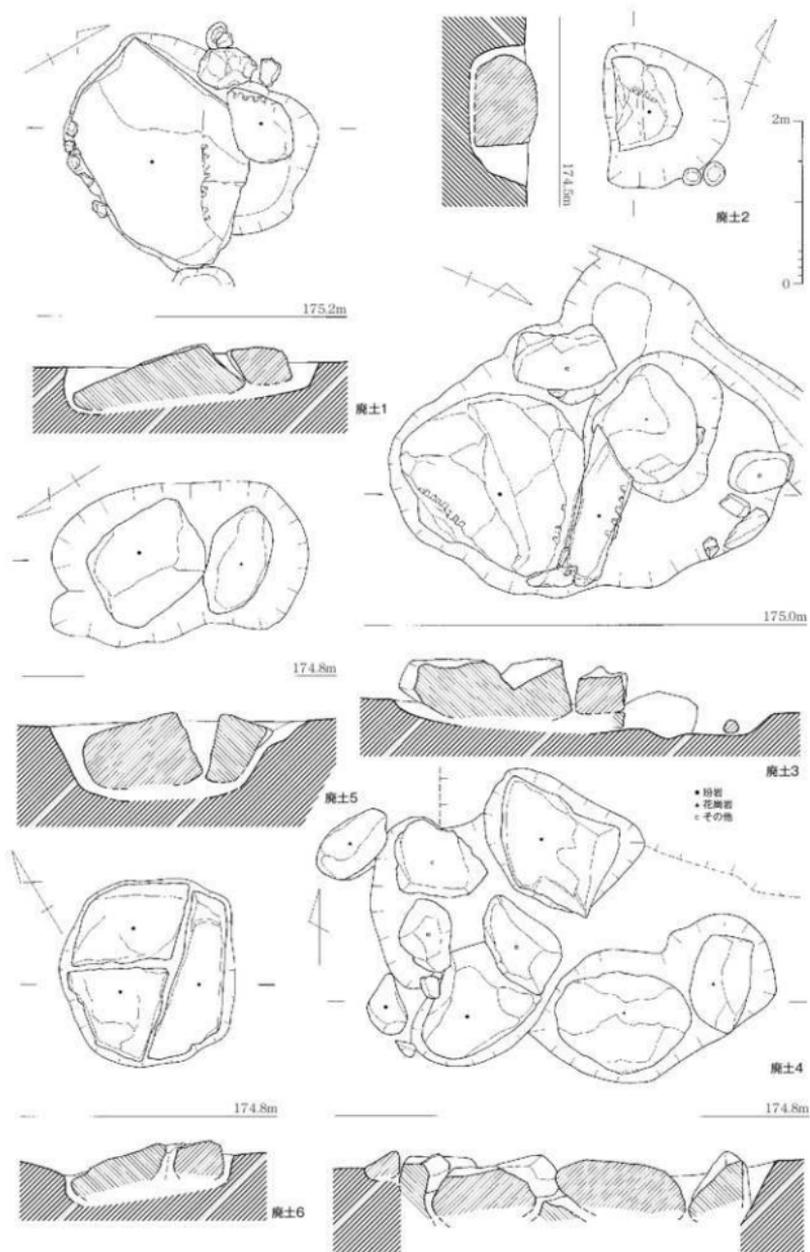
調査区内から、3棟の掘立柱建物跡が検出された。いずれも調査区の南部に偏っており、主軸方位が大略そろう。検出面や構造、出土遺物などを総合的に勘案して、いずれも中世期の所産と考えたいが、積極的な根拠には乏しい。

### 1号掘立柱建物跡（第70図、図版39）

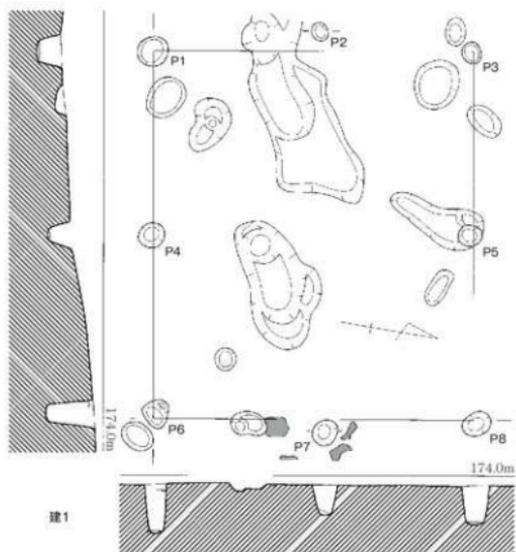
調査区の南端近くに検出された2×2間の規模を持つ掘立柱建物跡である。平面形状は比較的整った長方形で、規模はP1 - P6の桁行間が450cm、P1 - P3の梁間間が398cmを測る。各柱間の寸法は、P1 - P2間が204cm、P2 - P3間が194cm、P1 - P4間224cm、P4 - P6間が226cm、P3 - P5間が225cm、P5 - P6間225cmをはかる。柱の深さは、P1が30cmをはかるのに対し、P6は60cmを測り、まちまちである。床面積は17.9㎡を占める。出土遺物から中世期の所産か。

#### 出土遺物（第74図）

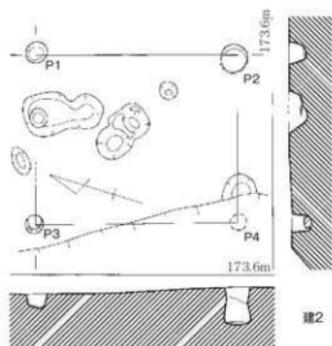
土師質土器（3） 3は小皿の口縁部片である。わずかに内湾しながら横に伸び、口縁端部を丸く収める。器壁調整は内・外面ともにナデ。中世の所産であろう。P9出土。



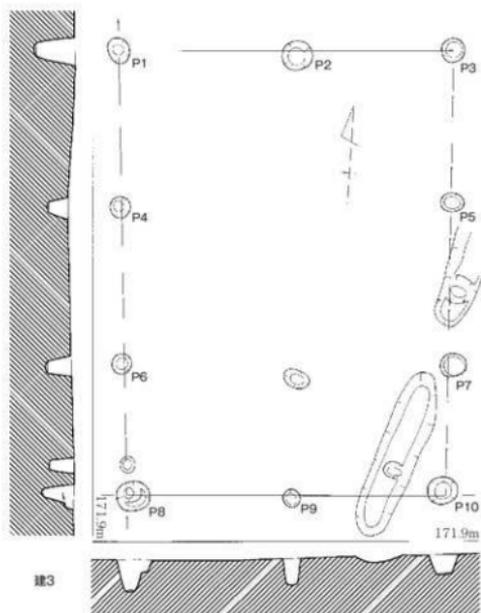
第 69 図 1～6号廃棄土坑実測図 (1/60)



建1



建2



建3

第70图 1~3号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

## 2号掘立柱建物跡（第70図）

1号建物跡の北西側で検出された掘立柱建物跡である。規模は南北が1間で、東西は西側が調査区外に伸びる可能性もあり本来の長さは不明であるが、残存部分では1間が認められる。これも比較的整った形状をもち、柱間距離はP1 - P2間が226cm、P1 - P3間が206cmを測る。出土遺物はないが、1号建物と主軸方位がおおよそそろい、同時併存が可能な位置関係にあることから、同時期か、少なくとも近い時期の所産と考えたい。

## 3号掘立柱建物跡（第70図、図版39）

調査区の中央やや北寄りで見出された、3間×2間の南北棟である。規模は、桁行間が554cm、梁間間はP1 - P3で408cm、P8 - P10で388cmを測り、ややゆがみがある建物である。各柱間の寸法は、P1 - P2間が218cm、P2 - P3間が190cm、P1 - P4間が188cm、P4 - P6間が196cm、P6 - P8間が160cm、P3 - P5間が188cm、P5 - P7間が200cm、P7 - P10間が160cm、P8 - P9間が200cm、P9 - P10間が188cmを測る。柱穴の深さは20～50cmでばらつきが大きい。床面積は約22.6㎡をはかる。出土遺物がないが、ほかの中世遺構と埋土が共通しており近い時期の所産であろう。

## ③柵列

調査区の南側、西側の調査区端部に、南北方向に伸びる2条の柵列が検出された。また、中央やや西寄りの3号建物跡の南側に、東西方向に併行して伸びる3条の柵列が検出された。いずれも、微妙に近くの建物跡と軸がずれるようだが、埋土は共通しておりおおよそ同じ時期すなわち中世期の所産と考えられる。

## 1号柵列（第71図、図版39）

2号建物の北側に検出された。主軸をN - 16° - Wにとり、大略南北方向に伸びる柵列で、4間分が確認された。全長は10.02mをはかる。柱穴の径はいずれも20cm程度と小さく、残存深さは22～36cmをはかる。各柱間の寸法は、P1 - P2間が260cm、P2 - P3間が236cm、P3 - P4間が246cm、P4 - P5間が260cmを測る。出土遺物はない。

## 2号柵列（第71図、図版39）

1号柵列の西にあり、これとはほぼ並行して南北に伸びる柵列である。主軸方位はN - 15° - Wにとり、柱間は3間分が検出された。柱穴は直径30cm前後とやや大きく、深さは48～62cmと、本調査区内から検出された柵列の中では最もしっかりしており、建物跡の可能性もあると考えて精査したが、対応する柱穴は確認できなかった。あるいは西側の調査区外に存在する可能性もあるが、ここでは一応柵列として報告しておく。1号柵列とセットとなる建物跡の可能性も大いにあるといえよう。

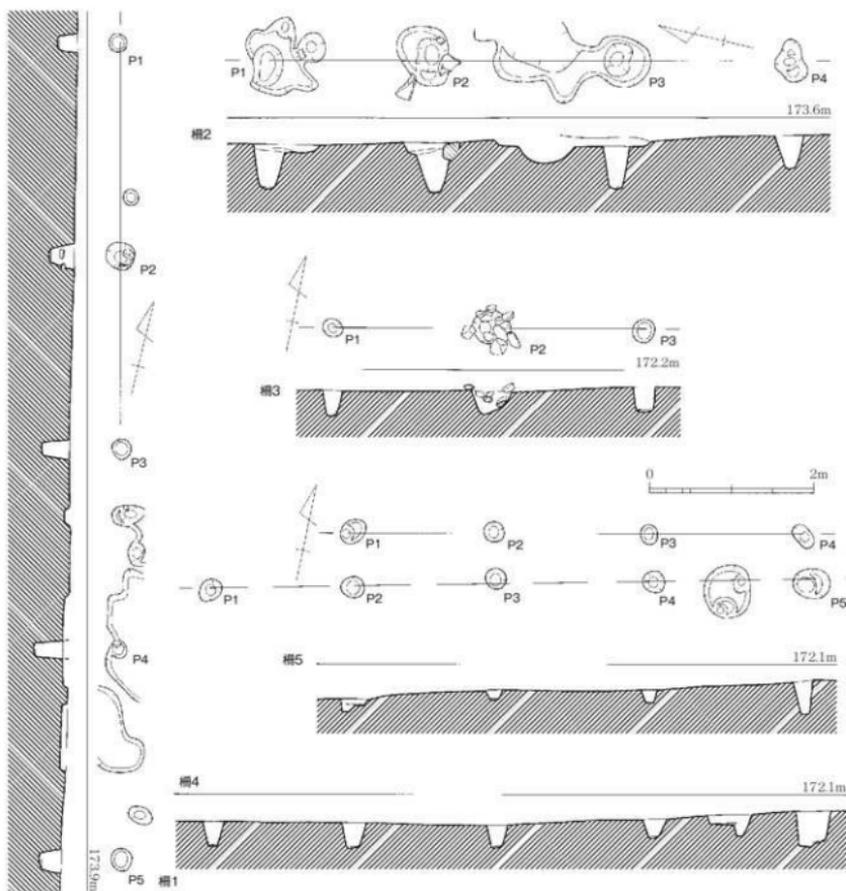
検出全長は6.3mを測る。各柱間の寸法は、P1 - P2間が200cm、P2 - P3間が230cm、P3 - P4間が210cmを測る。図示できるほどの大きさではなかったが、P1・2から糸切り底部をもつ土師質小皿の小片が出土しており、中世期の所産と考えられる。

### 3号柵列 (第71図、図版40)

調査区の中央やや北寄りで検出された東西方向に伸びる3条の柵列のうち、一番南側にある、柱間2間と最も短い柵列である。主軸方位はN-77°-Eをとる。柱間距離は、P1-P2間が183cm、P2-P3間196cmで、検出全長は382cmを測る。柱穴P2は川原石が周囲を覆う。遺物は出土していない。

### 4号柵列 (第71図、図版40)

5号柵列の北に隣接し、これと等しく60cmの間隔を開けて並行する、柱間4間の柵列である。5号柵列より西側に柱間が1間長くのびる。主軸をN-76°-Eにとり、全長は736cmをはかる。各柱間の寸法は、P1-P2間が174cm、P2-P3間が174cm、P3-P4間が192cm、P4-P5間が186



第71図 1～5号柵列実測図 (1/60)

cmをはかる。遺物は出土していない。

#### 5号柵列（第71図、図版40）

4号柵列の北に並行して伸びる、3間分の長さを持つ柵列。主軸方位をN-78°-Eにとり、全長は5.6mが確認されている。柱穴は径20～30cmと小さく、深さもP4を除くと10cm前後ときわめて浅い。各柱間の寸法は、P1-P2間が180cm、P2-P3間が190cm、P3-P4間が190cmを測る。出土遺物はない。

#### ④土坑

調査区の南側、廃棄土坑群と1・2号建物跡とに挟まれた場所に、1～4号の4基が集中して分布しており、また調査区のほぼ中央で東西に別れて各1基ずつ（東側に5号、西側に8号）、合計6基の土坑が検出された。なお、6・7、9～13号土坑は下層の遺構面を調査中に検出しているため、下層遺構の項で報告するので注意されたい。

#### 1号土坑（第72図、図版40）

調査区の南側で、1号建物跡の北に接して検出された。北側に底面より一段高いテラスを持ち、主軸を東西方向にとる。細長い隅丸長方形の土坑で、規模は東西2.1m、南北1.5mを測る。床面はやや東に高い。床面から5cmほど浮いた状態で、土鍋が東西に割れて出土した。出土遺物から中世期の所産と考えられる。

#### 出土遺物（第74図）

土師質土器（7） 7は土鍋である。胴上半以上が残る。胴部はわずかに内湾しながら斜め上方に伸びる。頸部は明瞭に屈曲し、外面に断面三角形の低い突帯を1条めぐらせる。口縁部は直線的に開き、端部をやや肥厚させる。中世期の所産であろう。

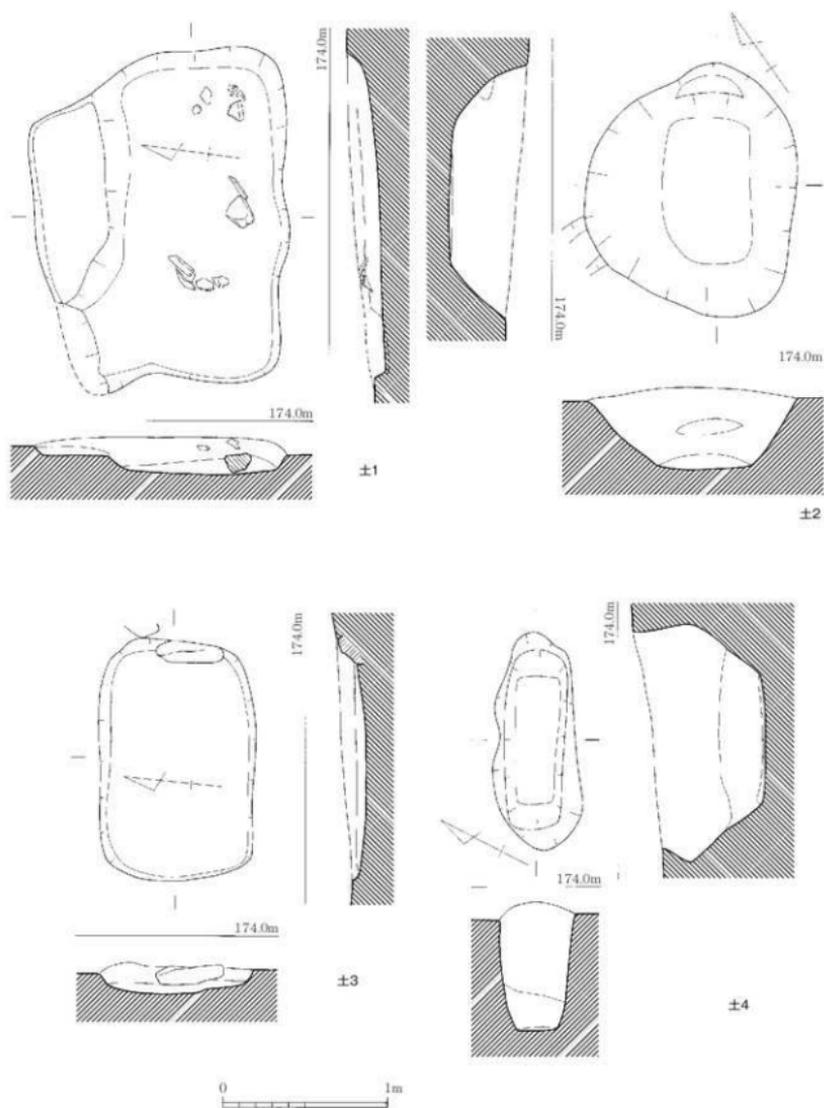
#### 2号土坑（第72図）

1号柵列南端部からやや東側にいったところに位置する土坑である。平面形状は、検出面では不整円形だが、床面は長円形を呈し、壁面は緩やかに底面に移行する。北側の中位に小さなテラス面を持つ。規模は南北が155cm、東西が127cmをはかり、残存深さは最大42cmである。埋土は暗灰褐色土で、埋土中の上位から土鍋・瓦器碗などが出土した。このうち土鍋1点を図示する。中世期の所産であろう。

#### 出土遺物（第74図）

瓦質土器（9） 9は瓦器碗の口縁部片である。やや内湾しながら斜め上方に立ち上がり、口縁部をごくわずかに肥厚させる。端部は丸く収める。内・外面に横方向のヘラミガキを施す。小片で径は不明。

土師質土器（8） 8は土鍋である。頸～口縁部が残り、小片で直径や傾きにやや不安が残る。胴上位はほぼ直立し、頸部でわずかに屈曲して、口縁部は短く外に開きわずかに内湾する。直径は約42cmをはかり大型品である。



第 72 图 1~4 号土坑实测图 (1/30)

### 3号土坑（第72図、図版40）

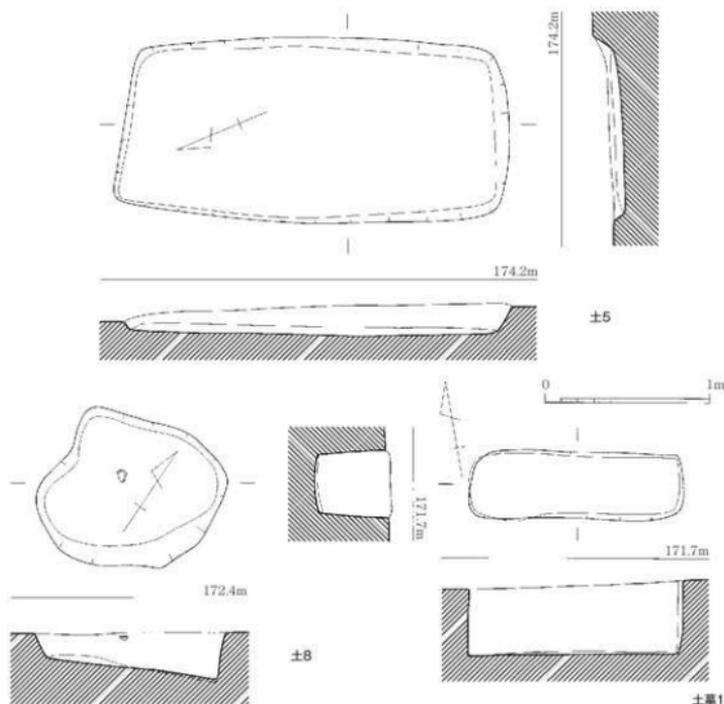
調査区南側の東端部付近で検出した土坑である。平面形状は隅丸長方形を呈し残存深さは浅い。床面は中央部でやや深くなり、東側の壁は長円形の石材をもって充てる。おそらく地山中の転石にあたって止めたものであろう。規模は、東西が150cm、南北が0.95cmをはかり、残存深さは15cmを測る。遺物はないが、埋土から中世の所産と考えられる。

### 4号土坑（第72図、図版41）

2号・3号土坑の間に位置する。平面形状は長円形を呈し、上辺から中位にかけては袋状に広がり、その下はすぼまりながら長方形の床面へ移行する。規模は検出面で長辺133cm、短辺53cmを測り、残存深さは80cmとかなり深い。平面形状からすると墓の可能性はあるが、袋状の断面や、深さから、ここでは土坑として報告する。埋土は茶褐色土で、出土遺物はなく時期は不明である。

### 5号土坑（第73図、図版41）

調査区の中央部東側に単独で検出された遺構である。平面形状は隅丸長方形形状を呈し、規模は長辺2.3m、短辺1.1mをはかる。残存深さは5～15cmと極めて浅い。床面はほぼ平坦であり、墓坑



第73図 5・8号土坑、1号土墳墓実測図（1/30）

の可能性もある。埋土は暗黄褐色土で、出土遺物はなく時期は不明である。

#### 8号土坑（第73図、図版41）

中央部西側に位置する不整形の土坑で、長径1.13m、短径0.97mの規模を持つ。壁面は垂直に掘り込まれ、床面は東側に向かって深くなっていて、最深部で30cmを測る。埋土は黒灰色土で、中央上部から糸切り土師器小皿、土鍋片が出土した。出土遺物と埋土から中世の所産と考えられる。

#### 出土遺物（第74図、図版48）

**土師質土器（10）** 10は土師皿である。底部は平坦で底面に糸切り痕跡を残す。体部はわずかに内湾しながら横に伸びる。口径8.4cmほどの小形品で残りがよい。中世期の所産か。

#### ⑤土墳墓

形状や遺物の出土状況などから土墳墓の可能性が高いと判断された1基を、土墳墓として報告する。なお、土坑として報告するうち、4・5号土坑も、土墳墓である可能性がある。留意されたい。

#### 1号土墳墓（第73図、図版42）

遺構の密度が希薄な調査区北側に単独で位置する。平面形態は長方形で、主軸をN-78°-Wにとり、各壁とも垂直に近く掘り込まれており、深さは45cmほどをはかり、床面は平坦で若干西に下がる。墓壙の北側上部から、釘状の小鉄器1点出土しており、木棺を納めた可能性もある。黒灰色土の埋土からは青磁片、糸切り土師器小皿・坏が出土した。出土遺物などから中世の遺構と判断される。

#### 出土遺物（第74図）

**陶磁器（4）** 4は青磁碗の口縁部片である。体部から口縁部にかけてほぼ直線的に斜め上方に伸び、口縁端部は細く仕上げる。外面には鎬連弁文を施す。軸は灰緑色で貫入は認められない。中世期の遺物である。

**土師質土器（5・6）** 5・6はいずれも土師皿の小片である。ともに底部に糸切り痕跡を残す。5のみ口径が判明し7.4cmをはかる。中世期の所産であろう。

#### ⑥上層遺構面の柱穴出土遺物

上記に報告した遺構のほかに、上層遺構面からは多数のピットが検出された。平面形態が円形で、本来は何らかの構造物の柱穴であったとみられるものも多いが、不定形でアメーバ状を呈するものもあり、これらを一括してピットとしている。これらのピットのいくつかからは、遺物が出土している。ここではそれらの遺物について紹介する。

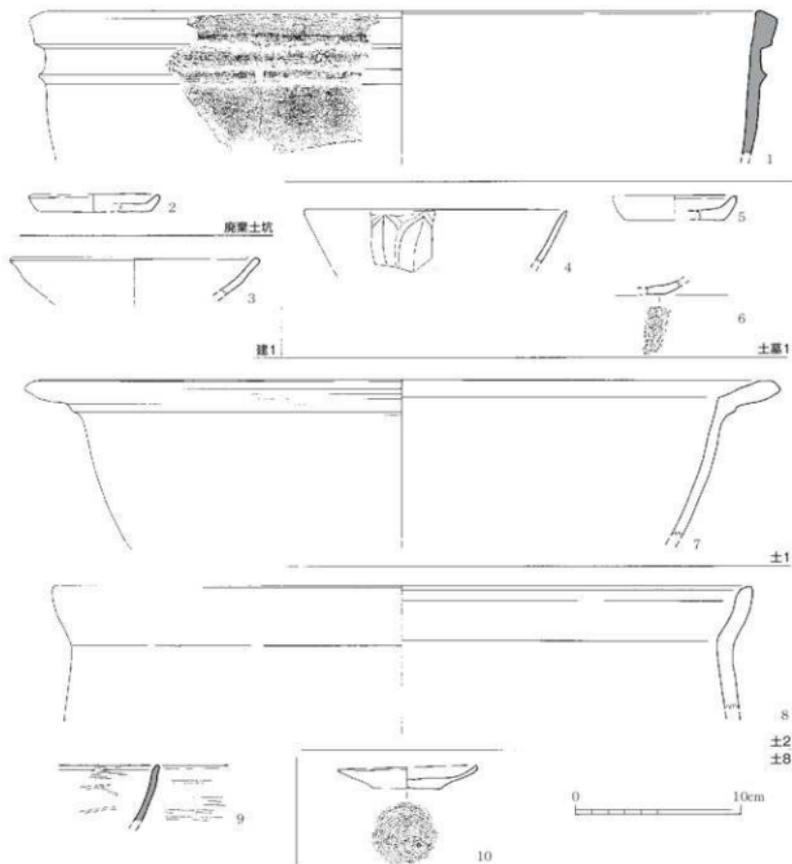
#### 出土土器（第75図、図版48）

**縄文土器（13・19・20）** 13は刻目突帯文を口縁部下にめぐらせる甕の口縁部片である。内面は丁寧な横ナデ、外面には条痕が残る。晩期の所産であろう。P52出土。19・20は黒色磨研土器の浅鉢の口縁部片か。ともに内・外面後～晩期の所産。P88出土。いずれもごく小片で、直径は復元できず、傾きにも自信はない。

**弥生土器（15）** 15は板付式の鉢形土器の口縁部片である。体部は内湾しながら斜めに伸び、口縁

部は如意状に外反する。口縁端部は丸く取め刻目はみられない。調整は外面がハケ目、内面はナデ。形状から、弥生時代前期後半～末に位置づけられよう。Pit56 出土。

**土師質土器** (1～3・5～8・10～12・17・18) 1は碗形土器の口縁部片である。内湾しながら立ち上がり口縁部をわずかに外半させる。端部は丸く取める。内・外面ともにヘラミガキで仕上げる。Pit4 出土。5も同じく碗形土器の、底部片である。断面三角形の低い高台を付す。Pit13 出土。3・7・8は皿の口縁部片か。いずれも器形が似通っていて、ゆるやかに内湾しながら広がり、口縁端部は丸く取める。口径は17cm前後で法量も近似する。調整は内・外面ともにナデ。3はPit14、7はPit22、8はPit25 出土。2も同じく皿の、底部片である。底部は平坦で外面に糸切り痕跡が残る。体部は斜めにひろがる。Pit9 出土。6は小皿である。平坦な底部の外面には糸切り痕が明瞭に残り、体部はごく短い。Pit17 出土。10・11・18は鍋の口縁部片である。18のみ体部上半が残り、直線的に

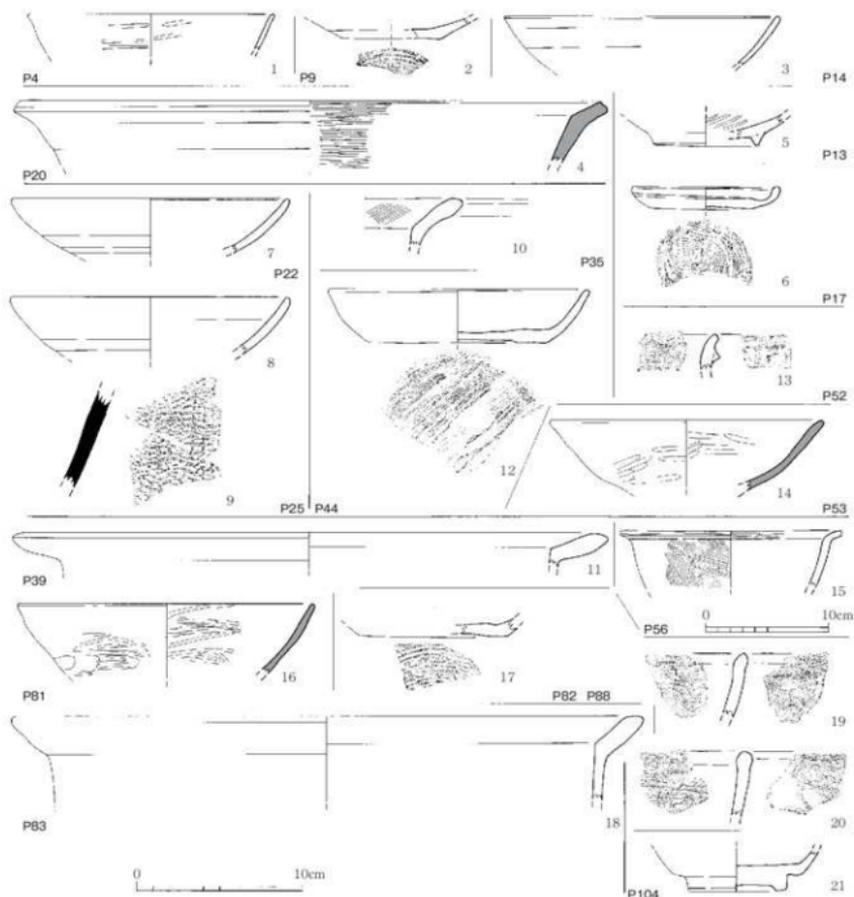


第74図 上層各遺構出土土器実測図 (1/3)

上方に立ち上がる。いずれも口縁部がよく似た形状をしていて、頸部が「く」の時に明瞭に屈曲して短く外に伸び、端部付近を飛行させ、端部を三角形に処理する。10はPit35出土、11はPit39出土、18はPit83出土。12・17は坏であろう。12はほぼ全形がわかる資料で、平坦な底部と短く直線的に伸びる大部を持つ。底部外面には糸切り痕が残リ、その上から（意図的なものか不明だが）板圧痕が付けられている。17は底部のみが残る資料で、外面に糸切り痕が残る。12はPit44出土、17はPit82出土。いずれも中世の資料か。

須恵質土器（9）9は大甕の胴部片であろう。胎土は良質で焼成は良好で硬質である。外面にタタキ痕跡がよく残り、内面はナデ仕上げ。Pit25出土。中世の資料か。

瓦質土器（4・14・16）4は鍋の口縁部片であろうか。体部は直線的に開き、口縁部は屈曲して短く開く。内面を丁寧なミガキ調整で仕上げ、外面はナデ。外面の器壁にはコゲ状の黑色炭化物が分厚



第75図 上層検出Pit群出土土器実測図（15は1/4、他は1/3）

く付着している。Pit20 出土。14・16 は瓦器碗の口縁部片である。ともに、ゆるやかに湾曲しながら斜めにひろがる体部と、ごくわずかに外反する口縁部をもち、内・外面を丁寧なミガキにより仕上げる。16 の体部外面下半には粘土帯接合部をユビオサエ調整により接合したとみられる痕跡がヘラミガキの下に残る。14 は Pit53 出土、16 は Pit81 出土。いずれも中世の資料であろう。

**陶磁器 (21)** 21 は青磁碗の底部片である。胎土は灰色を呈し非常に精良、釉は透明感のある灰緑色で貫入がみられる。高台外面は露胎である。Pit104 出土。12 世紀代の資料であろう。

このほか、第 85 図 3 の板状滑石片が Pit84 から、4 の石鍋片が Pit90 から出土している。

### (3) 下層検出の遺構と遺物

#### ① 調査区の設定と調査成果の概要

上層の遺構検出面である 5 層の黄褐色土から、縄文・弥生時代の遺物が出土した。5 層で検出した遺構は中世以降のものであることから、下層に縄文・弥生時代の遺構面が存在する可能性が想定された。これをうけて、下層の状況を把握するための調査を行うこととした。調査区の中央から南側では比較的遺物の出土量が少ない状況であり、これを受けて調査区を大きく北半分と南半分に分けた。南半分については、5 層中に土器が包含されている付近を中心に A～E の 5 つの試掘グリッドを設定し、土器の包蔵状況と下層遺構面の確認をした。また、5 層の堆積が特に薄くなっていた調査区南西部については、部分的に人力で表土剥ぎを行い、1 号堅穴状遺構と 6・7・10 号土坑をまともって検出している。

一方、北半部については 5 層中からの土器の出土量が比較的多かったため、5m グリッドを設定して千鳥格子状に 5 層の掘り下げを行った。掘り下げたグリッドは計 21 箇所及び、下層から 11～13 号の 3 基の土坑を検出した。

調査区西側は段落ち状になっていて、下層の 6 層が露出していたが、中央部付近で遺構が検出されたため、これを 9 号土坑として掘り下げた。この土坑については上層の遺構か下層の遺構か判断に迷う部分があったが、上層の調査中には気づかなかったため下層遺構として扱い、以下で報告することとした。

#### ② 南側試掘グリッド A～E 区の調査

調査区南半では上記の通り A～E 区の五箇所を試掘グリッドを設定した (第 67 図)。順に概要を見ていく。

調査区の南側には、東西 3～7m、南北 8m の台形状に A グリッドを設定し、6 層まで掘り下げた。その結果、石鏃 2 点と石斧の出土を見たが、土器はほとんど見られなかった。

調査区の中央東側には東西 8m、南北 4m の長方形に B グリッドを設定し、やはり 6 層まで掘り下げたところ、表裏ともに条痕で調整された土器が出土した。

調査区の中央西端では C グリッドを設定し、やはり 6 層まで掘り下げたところ、5 層中から縄文時代後期の土器が少量出土した。

C グリッドの北には東西 7m、南北 4m の長方形に D グリッドを設定し、6 層まで掘り下げたところ土器が若干出土した。

E グリッドは調査区中央部に設定したが、6 層より貝殻刺突文土器が出土した。

また、E区の南側では晩期土器のまとまった出土をみたので、全体を掘り下げ、6層の上面で堅穴や土坑4基を検出した。

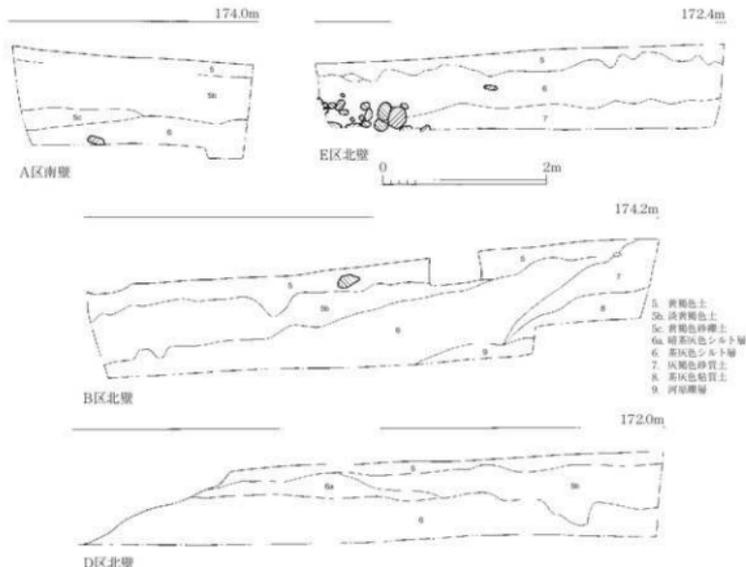
第76図に、Aグリッド南壁、Bグリッド北壁、Dグリッド北壁、Eグリッド北壁の土層堆積状況を示す。第66図の基本土層図と対比すると、やや異なる土層堆積が観察される部分があるので注意されたい。Aグリッドでは、5層の黄褐色土の下に境界が不明瞭な5b層（淡黄褐色土で部分的に細かい砂礫層を挟む）、5c層（黄褐色砂礫土）層が見られ、5b層はB・Dグリッドでも観察される。縄文土器を包含する5・6層は安定した堆積状態を示すが、遺跡の南半では遺物量が極めて少ない特徴がある。

### ③北側調査グリッドの調査

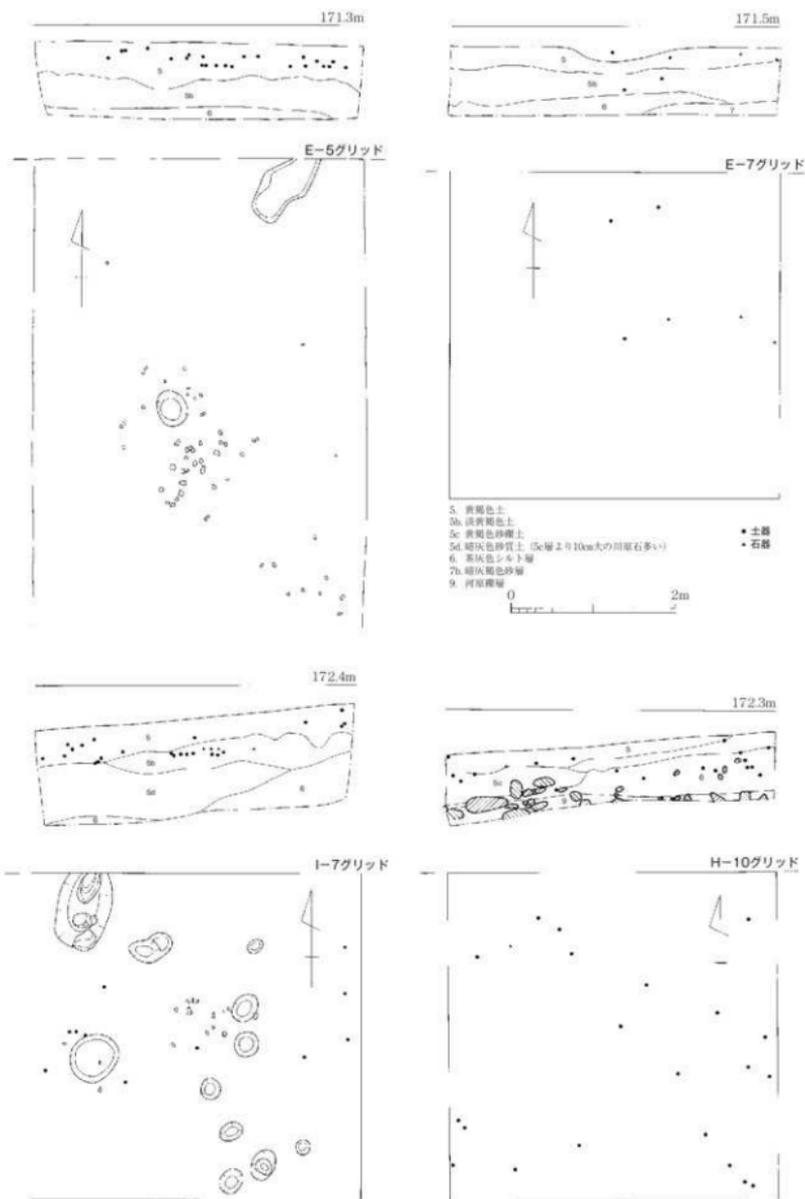
一方、調査区中央～北側については5m方眼でグリッドを設定し、任意のグリッドについてその中の4×4mの範囲を掘り下げた。調査したグリッドは、A-4、B-4・5、D-7・8、E-5・6・7・9、F-6・8・10、G-7・9、H-6・8・10・11、I-7・9・11の合計21グリッドである。F-8グリッドで縄文時代早期に属する11号土坑を、I-7グリッドで同じく中期に属する12号土坑を、H-6グリッドで同じく前期の13号土坑を検出した。

比較的遺物の出土量の多いE-5・6、7グリッド、I-7グリッド、H-10グリッドについて、遺物の平面・垂直分布図を示した（第77図）。

E-5・6グリッドでは5層上部の直径2mほどの狭い範囲に破砕された土器片が集中して出土する以外は、下層5b層・6層ともに遺物の出土を見ない。



第76図 下層グリッドA・B・D・E区土層図 (1/60)



第77図 下層グリッドE-5・6、E-7、H-10、I-7区遺物出土状況 (1/60)

E-7グリッドは、5層から3点の石鏃がまとめて出土したが、やはり5b層、6層には遺物の出土を見ない。

I-7グリッドでは5層から掘り込んだピットが多数検出され、5層の西寄りと5b層中央に遺物の集中箇所が見られる。5c層（暗灰色砂質土）、6層では土器は出土しない。なお、5層からは晩期の土器が出土している。5b層の遺物集中部は12号土坑出土の縄文土器である。

H-10グリッドでは5層から6層にかけて、グリッド全面に遺物が散在する状況が見られる。6層下部に9層の礫層があらわれる。

以上の調査結果より、グリッド内の遺物出土状況は、狭い範囲に1ないし数個体の土器（片）が集中するか、あるいは薄く散在しないしはほとんど出土しないかの両極端であった。

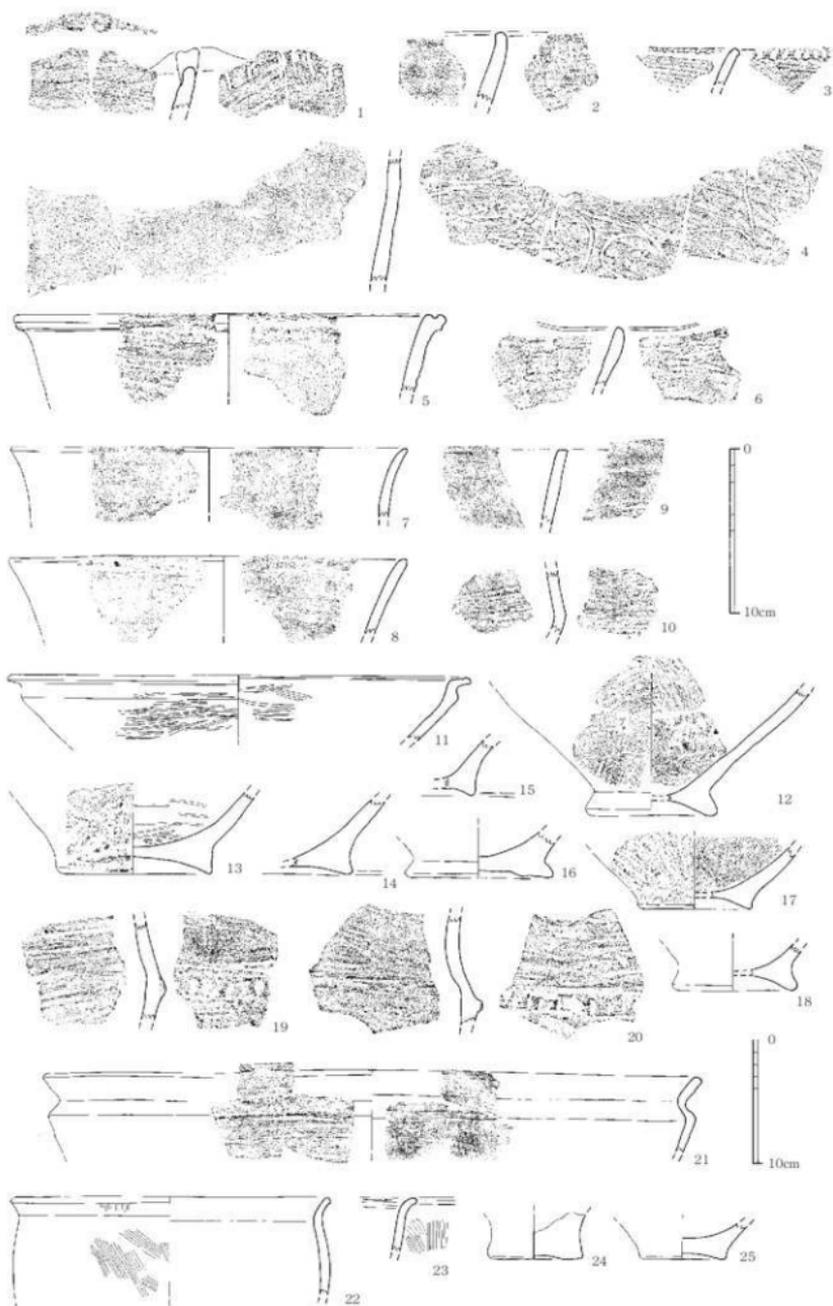
#### ④包含層出土遺物

上記で報告した南側試掘グリッドA～E・北側調査グリッド計19箇所のそれぞれについて、遺物包含層である5-6層の掘り下げ中に出土した、遺構に伴わない遺物について、以下に説明する。説明にあたっては、出土層位ごとに行い、出土地点については時期ごとに明確な偏りがある場合を除き特に明記しない。

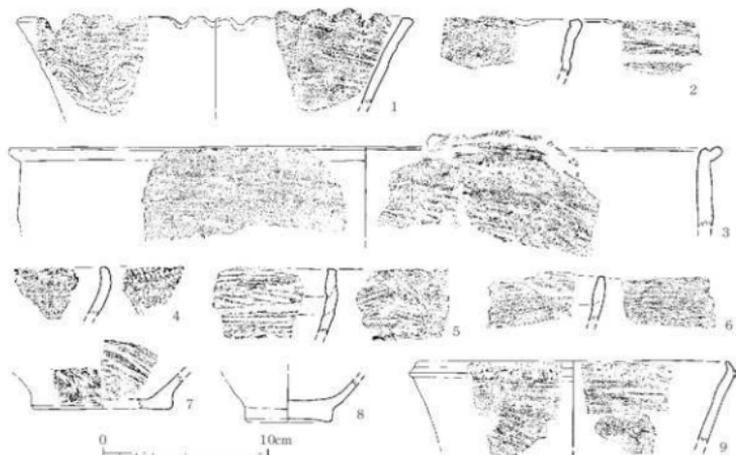
#### 5層出土遺物（第78図、図版48）

**縄文土器**（1～21）1・2は深鉢の口縁部片で、口縁部外面に短斜線文を一周させるものである。ともに内・外面に貝殻条痕がよく残る。1は口縁に突起を有する。いずれも阿高式系（南福寺式）であろう。3は浅鉢の口縁部片であろうか。器壁が薄く小形品であろうが径は復元できない。口縁部上面に列点文を施す。器壁調整は内・外面ともに条痕。4は深鉢の胴部片で外面に細線文で文様を描くが、破片資料で文様の全体像は不明。以上は後期初頭に属するか。5は口縁部を肥厚させ端部正面に沈線をめぐらせる深鉢である。内・外面に条痕がよく残る。擦消縄文土器系の資料か。6～9は深鉢の口縁部片である。6は端部をわずかに内湾させ、肥厚させる。内・外面に条痕がよく残る。7～9はわずかに外湾しながら斜め上方に伸びるもので、器壁調整はいずれも貝殻条痕のちナデ。10は深鉢の胴部屈曲部片であろう。やはり内・外面に条痕のちナデ調整。11は浅鉢の口縁部片である。体部は斜め上方に開き、一度内側に折れたあと直角に開いて口縁部正面を水平に伸ばす。天城式の資料か。12～18は鉢の底部片である。いずれも程度の差はあるが底部外端が外に踏ん張り底面は上げ底状を呈する。器壁調整は外面に貝殻条痕が残り、内面はナデまたはミガキにより仕上げる資料が多い。いずれも後期の資料か。19・20は刻目突帯文を持つ晩期の屈曲甕で胴部屈曲部の資料である。ともに内・外面ともに貝殻条痕をよく残し、突帯はやや低く、刻目は大きい。21は浅鉢の胴上半～口縁部片である。胴部は斜めに開き、一度内側に屈曲して再び「く」の字に開き口縁部にいたる。内・外面を丁寧にミガキ黒色に仕上げる。晩期前半黒川式の資料である。

**弥生土器**（22～25）22・23は甕の口縁部片である。いずれも、如意状に外反して端部に刻目を伴わない。器壁調整は外面がハケ目、内面がナデ。前期後半板付Ⅱ式の資料である。24・25は底部片である。形状から、24は甕、25は壺であろうか。24はやや厚底状の上げ底、25は底部がややうすい上げ底で、前期末～中期前半の資料か。これら4点のうち23を除く3点はいずれも南側試掘グリッドB区から出土している。



第78図 5層出土土器実測図 (20~24は1/4、他は1/3)



第79図 6層出土土器実測図 (1/3)

#### 6層出土遺物 (第79図、図版48)

**縄文土器 (1～9)** 1・2は波状口縁の深鉢の口縁部片である。1は直線的に、2はやや外湾しながら開き、口縁端部をわずかに肥厚させる。器壁調整は内・外面ともにナデで、1は外面に櫛状工具で波状文を描く。西和田式か。3も深鉢の口縁部片か。胴部より垂直に伸びて口縁部にいたる。口縁端部を外側に突き出させ、上面に沈線をめぐらせる。器壁調整は外面が貝殻条痕のちナデ、内面がへら状工具を用いたナデ。擦消縄文土器か。4は浅鉢の口縁部片か。内湾しながら立ち上がり口縁端部にいたる。外面に縄文を施す。5・6は鉢の口縁部片で、いずれも口唇部内面に粘土紐を貼り付けて肥厚させるものである。器壁調整は内・外面ともに貝殻条痕。7・8は鉢の底部片である。7はやや径が大きくわずかに上げ底になるか。器壁調整は7が内・外面ともに貝殻条痕、8の外面が貝殻条痕、内面がナデ。やや古い資料か。9は鉢の口縁部片である。わずかに外湾しながら斜めに立ち上がり、口縁端部を尖らせつつ内に折り曲げる。口縁部直下の外面に断面三角形の刻目突帯をめぐらせる。晩期か。

#### ⑤下層検出遺構

下層の調査においては、北部の各調査グリッドや南部の各試掘グリッドにおいて、5層中から6層下面にかけて、いくつかの土坑やピットを検出した。各遺構の検出層位については調査時に明確な記述があるものについては報文中で述べるが、これはあくまで存在に気がついた時点での層位であり、実際に遺構がそれぞれの検出層位に属するという意味ではない。これは、調査時に層界を明瞭に把握することが難しかったためと考えられ、やむを得ないものとご理解いただきたい。また、これらとは別に、調査区の南端部において浅く堆積していた5層を削り、竪穴状遺構1基と土坑3基を検出している。以下、これらの遺構について説明したい。

### 1号堅穴状遺構（第80図、図版45）

遺跡の南西部で晩期土器がまとまって出土したため5層包含層を掘り下げ、6層上面でいくつかの遺構を検出した。このうち、堅穴状遺構方形プランを志向しながらも不定形で性格の不明な遺構を、堅穴状遺構として報告する。堅穴状遺構は1基検出されており、これを1号堅穴状遺構とする。

平面形状は一見して堅穴住居跡を彷彿とさせるが、炉跡は認められない。規模は長辺4.5m、短辺は2.6mをはかるが、南西壁が削平されていて本来の短辺の規模は不明である。東壁は垂直に近く50cmほど立ち上がり、床面は平坦である。堅穴内には壁に沿って深さ30cmほどの7本の柱穴が巡るが、間隔・配列ともに不規則で、断面に図示した2本の柱穴以外は主柱穴とは評価しがたい。遺構の内部からは縄文時代後～晩期の土器が出土しており、この時期の遺構であろう。

#### 出土遺物（第82図）

**縄文土器** (1) 1は深鉢の胴部片か。小片で径は復元できず傾きも自信がない。器壁は暗褐色を呈し、内面はヘラミガキ、外面は貝殻条痕の上からナデ調整を施す。後～晩期の資料か。

### 6号土坑（第80図、図版45）

1号堅穴状遺構の北側に位置する土坑である。1号堅穴状遺構と同様に、遺物を多く含んでいた5層を掘り下げた段階で検出した。規模は長辺3.4m、短辺2.1m、深さ40cmを測り、平面形状は不整長方形で、床面はほぼ平坦である。床面内からは3本のピットが南北に別れて検出されたが、遺構に伴うものかどうかは不明である。埋土は茶褐色土で、その上部から縄文時代晩期に属する深鉢などが出土した。出土遺物から、縄文時代晩期の遺構であろう。

#### 出土遺物（第82図）

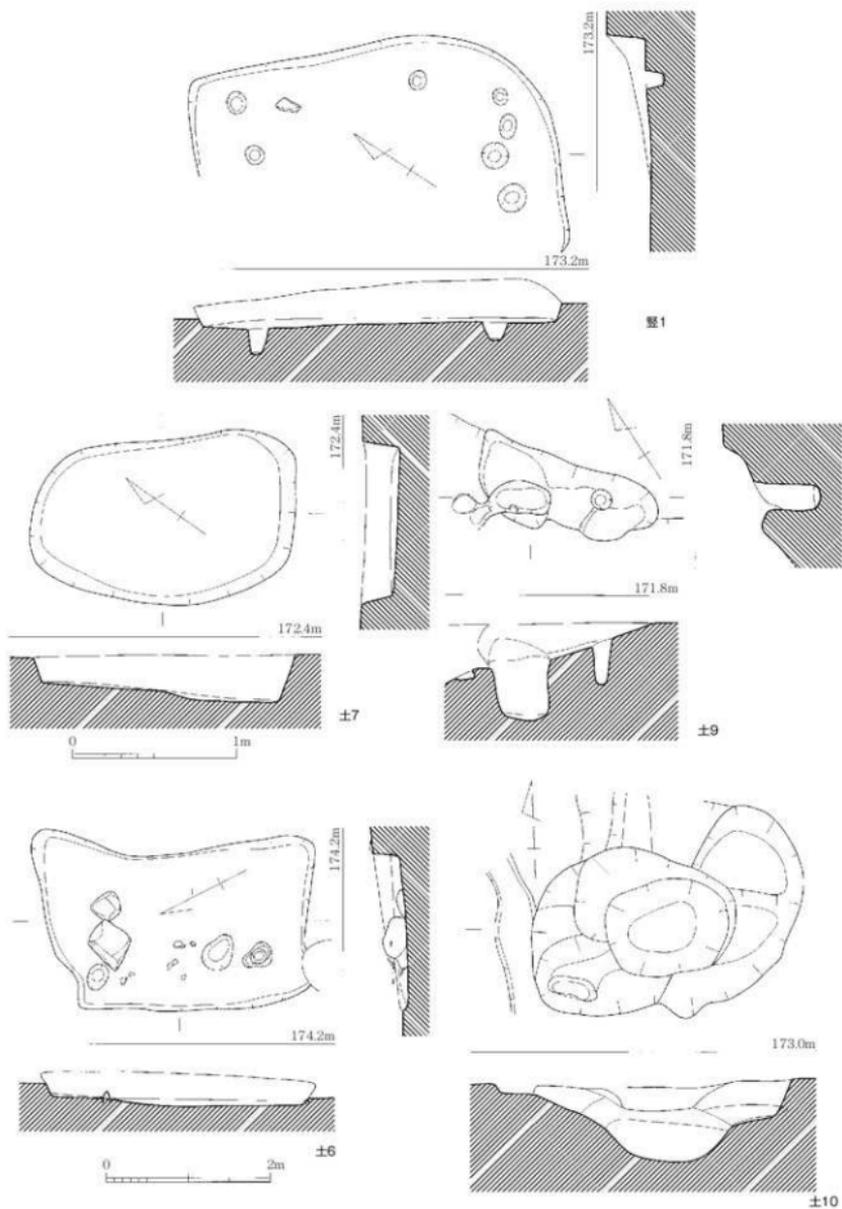
**縄文土器** (2・3) 2はいわゆる黒色磨研土器の深鉢である。胴部屈曲部より上が残存しており、ゆるやかに外湾しながら斜め上方に伸びる。器壁には内・外面ともに短いランダムな横方向ミガキを丁寧に施し、色調はともに暗褐色～黒色を呈する。3は鉢の底部片である。直径は、4cmとやや小型で、端部を弱く外に張り出す。器壁調整はナデか。

### 7号土坑（第80図）

6号土坑の西に隣接して検出された。これも遺物包含層である5層を掘り下げて存在が明らかになった遺構である。平面形状は不整長円形を呈する。残存規模は長辺1.5m、短辺1.1m、深さ17～30cmを測る。床面は平らで、南側に10cmほど下がる。埋土は上部が黒褐色土、下部が茶褐色土であった。土坑の周囲からは晩期土器が出土しているが土坑内からの遺物出土はない。

### 9号土坑（第80図、図版45）

調査区南部のD試掘グリッドの調査中に北西端部に遺構が検出されたため、グリッドを拡張して検出した遺構である。中央部西端の段落部にあたり、西側の大半は削平されていると考えられる。平面形状は長円形のプランをもち、法面には東西2ヶ所のピットがある。埋土は緻密な茶灰色砂質土で、深いピットの上層から中層にかけて、弥生時代前期後半～中期初頭の土器群が出土した。当遺跡では、B-5・6グリッドでも弥生土器が出土しており、ともにこの時期に断片的な生活が営まれたことを示す証拠である。



第80図 1号竪穴状遺構、6・7・9・10号土坑実測図(7号土坑は1/30、他は1/60)

出土遺物（第82図、図版48・49）

弥生土器（4～6） 4・5は甕である。4は胴上半～口縁部が残る資料で、器形は胴上位に最大径が位置し、口縁部は如意状に外反する。口縁部下に二条の沈線をめぐらせる。口縁部は四角く取め刻目はない。器壁調整に特徴があり、外面はハケ目で通有だが内面は横方向に丁寧なヘラミガキを施す。板付Ⅱ式でも新しい段階の資料で、前期末に近い後半であろう。5は底部から胴上位までの資料である。やはり胴部最大径がかなり上に来る器形で、底部はかなり厚底化している。器壁調整は外面がハケ目、内面はナデ。城ノ越式期の資料であろう。6は特殊な器形で、体部はゆるやかに内湾して口縁部付近は直立し、口縁部直下に鈎状の突帯をめぐらせる。類例から城ノ越式から須玖Ⅰ式期の高坏とみたいが、坏部がやや深く疑問も残る。器壁調整は内・外面ともにミガキを施し、突帯内面に指頭圧痕も残る。

#### 10号土坑（第80図）

1号竪穴状遺構の西側で検出された。東西3.1m、南北2mの不整形円形プランを持ち、堀方中央部付近で長円形状に50cmほど落ち込む二段掘りの土坑である。埋土より晩期土器、石鏃が出土しており、縄文時代晩期の遺構であろう。このうち石鏃について第86図7に示している。ただし図示できる土器はない。

#### 11号土坑（第81図、図版46）

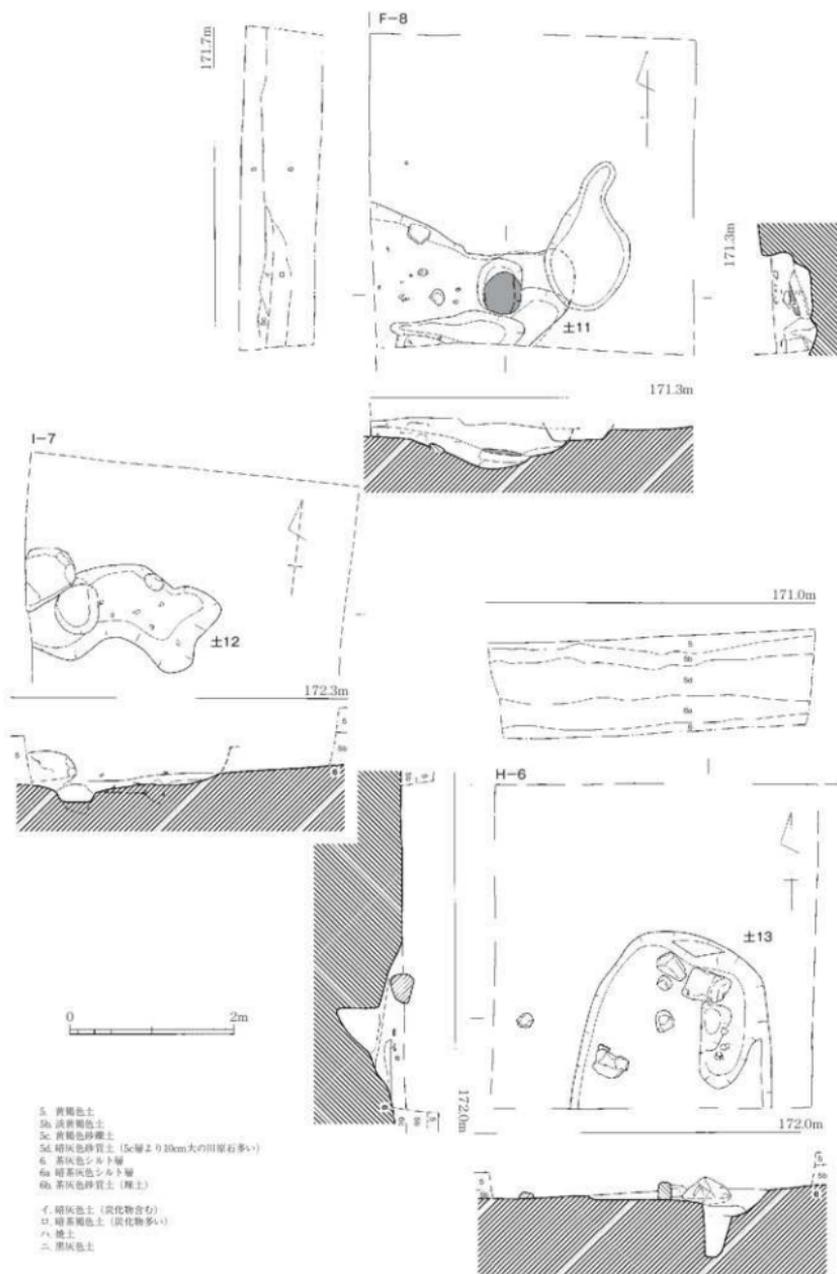
F-8グリッドの南側で、6層を掘り込む東西方向の不整形の土坑で、東端を別のピットに切られる。西・南側はグリッド外に伸びるため全形は不明で、調査区内での規模は東西2.4m、南北1.7mをはかる。土坑は東寄りに深くなり、深さは50cmほどが遺存する。最も深い部分に図示したように焼土が5cmの厚さで堆積する。西側の土層図により堀方が明瞭に観察でき、埋土上層は炭化物を含んだ暗灰色土、下層は炭化物を多量に含んだ暗茶褐色土である。埋土上層から薄手の表裏条痕文土器が出土しており、縄文時代早期の遺構と考えられる。ただし、図示できる遺物はない。

#### 12号土坑（第81図、図版46）

I-7グリッドにて検出された、5b層下部から掘り込まれた遺構である。上部では遺物の集中に気をとられていて遺構と認識できず、下層になって埋土と地山の区別ができることが判明し、土坑と判断した。東西に長い不整形円形プランで、西端は区域外に伸びる。規模は東西2.3m、南北0.9mで、西寄りに径50cmのピットを有する。土坑の上部から、全面にわたって中期末の阿高式土器が破砕された状況で出土した。出土遺物から、縄文時代後期の遺構と考えられる。

#### 出土遺物（第82図、図版49）

縄文土器（7～9） 7は深鉢の底～胴下位である。底部は直径16cmとかなり大きく、わずかに上げ底状を呈し、周囲が強く外に張る。底面はいわゆる鯨底である。胴部はやや強く内湾しながら開く。器壁調整は内・外面ともに工具を用いたナデか。8・9は深鉢の口縁部片である。ともに波状口縁で、8は突出部中央に1本の刻みを、9は2本の刻みを入れる。胴部外面には太いヘラ状工具を用いた直・曲線で文様をびっしりと描く。器壁調整は内・外面ともにナデ。これらはいずれも阿高式に属する資料である。



第81図 11～13号土坑実測図 (1/60)

### 13号土坑（第81図、図版46）

H-6グリッドの南側で、5b層の上面から掘り込まれた遺構である。半分以上が南側のグリッド外にひろがっており、検出状況での平面プランは長円形で、規模は幅が約2.4mをはかり幅広い土坑である。底面の東寄りに深さ70cmに達するピットがあるが、そのほかの部分は30cm程度の深さしかない。土坑内には川原石が散在する。口縁部直下に細い凸帯が付き、表裏条痕の深鉢1個体が出土した。出土遺物からおそらく縄文時代晩期と考えられる。

### 出土遺物（第82図、図版49）

**縄文土器**（10） 10は深鉢の胴上位～口縁部片である。胴部はゆるやかに屈曲し、口縁部は外湾しながら上方に伸びる。口縁部下に断面三角形の突帯を1条めぐられるが刻目はない。突帯はゆがみが大きく乱雑な印象である。器壁調整は外面に貝殻条痕がよく残り、内面は貝殻条痕の上からナデを施す。晩期の資料であろう。

## （4）その他の出土遺物

調査区からは、以上に述べたほかに包含層等からいくらかの土器が出土した。また、土器のほか各所から土製品・石器・石製品・銭貨などの雑多な遺物が出土した。これらの遺物についてはここでまとめて報告を行う。なお、土器以外の出土遺物のうち、遺構に伴うものについては各遺構の報告の項でも触れているので参照されたい。

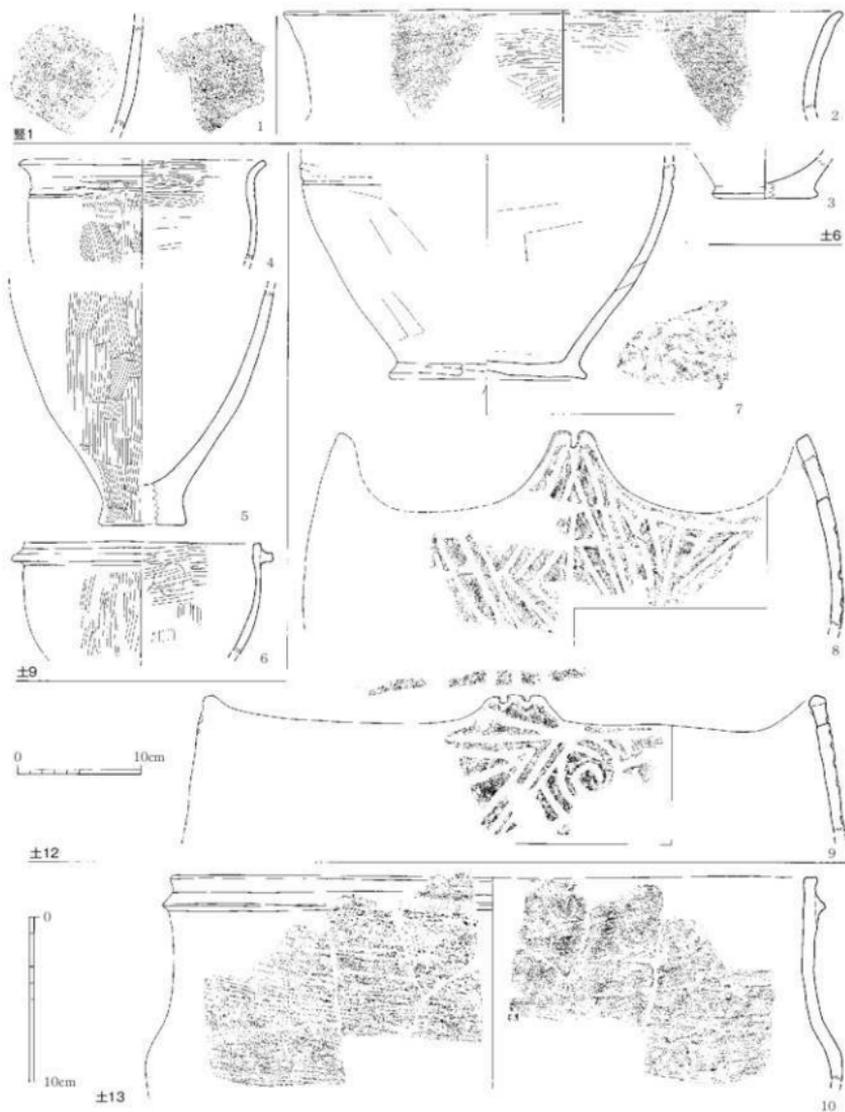
### その他の遺跡出土土器（第83図、図版49）

**縄文土器**（1～11） 1は鉢の口縁部付近の破片であろう。外面に貼り付け粘土瘤をひとつもち、早期柏原式に比定できる資料であろう。2・3も鉢の口縁部片か。2はやや内湾しながら斜めに伸びる器形で口縁部を丸く収める。3はやや直線的に伸びる。いずれも器壁外面に貝殻条痕がよく残り内面はナデ仕上げ。4は口唇部に一条の沈線をめぐらせ、内・外端部に刻目をめぐらせるものである。後期の資料か。6は粗製の深鉢で小形品である。7～10は浅鉢の口縁部片である。いずれも体部は斜め上方に伸び、口縁部下で内側に折れる。9はそのままだ口縁部にいたるが、7・10はもう一度外に折れて端部を上方に引き上げる。8は折れ方が未発達で端部を肥厚させるように処理する。天城式～古閑式期の資料であろう。11も浅鉢で胴部片である。わずかに内湾しながら斜めに広がり、器壁は内・外面ともにヘラミガキを施す。

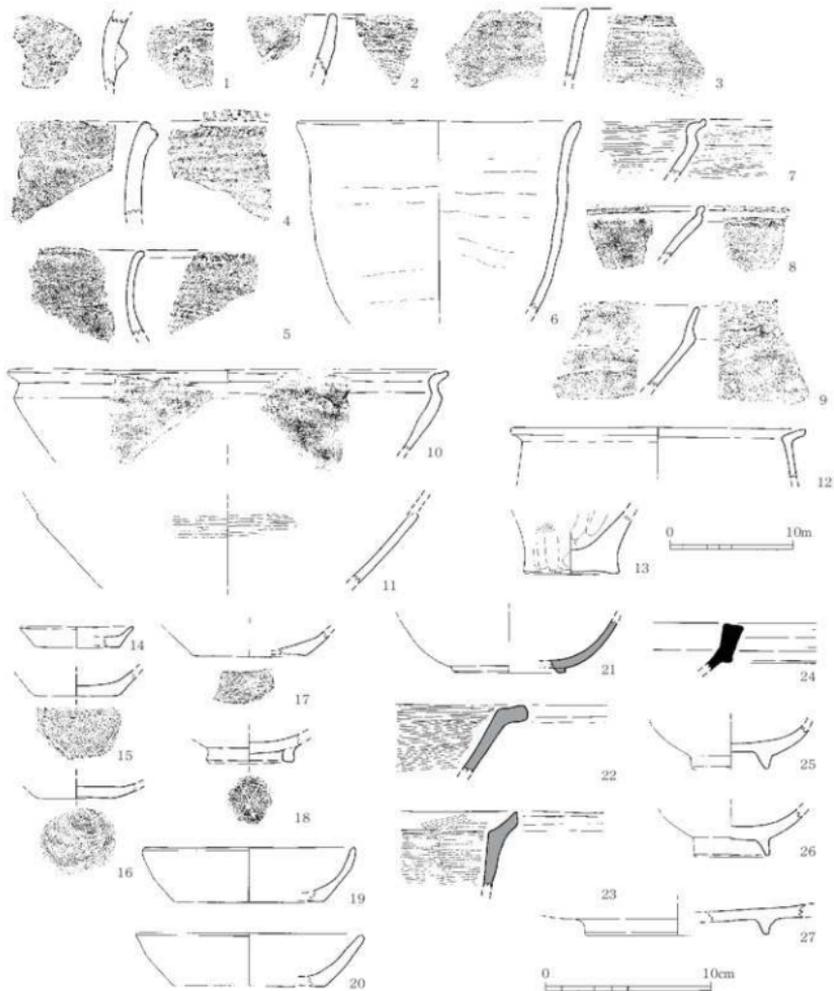
**弥生土器**（12・13） 12・13は須玖Ⅰ式の壺形土器である。胴部はわずかに内湾しつつ上方に伸び、口縁部下で直角に屈曲して口縁部は外に伸びる。13はやや厚底気味の壺の底部片である。

**土師質土器**（14～20） 14～17は土師皿である。いずれも底面は平坦で外面に糸切り痕跡が残り、短い口縁部がつく。19・20は坏である。底部は残りが悪いが糸切り痕跡が認められる。体部は内湾しながら斜めに伸びる。中世の資料であろう。19は碗であろうか。断面長方形のやや高い高台がつく土師質土器である。

**瓦質土器**（21～23） 21は碗である。体部は半球形で高台の断面形状は逆台形状を呈する。焼きがよく硬質である。22・23は鉢の口縁部片である。いずれも小片で径は復元できない。体部はわずかに内湾しながら斜めに開き、口縁部下で外に折れる。22は口唇部を四角く収め、23は口縁端部正面を上方につまみ上げる。いずれも中世の資料であろう。



第82図 下層各遺構出土土器実測図(4~9は1/4、他は1/3)

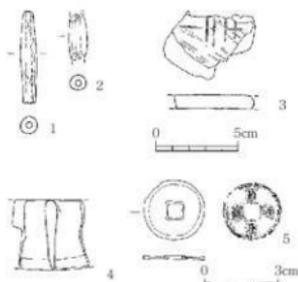


第83図 その他の遺跡出土土器実測図 (12-13は1/4、他は1/3)

**須恵質土器(24)** 24は須恵質土器の鉢の口縁部片であろう。小片で径は不明。口縁部を肥厚させる。中世の資料か。

**陶磁器(25～27)** 25・26は半球形の坏部とやや細く高い高台を持つ碗である。25は暗灰褐色のやや粗めの胎土を持ち、釉はやや厚めで気泡がみられる。高台接地部が露胎。陶胎染付か。26は灰黄褐色の胎土に黄茶色で透明感のある釉をかけるもので、唐津焼か。27は須恵質の胎土を持つ盤形の土器である。内面を丁寧にミガいており、近世～近代の捏ね鉢であろうか。

以上の資料はすべて表土(5層より上の遺物包含層)より出土したものあるいは上層の遺構検出



第84図 遺跡出土土製品・石製品・  
銭貨実測図 (5は1/2、他は1/3)

中に出土したもので、一部に表採品を含む。

その他の出土遺物 (第84～86図、図版50)

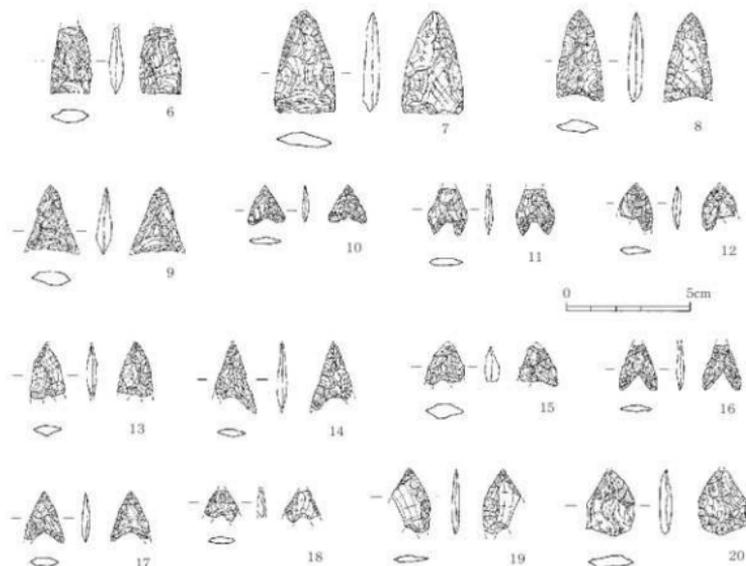
**土製品 (1・2)** 1・2は土師質の管状土錘である。1は黒褐色を呈し、全形は細身の筒状を呈し、完形品である。紋りによる凹面が上下に見られる。長さ5.55cm、最大幅1cm、孔径0.3cm、重さ5.25gを測る。Pit79出土。2は上下を欠損する中膨らみの形状を持つ土錘である。表面には化粧土が施され、赤黄褐色をなす良品である。残存長は2.8cm、最大幅は1.0cmをはかる。表土層中の出土。

**石製品 (3・4)** 3はゆるやかに湾曲する残存長さ9mm弱の

板状滑石片で、表面に横1条、縦方向にそれを切る極めて細い4条の直線が刻まれる。滑石の表面には斜め方向の調整痕が残り、表面には多量の煤が付着するので石鍋片であろう。Pit84出土。4は灰褐色の片岩に研磨を加えた用途不明石器である。上下両端の研磨が特に丁寧に施され、下半には軽い稜が走る。幅4.35cmで、Pit90出土。

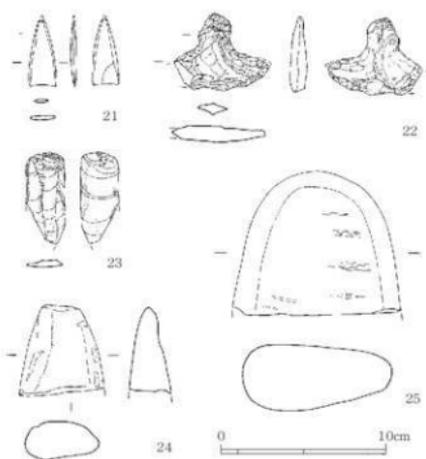
**銭貨 (5)** 5は調査区のほぼ中央部に遺構検出中に出土した銭貨で、寛永通宝である。直径2.42cm、孔径0.6cm、厚さ1.3mm、重さ1.65gをはかる。

**石器 (6～25)** 6～20は打製石鏃である。6・7が平基で、そのほかは凹基無茎である。6は先端を欠損するが二等辺三角形形状を呈す鋸歯鏃である。残存長さ2.7cm、幅1.55cm、重さ2.25gをはかる。7も二等辺三角形で大型の完形品である。全面に粗い調整を加えて成形する。長さ4.1cm、幅2.4cm、



第85図 遺跡出土石器実測図その① (1/2)

厚さ0.6cm、重さ6.4gをはかる。8は完形品で、横長の剥片を素材とする。片面に自然面を残し、背面の調整剥離は丁寧である。長さ3.45cm、幅1.85cm、厚さ0.66cm、重さ3.9gである。9は階段状剥離痕が残る挟りの浅い石鏃である。両側縁がやや内湾する特徴がある。厚さが0.65cmと分厚い。長さ2.7cm、遺存幅2.0cm、重さ2.25gである。10は小型の石鏃でハート状を呈す完形品である。長さ1.6cm、幅1.5cm、厚さ0.25cm、重さ0.4gをはかる。11は五角形鏃で先端部を欠損する。幅1.6cm、厚さ0.3cm、遺存長さは1.9cmをはかる。12は凹基無茎の打製石鏃である。幅広の横長剥片を素材とし、やや粗い調整を施す。姫島産の黒曜石製で、残存長さは1.75cmをはかる。13は両脚を欠損する。残存長さ2.25cm、残存幅1.3cm、厚さ0.3cmをはかる。14は鋸歯鏃である。残存長さ2.3cm、残存幅1.7cm、厚さ0.3cmをはかる。15は先端部、両脚を欠損する石鏃である。全体に粗い調整を施す。厚さが0.6cmとやや厚い。16は鋸歯鏃で、深い挟りを有する。長さ1.78cm、幅1.5cm、厚さ0.3cm、重さ0.4gをはかる。17は主要剥離面を残すほぼ完形の石鏃。長さ1.95cm、幅1.6cm、厚さ0.33cm、重さ0.65gをはかる。18は石鏃の胴部片で、先端部と脚部を欠損する。遺存長さ1.3cm、遺存幅1.4cm、厚さ0.3cmをはかる。19は側縁が外湾する石鏃で、薄い幅広剥片の周囲に細かい調整を施す。片側の脚部全体と、もう一方の脚部先端が欠損する。遺存長さ2.7cm、遺存幅は1.4cmをはかり、厚さ0.28cmと薄い。20は未成品で、粗い調整痕を残す。長さ2.6cm、幅2.0cm、厚さ0.6cmをはかる。6～9・13は安山岩、10はチャート、11・14～19は姫島産黒曜石、20は漆黒の黒曜石製。6・7・11はE-7グリッド5層、8はB-5グリッド5層、9はI-9グリッド6層、10・13・19・20は表土層、12は10号土坑、14はEグリッド5層、15はAグリッド5層、16はAグリッド6層、17はPit91、18はE-9グリッド5層より出土した。21は弥生時代とみられる磨製石鏃で先端部を欠損する。基部は浅く内湾し、外湾する両側縁に沿って稜線が走る。軟質の頁岩製で、弥生土器が散見される北側調査区の5層より出土した。遺存長さ4cm、幅1.7cm、厚さ0.3cm、重さ2.3gをはかる。22は安山岩製の横型石匙。幅2cmに近い幅広で大きな摘み部、短い刃部幅が特徴的で、摘み部、刃部を中心に丁寧な調整を施す。長さ4.6cm、遺存幅5.7cm、厚さ1.0cm、重さ19.8gをはかる。Bグリッド付近の4層出土。23は背面に二条の稜線が走る漆黒の黒曜石製の縦長剥片で、わずかに自然面が残る。側縁に刃毀れ等は認められない。長さ5.55cm、幅2.3cmを測る。24は細身の頭部の乳棒状刃片で、軽い磨き稜が残る。遺存長さ5.5cm、厚さ2.4cm。Aグリッド5層出土。25は長円形を呈す硬砂岩製の磨石の半欠品で、よく磨かれた広い平坦面を有す。径88×10.4cm、厚さ4cmをはかる。P123より出土。



第86図 遺跡出土石器実測図その② (1/3)

第86図 遺跡出土石器実測図その② (1/3)

## 4 小結

下伊良原中ノ切遺跡では、縄文時代早期から近世にいたる各種の遺構・遺物を調査した。最後に、調査成果について簡単に概観し、まとめたい。

まず、下層で検出した遺構群についてみたい。

最も古く位置づけられるのが11号土坑である。小片で図示できなかったが薄手の条痕文土器が出土しており、早期に位置づけられる。包含層からも、外面の口縁部下に貼付粘土層をもつ柏原式土器が出土しており、早期の遺構が存在することを裏付けよう。

下層検出の資料の中で最も量が多いのが、縄文時代中期末～晩期の遺構・遺物である。12号土坑からは阿高式土器がまとめて出土し、5・6層包含層からも阿高式系土器が一定量出土した。6層包含層からはほかに、後期擦消縄文土器も少量ではあるが出土している。さらに、13号土坑等からは晩期黒色磨研土器なども少量出土しており、縄文時代後～晩期を通じて散発的な生活が行われたことを示す。

なお、包含層における土器の出土状況は各時期の土器が混在した状況を示す。このことから、包含層の形成は流れ込みや攪乱の影響を強く受けている可能性が高いと考えられる。

次に上層で検出した遺構群についてである。

中世においては、3棟の掘立柱建物跡とこれに伴う柵列を調査した。これらの遺構群は、その配置がおおよそ規格的であり、相互に切り合い関係を持たず十分に離れていることから、おおよそ同時代併存として理解できるものであろう。単一の屋敷地を調査したものと考えたい。出土遺物に乏しく、所属時期を検討することができなかったのは残念であった。

また、これらに伴う可能性のある遺構として6基の土坑と1基の土壇墓を調査した。土坑として報告したうちの5基は、平・断面形状も深さもまちまちで、その性格については検討を深めることは難しいが、4号土坑のみは1号土壇墓と平面形状がよく似ており土壇墓である可能性も否定できない。掘立柱建物跡・柵列からなる屋敷地に対応する墓ではなかろうか。

近世の遺構として、巨石を埋めた土坑を12基調査した。廃棄土坑として報告したが、本文中でも触れたように、土坑内に埋まった巨石の上面がおおよそ水田造成面のレベルと一致することから、水田開発に際して、地表に点在していて耕作の邪魔になる巨石を、一部は分割するなどして運び出し、大きすぎて搬出できないものについて近くに穴を掘って埋めたものと理解できる。従ってこれらの土坑は水田開発に伴うものと考えられる。土坑内からの出土遺物はごくわずかで埋没時期を決定づける資料には乏しいが、石を割る際に穿たれた矢穴の大きさなども考え合わせれば、おおよそ近世期の遺構として大過ないだろう。それまで耕地化できなかった丘陵裾部の緩斜面を段切り造成して、近世期に大々的な水田開発が行われたことを物語る資料として貴重である。

この他、ごく少量ではあるが弥生時代前期・中期の資料も見られた。伊良原地区では弥生時代前期末～中期中葉にかけて各所で少量の土器が出土する傾向があり、散発的な居住が試みられたことを示すものであろう。

## VIII おわりに

以上、伊良原地区において平成22-23年度に発掘調査を行った各遺跡について、その成果を通覧してきた。調査成果をもとに、縄文時代から近世にいたる伊良原地区の人々の生活の様相について簡単に触れて結語としたい。

今回報告する資料の中で最も古く位置づけられるまとまった資料は、押型文土器である。縄文時代早期中葉に位置づけられる山形の押型文を施す黄島式土器が、また後続する資料として早期末葉に位置づけられる塞ノ神B式土器も、ともに下伊良原東向川原遺跡より一定量まとまって出土した。これまでも上伊良原榎遺跡で早期初頭の柏原式土器が、また上高屋台ノ原遺跡で押型文土器がそれぞれ一定量出土するなど、早期の遺物は散見されていた。今回報告した資料はこれらの資料に加わるもので、県内では数の少ない縄文時代早期の資料として貴重であろう。

前期の資料として、縄文並行期の南九州の土器として知られる西ノ齒式土器が下伊良原フラノ遺跡から出土した。先行研究によれば、西ノ齒式は約7,300年前の鬼界カルデラの噴火に伴って噴出した鬼界アカホヤ火山灰の上位より出土し、編年的には同じくアカホヤ火山灰上位より出土する縄B式と下位より出土する縄A式との中間に位置づけられる土器形式とされる。このような資料が北部九州の山間部で点的に出土する背景には、おそらく鬼界カルデラの噴火により南九州地域が壊滅的な打撃を受けたことがあるものとみられ、きわめて興味深い。後続する縄B式土器は、これまでも上伊良原榎遺跡・下伊良原原田ノ谷遺跡・下伊良原寺ノ谷遺跡等から散発的に見つかり、今回報告した資料の中にも上伊良原マトコロ遺跡などに散見される。一方、前期曾畑式土器はほとんど見つからないことから、伊良原地区では鬼界カルデラの噴火後は早期を通じて散発的な生活が試みられたものの前期までには消滅したものとみたい。

次に資料が見られるのが中期末～後期である。今回報告資料の中では、上伊良原マトコロ遺跡で阿高式(系)土器がまとまって出土したほか、下伊良原中ノ切遺跡でも多くの阿高式(系)土器が出土した。後期擦消縄文土器も、やはり上伊良原マトコロ遺跡・下伊良原中ノ切遺跡で出土しており、中期末から後期にかけて散発的な居住が行われたことを示すものであろう。

後期の資料に比べて晩期黒色磨研土器や刻目突帯文土器は少ないが、上記2遺跡に加え下伊良原フラノ遺跡でも若干の出土があり、生活の範囲としてはやや広がるのであろう。一方弥生～古代の資料はほとんど出土しない。これらは従前より伊良原地区における傾向としてよく知られるもので、今回報告した各遺跡においても同様の成果が得られたということであろう。

中世には再び伊良原地区の各所で集落が営まれる。今回報告した遺跡でも、下伊良原中ノ切遺跡で掘立柱建物3棟や櫓列などからなる集落の一部を検出したほか、上伊良原マトコロ遺跡・下伊良原羽後屋敷遺跡で中世に属する集落の一部を検出した。特に下伊良原羽後屋敷遺跡で調査した土壘墓からは船載陶磁器が副葬品として出土した点が注目される。祇川流域に居宅を構えた城井宇都宮氏一族による地域開発の一環として本地域の開発が行われたものと考えられ、注目される。

近世の遺構としては、下伊良原中ノ切遺跡の水田開発に伴うと考えられる廃棄土坑等が挙げられるが、これらは生業にかかる遺構である。この時期の集落は現在の集落とほぼ重なると考えられ、集落移転後の発掘調査が注目されるであろう。

# 图 版



1. 調査前の上伊良原マツコロ遺跡（西から）



2. I区全景（西から）



1. I区全景 (南西から)



2. II区全景 (北から)



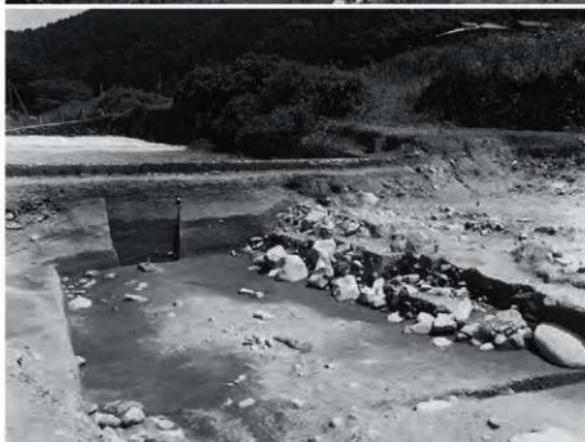
3. II区南半と護岸 (南から)



1. III区からIV区をのぞむ（北から）



2. IV区全景（南から）



3. IV区縄文調査区（南から）



1. I区北壁土层



2. II区西壁土层



3. IV区北壁土层

1. 1号竪穴状遺構（西から）



2. I区掘立柱建物跡、2・3号柵列（北から）



3. 1号柵列（南から）





1. 2号堅穴状遺構上面（南から）



2. 2号堅穴状遺構（南から）



3. 2号堅穴状遺構遺物出土状況



1. 1号土坑（南から）



2. 2号土坑（西から）



3. 4号土坑（東から）



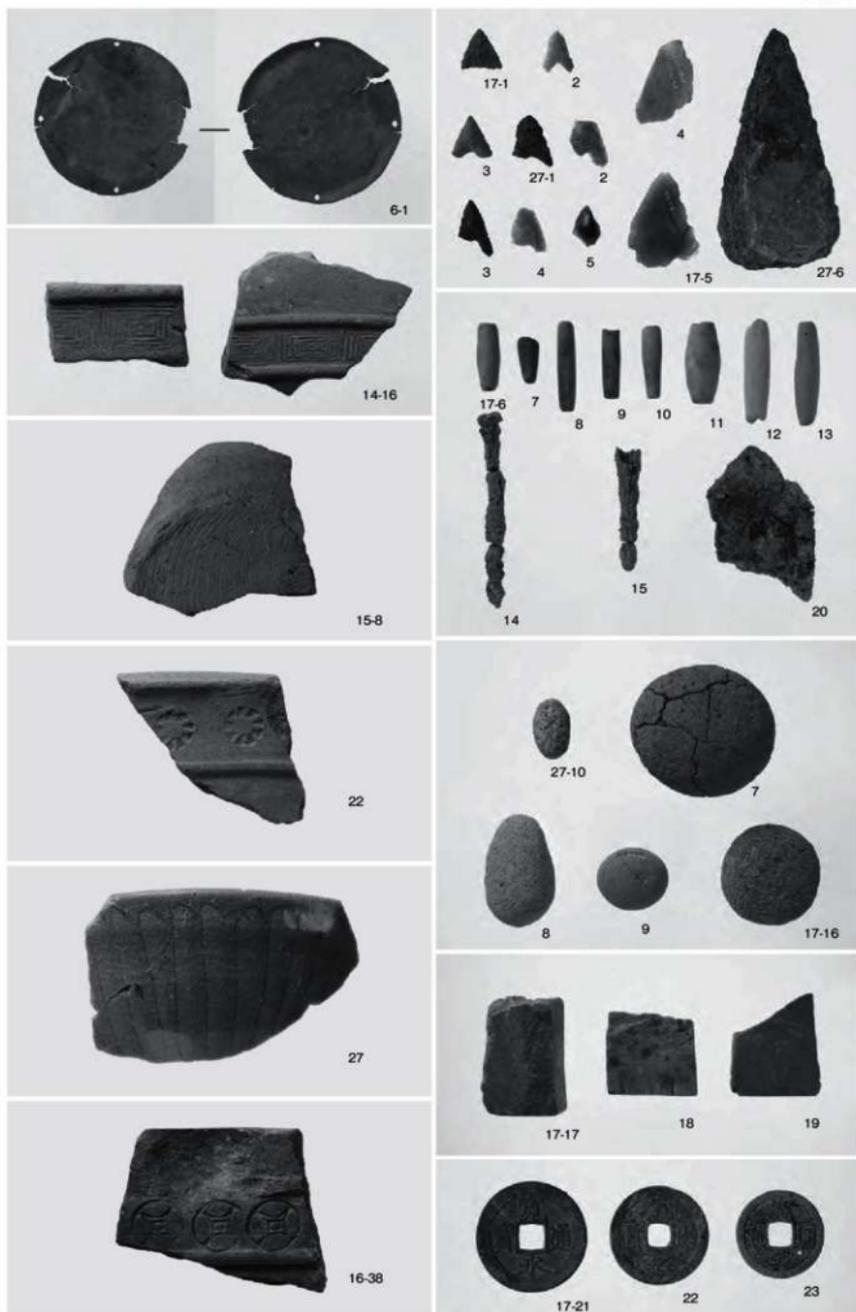
1. III区 8層直上の調査区全景  
(南から)



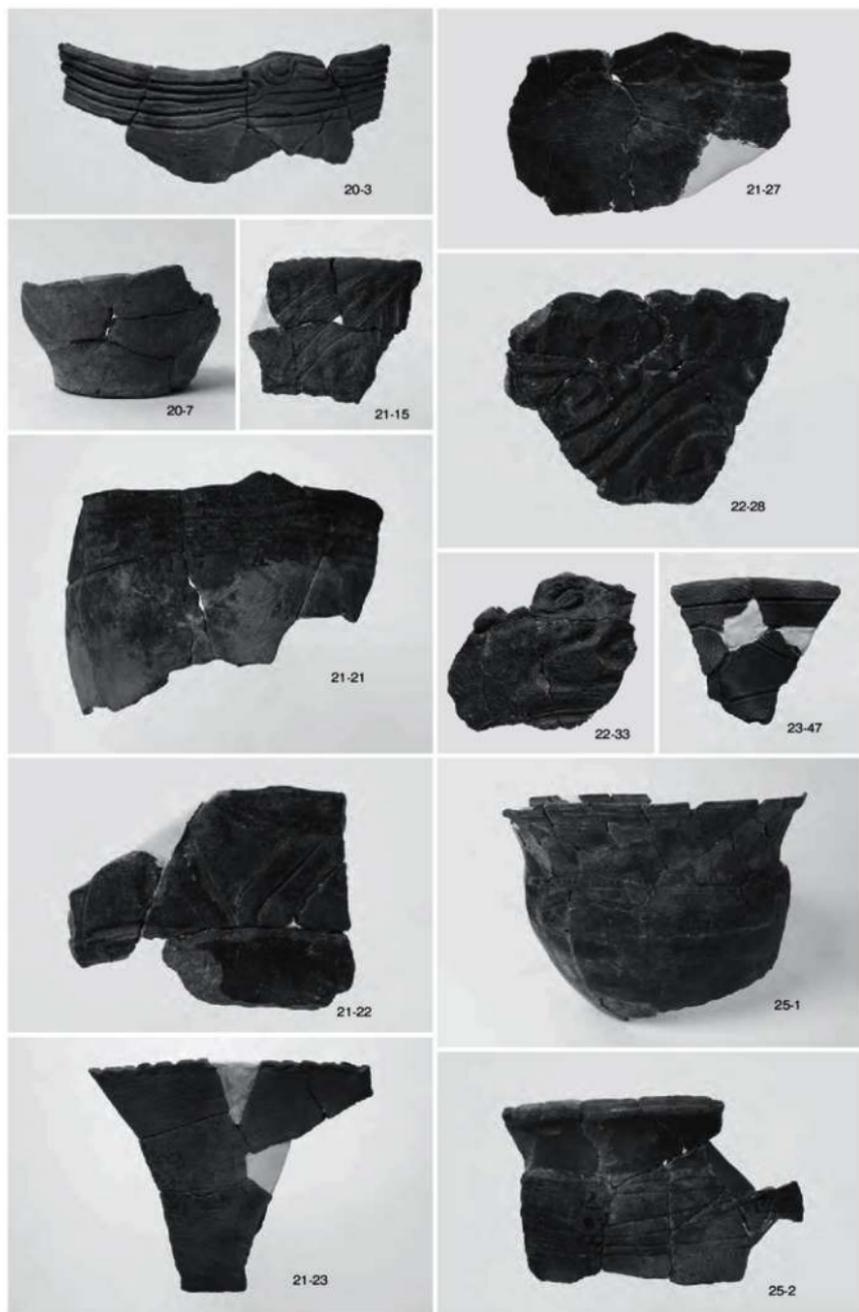
2. IV区 9層直上の調査区全景  
(南から)



3. IV区 8層遺物出土状況



上伊良原マトコロ遺跡出土遺物その①



1. 下伊良原フラノ遺跡全景  
(東から)



2. 遺跡より伊良原小学校をのぞむ  
(西から)



3. 調査区全景 (南から)





1. 北壁土層 (南西から)



2. 1号溝・土層 (南から)



3. 1号落ち込み状遺構 (南から)

1. 北西端の下層調査区（西から）

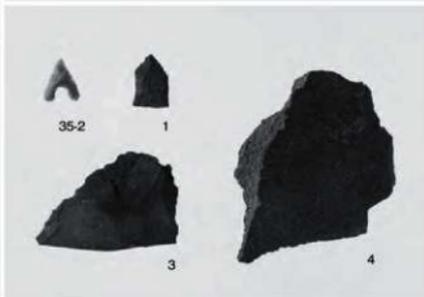
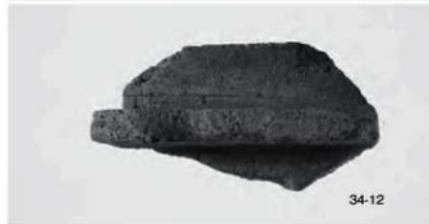
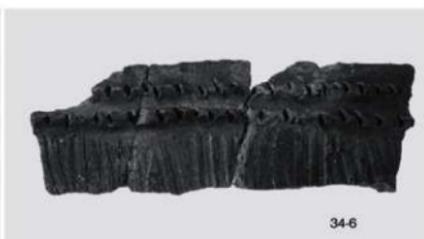


2. 1号土坑（東から）



3. 2号土坑（南から）







1. 調査前の下伊良原東向川原遺跡と蔵川（北から）



2. ドングリ貯蔵穴群全景（南から）



1. 遺跡南半全景（北から）



2. 遺跡中央部全景（西から）



3. 遺跡北半全景（西から）

1. 南壁基本土層



2. 下層調査グリッドH-10区  
基本土層



3. 下層調査グリッドK-6区  
基本土層





1. 貯蔵穴群（西から）



2. 1号貯蔵穴内ドングリ出土状況  
（上層）



3. 1号貯蔵穴土層（東から）

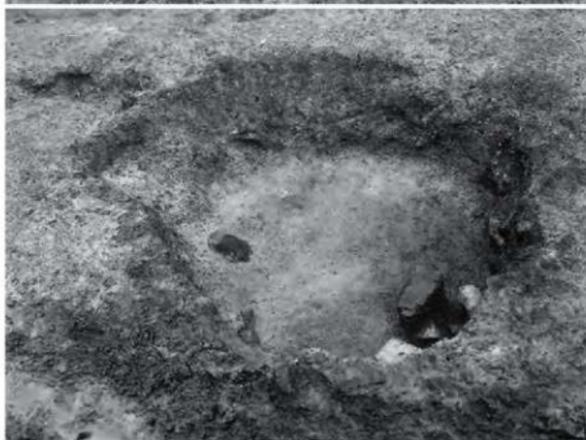
1. 2号貯蔵穴上層遺物出土状況  
(東から)



2. 3号貯蔵穴上層遺物出土状況  
(西から)



3. 3号貯蔵穴完掘状況 (南西から)





1・5・6号貯蔵穴（北から）



2・5～8号貯蔵穴  
（北から）



3.1・2号溝と5号貯蔵穴（北から）



1. 1号土坑（南から）



2. 2号土坑（西から）



3. 杭列（南から）



1. 1・2号落ち込み状遺構（西から）



2. 1号落ち込み状遺構土層  
（南から）



3. 2号落ち込み状遺構土層  
（北から）

1. C・D - 11・12 区上層 (南から)



2. C・D - 11・12 区 4b 層遺物出土  
状況



3. C・D - 11・12 区 5 層完掘状況  
(南から)





1. F - H - 10・11 区完掘状況  
(西から)



2. H - 11 区 5 層遺物出土状況



3. 3・4号土坑(南から)



1. J-L-4~6区遠景(北西から)



2. J-L-4~6区完掘状況  
(西から)



3. K-5区4b層遺物出土状況



1.5号土坑上層掘削状況(南から)



2.5号土坑遺物出土状況(南東から)



3.5号土坑完掘状況(西から)



下伊良原東向川原遺跡出土遺物



1. 下伊良原羽後屋敷遺跡全景  
(北から)



2. 下伊良原羽後屋敷遺跡全景  
(東から)



3. 下伊良原羽後屋敷遺跡全景  
(西から)

1. 調査区中央部の基本土層  
(南から)



2. 段落ち部の黒灰色粘質土層堆積  
状況 (南から)



3. 1号土坑 (西から)





1.3号土坑 (西から)



2.2・4号土坑 (西から)



3. 4号土坑大石除去後 (西から)

1. 1号土壙墓（西から）

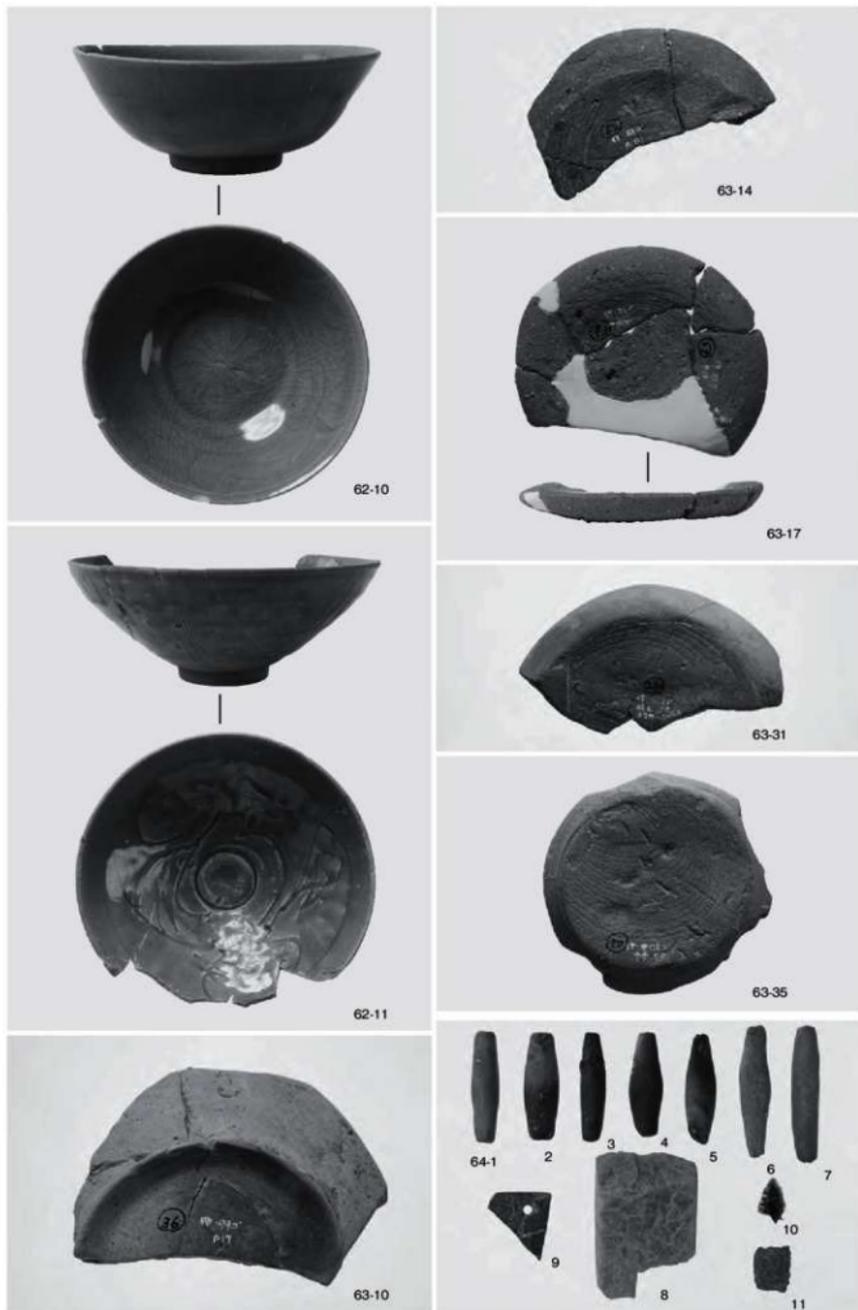


2. 2号土壙墓（南から）



3. Pit16の管状土錘出土状況





下伊良原羽後屋敷遺跡出土遺物



1. 下伊良原中ノ切遺跡  
上空より北をのぞむ



2. 下伊良原中ノ切遺跡  
上空より南をのぞむ



1. 下伊良原中ノ切遺跡  
全景（上が北）



2. 下伊良原中ノ切遺跡  
中央部全景（上が北）

1. 調査区北半 (南から)



2. 調査区南半 (北から)



3. 調査区遠景 (北から)





1. 北東壁基本土層（西から）



2. 北壁基本土層（南から）



3. 南西壁基本土層（北から）



1. 廃棄土坑群全景（東から）



2. 1号廃棄土坑（南から）



3. 2号廃棄土坑（南から）



1. 3号廃棄土坑（北から）



2. 3号廃棄土坑出土石材の矢跡



3. 4・6号廃棄土坑（北から）

1. 1号掘立柱建物跡（東から）



2. 3号掘立柱建物跡（北から）



3. 1・2号櫓列（北から）





1. 3～5号柵列 (東から)



2. 1号土坑 (南から)



3. 3号土坑 (西から)



1. 4号土坑 (南から)



2. 5号土坑 (南から)



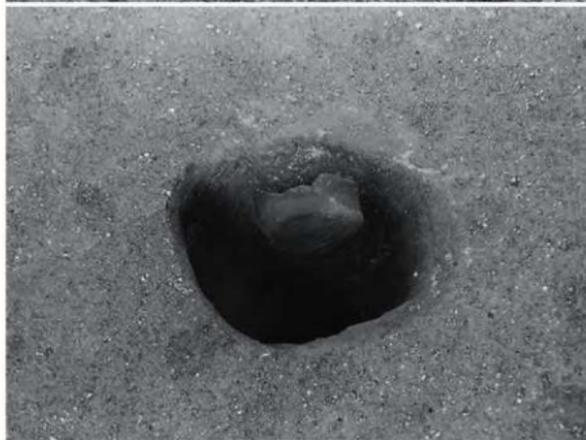
3. 8号土坑 (北から)



1. 1号土坑墓（北から）



2. Pit17の小皿出土状況



3. Pit44の土師器坏出土状況



1. 下層調査グリッド（南西から）



2. 下層調査グリッド（北西から）



3. 下層調査区B区（東から）



1. 下層調査区D区 (東から)



2. 下層調査区E区 (西から)



3. 下層E区6層遺物出土状況

1.1号竪穴状遺構（南から）



2.6号土坑（南から）



3.9号土坑（東から）





1. 11号土坑（東から）



2. 12号土坑（東から）



3. 13号土坑（南から）



1. 下層グリッドE-9区完掘状況  
(南から)



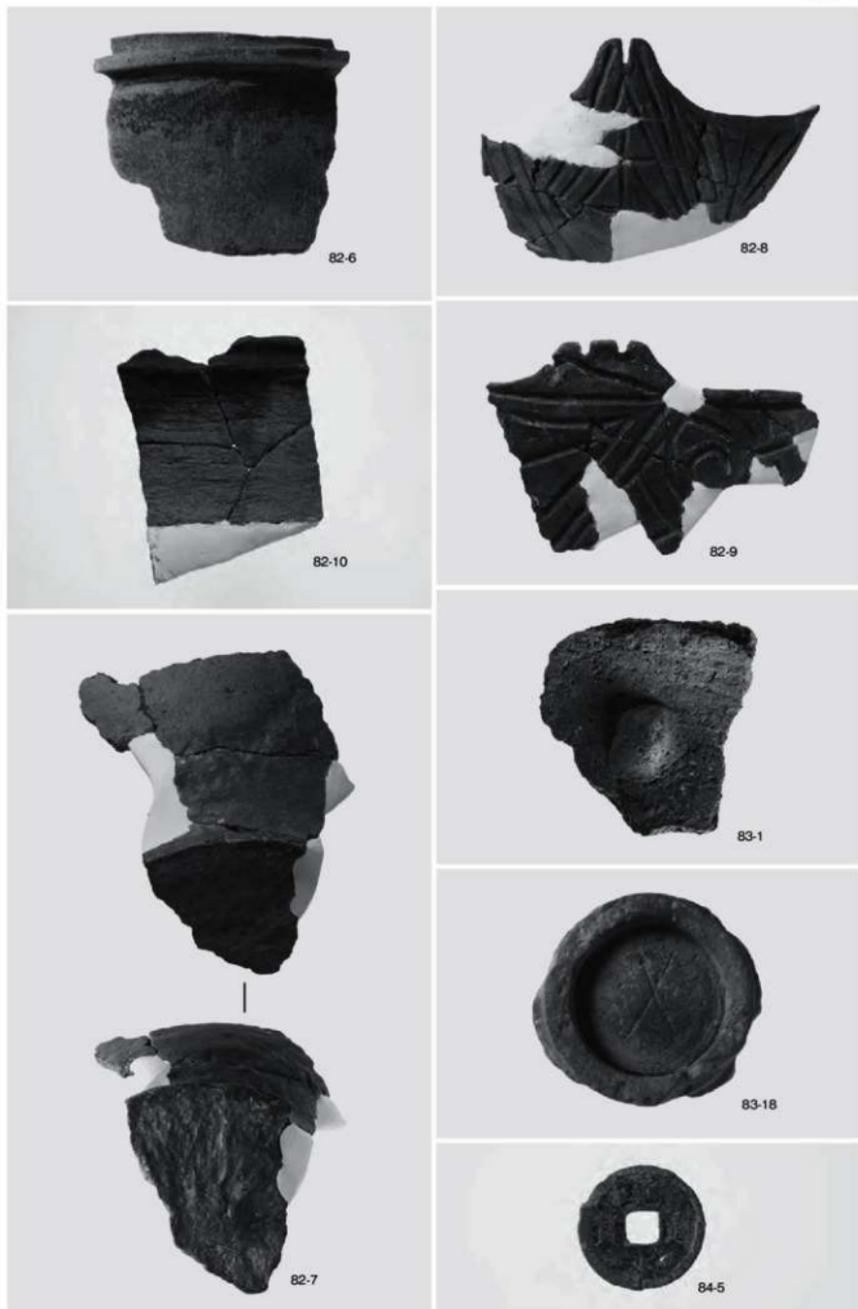
2. 下層グリッドF-10区完掘状況  
(南から)



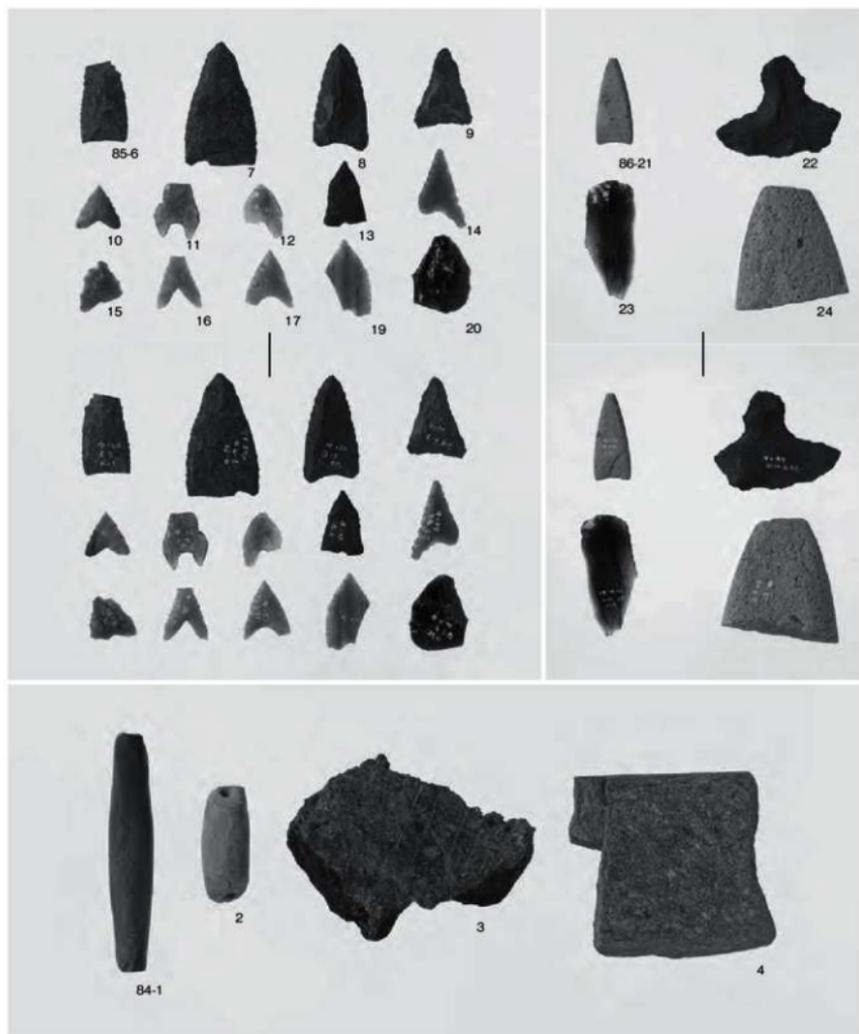
3. 下層グリッドI-7区完掘状況  
(南から)



下伊良原中ノ切遺跡出土遺物その①



下伊良原中ノ切遺跡出土遺物その②



下伊良原中ノ切遺跡出土遺物その③

# 報告書抄録

ふりがな	いらはら 4 かみいらはらまところいせき・しもいらはらふらのいせき・しもいらはらひがしむかいかわらいせき・しもいらはらほごやしきいせき・しもいらはらなかのきりいせき							
書名	伊良原 IV 上伊良原マトコロ遺跡・下伊良原フラノ遺跡・下伊良原東向川原遺跡・下伊良原羽後屋敷遺跡・下伊良原中ノ切遺跡							
副書名	伊良原ダム関係埋蔵文化財調査報告-4-							
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書							
シリーズ番号	255							
編著者名	小川泰樹(編)・木下修・小澤佳憲							
編集機関	九州歴史資料館							
所在地	〒818-0118 福岡県小郡市三沢 5208-3 (Tel: 0942-75-9575, Fax: 0942-75-7834) HP: <a href="http://www.fsg.pref.fukuoka.jp/kyureki/">http://www.fsg.pref.fukuoka.jp/kyureki/</a>							
発刊年月日	2017年(平成29年)3月31日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かみいらはらまところ	みやこぐんみやこまちさいがわかみいらはら 京都府みやこ町厚川下伊良原 130、 131、139-1～3、140-1・6、140-3	40625		33° 34' 46"	130° 57' 08"	H2210.25   H2310.14	2,260㎡	ダム建設
上伊良原マトコロ 遺跡	種別	おもな時代	おもな遺構	おもな遺物		特記事項		
	集落	縄文時代	土坑・包含層	縄文土器・石器		阿高式(系)土器		
	集落	中世	掘立柱建物跡	土師質土器		後期擦消縄文土器		
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しもいらはらふらの	みやこぐんみやこまちさいがわしもいらはら 京都府みやこ町厚川下伊良原 1959-2	40625		33° 34' 10"	130° 56' 57"	H2310.25   H2312.6	2,100㎡	ダム建設
下伊良原フラノ 遺跡	種別	おもな時代	おもな遺構	おもな遺物		特記事項		
	集落	縄文時代	土坑・包含層	縄文土器・石器		西ノ蘭式土器		
	集落	中世	土坑・包含層	縄文土器・石器		西ノ蘭式土器		
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しもいらはらひがしむかいかわら	みやこぐんみやこまちさいがわしもいらはら 京都府みやこ町厚川下伊良原 737、 738、742～746	40625		33° 35' 18"	130° 56' 53"	H2312.6   H243.21	3,900㎡	ダム建設
下伊良原東向川原 遺跡	種別	おもな時代	おもな遺構	おもな遺物		特記事項		
	集落	縄文時代	包含層・土坑	縄文土器・石器		押型文(黄鳥式)土器		
	集落	近世	貯蔵穴	ドングリ		寒ノ神B式土器		
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しもいらはらほごやしき	みやこぐんみやこまちさいがわしもいらはら 京都府みやこ町厚川下伊良原 291-2	40625		33° 34' 05"	130° 57' 01"	H246.6   H249.5	1,350㎡	ダム建設
下伊良原羽後屋敷 遺跡	種別	おもな時代	おもな遺構	おもな遺物		特記事項		
	墓	中世	土墳墓・土坑	青磁碗				
	墓	中世	土墳墓・土坑	青磁碗				
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しもいらはらなかのきり	みやこぐんみやこまちさいがわしもいらはら 京都府みやこ町厚川下伊良原 509-1、 510-1、512	40625		33° 34' 40"	130° 57' 01"	H248.12   H253.12	4,600㎡	ダム建設
下伊良原中ノ切 遺跡	種別	おもな時代	おもな遺構	おもな遺物		特記事項		
	集落	縄文時代	土坑	縄文土器・石器		擦消縄文土器		
	集落 生産	中世 近世	掘立柱建物跡 土坑	土師質土器		黒色磨研土器		

調 査 の 概 要	上伊良原マトコロ遺跡では、上層で掘立柱建物跡や櫛列などからなる集落跡を、また下層では縄文時代の土坑や包含層を調査し、阿高式（系）土器などが出土した。
	下伊良原フラノ遺跡では、縄文時代の土坑を調査し、西ノ蘭式・轟B式土器などが出土した。
	下伊良原東向川原遺跡では、上層でドングリが詰まった貯蔵穴を調査した。近世の所産と考えられる。また下層では、縄文時代早期塞ノ神B式土器が出土する土坑などを調査した。
	下伊良原羽後屋敷遺跡では、中世の土坑や土壙墓を調査した。土壙墓からは副葬された青磁碗が出土した。
	下伊良原中ノ切遺跡では、上層で中～近世の集落・（推定）水田跡を調査した。また下層では縄文時代後期擦消縄文土器・晩期黒色磨研土器が出土する土坑を調査した。

福岡県行政資料	
分類番号	所属コード
JH	2117104
登録年度	登録番号
28	2

## 伊良原IV

上伊良原マトコロ遺跡・下伊良原フラノ遺跡・  
下伊良原東向川原遺跡・下伊良原羽後屋敷遺跡・  
下伊良原中ノ切遺跡

平成 29 年 3 月 31 日

発行 九州歴史資料館  
〒 838 - 0106 福岡県小郡市三沢 5208 - 3  
印刷 大同印刷株式会社  
〒 849 - 0902 佐賀県佐賀市久保泉町大字上和泉 1848 - 20